
Blue Sky

レルミア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Blue Sky

【Nコード】

N2661X

【作者名】

レルミア

【あらすじ】

第三次世界大戦、勃発。

それをきっかけに様々な事件が起こり、消えていく。

二つの国にはさまれた独立地区に暮らす人々と、二つの国に棲む人々の話。

プロローグ

「おいヤニ坊よオ、ちょうちん三つ作ってくれねーかア？」

無精ひげを生やした不快な人間が一人、戸を開けて家に入ってきたがそんな事を言って依頼をしてくる。

「ヤニ坊って呼び方やめろって言ってんだろ？」

自分でもわかる程に鼻に掛かった気だるげな声で答える。

「つってもよお、もう三年もこの呼び方だろ？一日二日で変えろっていわれてもよお」

ところどころ寝癖のようなものが立つ自分の髪をいじくりながらカウンターへ出る。

「なんだっけちょうちん？なんだってそんなものを」

ヤニ坊と呼ばれた事に若干の不快感を覚えながら聞くと、目の前の無精ひげを生やした大野という人間は笑って言う。

「いや、そろそろ天賦祭だろ？それで使うちょうちんが三つ壊れてたんでよ、手先の器用なお前に頼みに、な」

天賦祭。

「まだその名前使ってんのかよ。それ日本語間違ってるって」

「つるせえなあ。シルヴァのお前にあわからねえだろうけどな。日本語ってのはその場で意味が変わるんだよ」

「話題は変わるけどお前な、俺がいくら気にしないからって元差別用語のシルヴァを平然と使うのはどうなんだ？」

ヤニ坊・・・もといヤイナ・フレイニアという名前の少年が目の前の無精ひげを人間をたしなめるように言う。

「あー・・・悪い悪い。あまりにもお前が気にしないし元差別用語って事を忘れちゃってたわ」

「・・・まあいいけどよ。んで？なんでこんなご時勢に天賦祭なんていうもんをやるんだ？」

「こんなときだからこそやるんだろ？この戦乱のご時勢だからこそ

パーツと」

「戦乱のご時勢・・・って。一応今は休戦してるんだろ？」

「さあなあ。どうせどっちもアルマの開発がおわりやまた始まるさ」
戦乱。

アルマ。

全く嫌な時代になったもんだ。

そこから唐突に回想に入りかけたところで目の前の馴染みの無精ひげ・・・大野の声が響く。

「回想はまたの機会にしてくれよ。んで？作ってくれるのかくれなののか？」

「作っても良いけど、ここがどこだか分かってるんだろ？」

「わあってるよ。ここは何でも屋だろ？」

「そう。ここは仕事を請ける代わりに報酬がないといけないんだよ。お前の貧相な財布には今いくら入ってるんだ？」

ヤイナに言われて大野はポケットから財布を取り出す。

見たところ大して膨らんでいないどころかまったいらなので、あっても400円程度だろう。

「130円」

もっと少なかったか・・・

「ちようちん三つで130円か」

「おうともさ」

誇らしげに言うが、この値段はおかしいだろう

「そういうなって、馴染みのよしみでまけてくれよ」

「お前それでももう五万前後の貸しが俺にあんのにまたまけろってのか？」

「え？そんなにあったっけか？」

「お前な・・・」

呆れて物も言えないとはまさにこのことだろう。

しかしこのまま黙っていては本当に130円でちようちん三つという悲惨な事になりかねない。

「まず材料費自体がたっかいんだよ。分かってんだろ？」

「材料費・・・いくらぐらい掛かるんだ？」

「ちようちん一個で大体・・・600円程度か？」

今の時代物価なんてものは簡単に上下するので確かな事を言えないので最後に疑問符をつけて言うと、大野は財布を見ながら言う。

「そんなにするのか・・・ってことは手間賃入れて一個30円くらいか？」

「意味わかんねえよなんで下がるんだよ」

「いやほら、そこはなんか時空超えて」

「そんな簡単に超えられる時空があるか！・・・ったく。本当に130円しかないのか？」

ヤイナがそう言うのと、大野は再び財布に目を戻して苦虫を潰したような顔になる。

「お前それ、今日の夕飯代すらねーじゃんか」

「せっかく現実逃避してたのにお前が現実を突きつけたせいでお金がなくなったぞ。詫びとして三日分の飯を要求する」

「黙れアホ。祭りの用事でここに来たって事は修繕費ぐらい長老のポケットマネーから出るだろ？」

「長老曰く、ヤイナなんぞに払う金なんぞ無い。だとさ」

大野がそういうとしばらくの沈黙が流れた末に、ヤイナが顔を引きつけて言う。

「あのじじいさっさとくたばらねえかな」

長めの髪をぐしぐしと掻いて苦々しげに続ける。

「そもそも祭りの主催は誰なんだ？シアトルか？」

ヤイナがそういうと、大野は少し嘆息して答える。

「おめーよお、シアトルが主催してるんだったら俺が加われるわけがねえだろ？」

「まあそれもそうか」

ヤイナはそう言って、この墮落した町にある唯一の学校を想う。

シアトルというのはどこぞの街から取った名前らしいのだが、正直

由来はどうでもいいだろう。とにかく今は大きくなって、小学から大学までありとあらゆる範囲で学生を取っている学校となっている。

そして俺と目の前の大野はその学校に通うという義務を果たさずにここににいるわけだ。

いや、義務・・・と言っては語弊があるかもしれない。ただ単に通わないやつは白い目で見られるというだけの話だ。暗黙の了解とも言うだろう。

「あそこの委員長は苦手なんだよ・・・」
思い出したようにうめく大野の言い分は分からなくもない。

シアトルの現委員長たる霧島・峰^{きりしま みね}は、泣く子も黙る鬼子として有名だ。

まあ、エピソードなんかは追々分かるだろう。

「峰はきつついからな・・・」

ヤイナもここだけは同意する。

しかし同意して思い出す。

こんな会話をしているといつもあいつは「だあれがきつついですってえ？」そんな感じのドスの効いた声で乱入してくる・・・ん？ヤイナの回想に無理やり入ってきた峰は、大野の後ろにあるドアを開けてその場に仁王立ちしている。

言わずもがな、背景には般若がくつきりと映っている。

「あー・・・いや、なんでもないよなんでもない。ないよないない。」

ヤイナが慌てて両手を振りながらそういうと、峰はフウ、と溜め息をついてカウンターに近づいてくる。・・・俗に言う嫌な予感をともなつて。

「あなたに依頼があるのだけれど」

ああの中した。

心の中で悲痛な叫びを上げて、ヤイナは言う。

「言うだけ言ってくれ」

「そう。じゃあ言わせてもらおうわ。あなたに不祥事を解決してもらいたいの」

峰の依頼を聞いて、雰囲気にもまれていた大野は驚く。

不祥事って・・・暴力ごと、だよな。

心の中でそう呟いて、とても戦闘タイプではないヤイナの体を見る。うん、やっぱり何度見直しても細っこい爪楊枝みたいな――「ジロジロみてんじゃねえだあほ」

ヤイナの言葉で思考を強制的に中断されてしまうがしかし事実だろう。

「おれは暴力沙汰は嫌いなんだよ。残念だったな、長老にでも泣き付けて」

ヤイナが断ると、大野は心の中で頷く。

(まあ、だろうな)

しかし峰はここで引き下がらなかった。

「報酬、がつつり出るといったら？」

「いくらだ？」

「六万」

「よし乗った」

あっさりと手のひら返しをするように依頼を受けるヤイナをみて大野は思う。

(まあ・・・だろうな)

「んで？依頼ってのはなんなんだ？」

着替えもそこそこに、武器も何も持たずにヤイナは峰に聞く。

もちろん峰はこれから暴力沙汰のところに行こうというのになん得手ぶらなのか、という事は質問済みだ。

ヤイナ曰く『重たいものなんざもちたかねえんだ』

「どうも、元日の国軍の重鎮がうちの馬鹿と賭け勝負してて、元軍

人のほうがイカサマして口喧嘩・・・そして学生の集まりVS元軍人グループの暴力沙汰に・・・とまあそんな感じね」

いやそれ明らかに一個人のヤイナに頼む依頼じゃねえだろ。

その場にいた二人は心の中で突っ込むが、峰は進退窮まった、といった表情で言う。

「どうもその元軍人、ここいらでもともと幅をきかせてたみたいで・・・上も上手く動けないらしいの」

「つまり長老じきじきに俺に依頼が来たというわけか？」

ヤイナが嫌そうな顔をしてそういうと、峰は答える。

「まあ、そういうことね」

「一気にやる気が萎えたな・・・」

溜め息をつくが、ヤイナは「請けた仕事は仕方ない」と自分に言い聞かせるように言ってから峰に質問をする。

「んで？その元軍人と学生達のケンカってのはどこまででかい規模なんだ？流石にファーストとかがいるわけじゃないんだろ？」

ヤイナが軽い調子でファーストという単語を口にするのを聞いて、大野と峰は呆れたように嘆息する。

ファースト。

今となっては旧世代と呼ばれる第一世代、第三世代のアルマを操る人間の総称である。

何故ファーストと呼ばれるのか、という事については、一番だから、という訳ではない。

単純に次の世代の人間、セカンドが出てきたからだ。

セカンドと呼ばれる人間は、第四世代以降の革新型アルマと呼ばれる新機種を自在に操る事のできる人間の総称である。

現在軍隊はだいたいがセカンド、及びそれを支援するファーストで構成されているが、セカンドの軍的效果が絶大なために、性能の低い”欠陥品”と揶揄されるファーストは軍から弾かれ、辺境の地にいることは珍しくない。事実この下町にも元軍人のファーストは二桁はいるだろう。

しかしファースト、及びセカンドは、世界を荒らした張本人だと世界から敵視され、辺境の地にいるファーストはその正体をひたすらに隠しながら生きている。

そしてそんな情勢のため、ファーストという単語を口にただけで村八分にされる理由には十二分だ。

だからこそ、誰も口にしないのだが、ヤイナはそういうことを全く気にもせずに口にする。ただでさえ日の国だったこの下町を焼いたアルマ開発国の連合側の人間の容姿をしているのにこんな事を言うもんだから、いつ路地裏で襲われるか気が気でない。

困ったものだと言い、峰が何度か治そうかといろいろと試行錯誤したのだが、決まってヤイナはこう言ってその行為全てを跳ね除ける。『この世界が荒れたのを人のせいにするような奴に合わせるなんてこたあしたかねーよ』

余程そういう行動が嫌いなのか、ヤイナはこの話題になるたびに鋭い嫌な目をする。

この町では他人の過去など詮索するだけ野暮といわれてはいるが、彼についてはその過去を知ってみたいと、思う。

そんな風に思考の海に浸っている峰を見ている大野に、ヤイナが声をかけて意識をヤイナに向けさせる。

「んで？なんでお前が付いてきてるんだ」

突然の質問・・・かどうかは分からないが、とにかく話しかけられたので適当に答える。

「いや、何。この仕事手伝え俺にも分け前が来るかなと思って」
適当に口から出たその答えは吉・・・だったとは言いがたいだろう。なにか下衆なものを見る目で委員長から見られたのはまあ、俺がそういう趣味を持っていたら別な話だが俺はノーマルなんで、凶だろうな。

そうしてしばらく歩いていると、次第にドンチャンといったまあ盛大に行われている乱知己騒ぎが眼下に広がる。

「こんな迷路みてえな街の滅多に拝めない太陽の下で喧嘩するたあ、

また面白い」

ヤイナはそういうと今いる足場（屋根）から違う足場（屋根と屋根を結ぶ渡り廊下）へと飛び移り、その場にあるガラスの破片で渡り廊下の先にある屋根を叩いて盛大に音を鳴らして注意をそむける。

「オイおめーらあ。委員長がお怒りだぞ。お前等後で怖いぞー。これ以上怖くなって欲しくなかったら今のうちにやめておいたらどうだ？」

そのヤイナの言葉に、それまでシアトルの学生という事を忘れていた子供達はハッと我に帰って峰の姿を探す。

すると、屋根の上に乗って逆光でシルエットだけだが、峰の姿が確認される。

その瞬間に、学生たちはそれまでの意気揚々とした血の気の多い赤らんだ顔から一転、顔を真っ青にしてその場から立ち去った。

学生だけならまだいい。

しかし、ヤイナ達が大げさに峰のことを吹聴していたために、その場にいた元軍人達ですら、転げまわるようにして何処かへ行ってしまった。

その様子を見届けてヤイナは元の足場へ戻り、満足げな顔をしていった。

「これにて一件落着、だろ？」

フン、という擬音でも出てきそうなほどに自慢げに胸をそらすヤイナは、ちらりと峰をみてその行為を後悔する。

実際には自慢げな態度に怒っている訳ではなかったのだが、峰のその鬼の形相はとても筆舌に尽くしがたいものがあつた。

「私のうわさ・・・また広がりましたよね・・・？どうせ尾ひれつけて喋つたのあなたですよね・・・？」

ザワツという背筋の寒気は当事者でない大野にすら走る。

「命で償え・・・っ！」

ダツと地面を蹴り上げて飛び上がった峰を見て大野は思う。

（こりゃヤニ坊の奴死んだかもなー・・・）

そんな平凡で平和な日常は、いつまで持つのか。
心の隅ではいずれ来る戦闘への焦燥を抱いて、それでもそれを隠しながら平凡に暮らす人々の姿だった。

プロローグ（後書き）

ヤニ≠煙草

ですよ

決して煙草坊主という意味じゃありませんよ

襲来者

「だから俺はンなこたしたくねえって言ってんだろ？」

語気を荒立てるヤイナの前に、ヤイナをおとなしくさせようとして両手を上下に振る青い軍服・・・いや、ローブに身を包んだ二人の人間はなす術もなくその作業を進める。

しかしそれは逆の方向へと作用し、余計にヤイナを精神をさかなでる。

「だからもう一度言うぞ——」

ヤイナが再び口を開いて口撃をはじめようとしたときに、ヤイナの家が玄関がゆっくりと開かれる。

突然のアポ無しの客は、少しだけ開いた戸の隙間から顔をのぞかせている。

その見慣れた姿はそう、

「似合わない事してねえでさっさと来いっつの」

ヤイナに促されて戸を開けて入ってきたその人物は長いポニーテールをゆらゆら揺らすモデル体系の女史、霧島 峰 だった。

「ほら客人だ。昔はともかく今はこれが本業なもんでな、とつとと消えろ」

シッシツとヤイナに促されて外へ出ようとする青服とすれ違いざまに、霧島の記憶の隅で青服たちの姿が引っかかる。

（何処かで見たような・・・）

あともう少しで思い出せる。

そんなところだったのだが、ヤイナの言葉にその思考をせき止められる。

「ンで？何の用だよ」

不機嫌そうに言うヤイナの姿からは、とても峰を歓迎しているようには見えない。

というか先ほどの二人とのやり取りがそれほど嫌だったのだろうか

か。

「話は二つ」

人間関係の事情なんてものを探るのはこの下町では野暮とされているのでそこに、ヤイナに本題を切り出した。

「一つは、天賦祭の事。どう？ 出場してみない？」

その勧誘を受けて、改めて天賦祭について思い出す。

天賦の才。

どうやらここから来ているようだ。

その通りに天賦祭は、様々な才能を試すところだ。

絵画の才能、作成の才能、足の速さの才能・・・そして、戦闘の才能。

いくつかの才能を競うものがあるが、やはり一番の目玉は戦闘の才能を競うトーナメントだろう。

いつの時代も、血が沸くような闘いは楽しいものだ。

ルールに守られているのであれば、の話ではあるけれど。

「でねえよ」

まだまだ色々と思い出すべき事項はあったのだが、そもそも出る気が皆無なヤイナにとっては思い出す意味もない。

「まあ、そうだろうね」

大して驚きもせずに、二本目の中指を立てて次の話題へ移る。

大して執心もないようなので、誰かに聞いてみてくれ、と頼まれてのことだろう。まあ頼んだ連中は大体の予想が付くが。

「最近不穏な連合国の連中の話よ」

その予想外な言葉は、ヤイナの心境をいっそう悪くさせる。

（その話はさっきので十分だったのに・・・）

心の中で呟くが、表だってはシアトルが一番情報が速いということになっているので、一応知らなかった、という風に頷いてみせるが、

「そんな安い芝居しなくて良いわよ。知ってたんでしょ？」

あっさりと見破られる。

「ま、その通りだけどね」

ヤイナもこれまたあっさりと認めると、峰はやれやれ、といった様子で首を振って続ける。

「それなら話は早いんだけど。どうも連合国がアルマの開発を終えていた・・・っていうわさが流れているわ」

この話を聞くに、この下町をどちらの国にも属さない独立した地区にしたメンバーが確立した情報網は未だ機能しているということなのだろう。

開発を終えた云々なんていう国家機密に近い情報が簡単に漏れている連合国のずさんな体制も寒気がするが。

と、ここまで考えて、思考を改める。

「罨？」

「え？」

突然もらしたヤイナの言葉に疑問符を浮かべるのも仕方ないだろう。思わず口にしたヤイナ自身ですらどういう罨なのか、なんてことは見当も付かない。

「いや、忘れてくれ」

ヤイナはそう言って前言撤回を促すが、どうも気になる。

嗅覚、のようなものの・・・だろうか

ヤイナのその不安ともいえるその感情の元凶は、次の日の昼に正体を現すこととなる。

「ツヘエ！ここが下町かよ。いいね古臭いね機械臭いねロマンがないねえ！」

ドン！という音を立ててシアトルの中庭に降り立つ隻眼のツンツン頭の青年はうれしそうに声を張り上げる。

その異変は誰が最初に気付いた、とかではなく、一瞬で全校生徒が気付いた。

そして思い出す。

今日の朝に言っていた、委員長の峰の言葉を。

『どうも連合国が不穏な動きを見せているらしい』

しかし、中庭にいるのはどこからどう見ても日の国の人間だ。

黒髪に特徴的な釣り目。

金髪碧眼の人口比率が多いだけで、連合国にもこのような容姿の人間がいないとはいえないのだが、そんな事よりもとにかく、その人間が異常だとシアトル生徒が確信した理由はただ一つ。

異常なまでの着地の時の音と、そしてそこに広がるクレーターだ。

およそ人間では耐えられない衝撃が生まれただろうに、そこにいる人間はどこ吹く風でテンション高く吼えている。

逃げろ。

全生徒の共通の最優先事項として浮上したその三文字の通りに全校生徒は動く。

たった一人を除いて。

「あなたは・・・敵ですか？味方ですか？」

ゆらり、とゆっくりめの歩調で中庭の男へ近づく。

その様子をみて男は一転して、視線を尖らせる。

「あん？おめえらが敵対行動を取るなら敵。とらねえなら味方だ」

男の言葉に、峰は再度質問をする。

「それならば質問を変えましょう。あなたの目的は？」

峰の質問に、男は少しためを作って答えた。

「てめえら知ってるんだろお？」

「侵略だ！」

「ならば、敵ですね」

そういうが速く二人は地面を蹴って駆け出した。

ヒュッと先に攻撃を仕掛けたのは、右拳を引き絞った峰だった。

すれ違いざまに放たれた拳は常人には見えない速度で男へと襲い掛かる。

ゴウッというものはや拳の出せる効果音ではないものを放ちながら迫

る拳を見て、男は目を驚愕に見開く。

（こんな辺境な町にここまでの身体能力者・・・っ！天然物かつ！）
峰に拳を突き出されるまでは大量にあった余裕が消し飛んだ瞬間だった。

ザッと土煙を巻き上げながら、10mほど離れた二人は動きを止める。

「何故攻撃しない？」

先ほどの敬語はどこぞへと消え去っていた峰の口調は鬼気迫るものがある。

「ハン、最初の一撃はサービスだよ」

男は内心冷や汗をかきながら苦し紛れに言う。

「そうか、なら次は私も本気でいこう」

その峰の言葉はとても疑えるものではなかった。

何故か、といわれれば勘としか答えられないだろう。

今は休戦状態ではあるが、近いうちに再開する第三次世界大戦を経験してきている男の本能が警鐘を鳴らす。

こいつは、化物だ。

ファーストの男は内心鳥肌を立たせる。

天然でセカンドクラスだとしても言うのか。

だとすればそれは。

新たな存在となる可能性が大いにある。

サード。

「畜生厄介な人間が居たもんだ・・・かてねえぞこいつぁ・・・」
小さく漏らしたその言葉が、その男のその場における最後の言葉だった。

ゴウ、と爆音を響かせながら迫る拳を真正面から受けた男は、そのまま意識をプツリと途絶えさせた。

「さっすがだな、委員長」

ヒュウ、と口笛を吹くヤイナは、シアトルに近い大きめの建物の一番高い屋根から中庭の戦闘を眺めていた。

手を出すつもりはないが、委員長の本気は見ておきたかった。

これから先、ここは恐らく戦地になるだろうから。

そんな事を思うが、実際この状態の俺は無力だ。

いや結構。

正直ここまでくるのにも息が上がる程だし。

「つたくいやって程に体力ねえな・・・」

ハア、と吐き出した息は、白かった。

そろそろ、冬が来る。

あの時と同じ、寒い冬にならないといいが。

ヤイナは脳裏にかつて死の冬と呼ばれた第三次世界大戦中の二度目の冬を思い出す。

アルマ技術を結集して作られたミサイル弾頭が日の国と連合国中枢の最も人数の多い都市に同時に落ちた冬。

あの時の謎は未だに残ったままだ。

そして恐らくこのなぞはもう・・・解かれることはないだろう。

ヤイナは心の中でそう呟くと、大きく溜め息を吐いて立ち上がった。

「おも・・・っ！」

ダメ元で頼んでみたというのはあるが、まさかここまでとは。

「それ一個運んだら休んで良いぞー」

大野が若干の呆れを含んでそういうと、ヤイナは顔をしかめて言う。
「俺は肉体労働するなんてきいてねえぞ！」

心の中から悲痛な叫び声を上げるヤイナを見て、大野は思う。

（こんな奴が本当に・・・ねえ）

心の中で死の冬と呼ばれたときを思い起こす。

しかしそのときの映像が流れ始めた瞬間に、本能によってその映像は遮断される。

どうもこの映像を思い出そうとすると反射神経のように集中が遮られる。

（思い出しちゃあいけない記憶・・・ってことかねえ）

大野が自分の行動に苦言を言うように心の中で呟くと、背後でうめくヤイナへとちらりと視線を向ける。

映像は思い出せないが、名前は覚えている。

カエリス戦線。

かつて島の半分を消し飛ばした原因だとも言われている戦いの名前だ。

ここに――

大野はいつものようにそこまで思考をめぐらせると、これまたいつものように終わらせる。

考えるのは、苦手だ。

隠された爪

連合国のファースト、ギリアが下町の委員長 霧島 峰 によって、撃破。

そのニュースは一瞬で全世界へと広がっていった。

日の国は二つのニュースに驚き、更に二つの驚きを足した驚き異常に驚愕に目を丸くしたのが、連合国側だった。

「ファーストがノーマルに撃破された、だと？」

連合国側の軍部の幹部が目を丸くして報告官へ聞き返すと、報告官はうなずいて肯定する。

冗談ではない。

ファーストはもともと才能を持った人間を特殊なプログラムを通してその才能を更に高めた人間を指す。

このプログラムを通して才能が開花・・・というか無差別にプログラムを適用しているために才能が無いかどうかはプログラムの結果で分かるというだけで、才能があるかないかが事前に分かっているわけでもないのだが。

そしてノーマルは才能もない人間の集団。

そのはずだ。

しかし稀に、ごく稀に、プログラムを通さずにその才能を開花させる人間がいる。

稀に、というだけあって全世界で天然種と呼ばれるこのタイプの人間はこの疑いのある峰を除いて三人しか確認されていない。

一人は第三次世界大戦を休戦へ追いやった集団の名も知れぬ一人の男。恐らく現在も生きている。

そしてもう一人は今亡きアルマ開発者・・・大野 恭介

もう一人は、カエリス戦線と呼ばれた、第四戦線の内でももっとも大きな戦いに参加して、命を落としたファリス。

三人は、ワールドランクと呼ばれる世界の人間の強さのランキング

の欄外として報告されている。

強すぎるがために、だ。

ワールドラंक零。

確認されているのはまだこの三人だけなのだが。

そこまで回想すると、ギリ、と奥歯を噛み締めていくつか悪態をついてから、報告官へ言う。

「天然種・・・ということでは間違いなさそうだな。ならばこの天然種。開花するまえに蕾は摘み取らねばならないだろう。下町は顔見知りでない人間が行くとすぐにばれるというではないか・・・全く田舎はやりずらくて叶わんな・・・報告官、いい潜入方法はしらぬか？」

幹部がそう聞くと、報告官は待ってましたといわんばかりに即座に答える。

「天賦祭、と呼ばれる祭りが三日後に。そのときに行われる武の分野というトーナメント式の闘いのサブイベントとして、委員対決戦が行われます」

「ほう、おあつらえ向きなものがあつたものだな。人の出入りが激しい上に暗殺がしやすい委員との戦いと来るか」

幹部の男はそう言って鼻で笑う。

「子供に現実を見せてやろう」

軍に逆らうとどうなるか、見せてやろう。

「はぁ・・・はぁ・・・」

ぐったりとした様子でイスにへたり込むヤイナを見て峰は困ったような表情で言う。

「全く・・・」 本当に体力無いのね？

その言葉にヤイナは息も耐え耐えに言い返す。

「う・・・うるせえおれはインドア派だ・・・」

「ああ、そう」

そうですか、といわんばかりに投げやりな答えに若干の不満を覚えるが、ここで再び口を開くエネルギーすら残っていない。

そんなヤイナの様子をしばらく見ていて峰は思う。

もしも

もしもヤイナにもっと体力・・・いや、戦闘能力があれば・・・

峰はそこまで考えて、その考えを頭を振って振り払う。

ないものねだりはしても仕方ない。

今ある人材で、なんとか凌げれば。

峰はそこまで考えると、ヤイナの家を出るのに何も告げずに、何か思いつめたような表情でその場から立ち去った。

「あん・・・？」

す、と顔を上げたヤイナが不思議そうな顔をする。

幾分か祭りの準備のせいで体力がないので視力が落ちているのになんとも言えないが、しかしあれはそれでもハッキリと分かるほどの物だった。

あの表情は――――

「委員長、やはり副委員長が居ないと委員戦は・・・」

書記の男がそういうと、峰は顔をしかめて書記の男の言葉にうなづく。

「すまない、もう少し待ってくれないか」

さしずめ委員長モードと言ったところか、口調が変わる。

「副委員長は私と対等に戦えるほどでないと委員戦はダメなんだ」

委員戦。

これはいつまでもシアトルに圧力をかけている日の国の提案した大会という名の委員への別の形の圧力だ。

委員が勝てばその先もうシアトルへの圧力はかけない。

が、委員が負ければシアトルはつぶれてもらう。

ハイリスクハイリターンとはよく言ったものだ。

かなり確率の低い賭けになるが、それこそ目に余るほどの圧力と嫌がらせに比べればまだ・・・いいほうだろう。

死人が出るほどの日の国の執拗な圧力は既に過ぎた行為といえるほどのものではない。

殺しに来ている。

峰はそう思う事で危機管理状態を保っていた。

大抵の学生はおよそ平穏だと思っているのだろうが、この学校で起きる事故という事故が大体は日の国に仕組まれた事であるということに気付くのにさして時間はかからないだろう。

「くっ・・・」

ギリ、と奥歯を噛み締めて今一度下町にいる人間の顔を思い出す。

しかしいづれも自分とは対等に戦えるほどのものではない。

一度決まってしまうば一年は変えられない委員。

今ここで中途半端に決めてしまうわけにはいかない。

「何かいい手はないのか・・・っ！」

「あん？」

見慣れない客に、ヤイナは顔をしかめて来客へ険悪な雰囲気差し向ける。

その違った雰囲気、温室育ちのシアトルの委員生は思わずたじろぐ。

「あ・・・えっと・・・ここは何でも屋・・・だよね？」

オドオドした喋り方に不満をいだきつつも一応応答してやる。

「そうだけど」

応答といえるほど上等なものではなかったけれど。

「一つ、依頼を・・・いいかな」

「あん？」

「副委員長に・・・なってくれないかな」

書記のその言葉に、ヤイナは頭を抱える。

これで委員全員が同じ内容の依頼をしてきた事になる。

たった一人委員長の峰を除いて。

その全てを拒否したつもりなのに、あろうことかめげずに全員がヤイナへ依頼をするためにここを訪れた。

「しつこいな・・・お前等・・・」

「仕方ないじゃないか、委員戦で負けてしまえばシアトルが消えてしまう！」

冷めたヤイナと違って、熱を帯びたように書記が熱舌を尽くすがヤイナはその全てを聞き流している以上、ほとんど意味はないだろう。
「ってかよ」

ヤイナが呆れたように書記の演説をぶったぎって言葉を続ける。

「お前等が依頼しにきてもどうせお前等金出せないだろ？親に金もらって、シアトルの予算もろくに動かせないお前らに依頼の報酬は出せるのか？最低でも一年にわたって付き合ってやる必要があるんだろ？だったらそれなりの金は必要だぜ？」

ヤイナのその言葉に一瞬詰まって、書記は聞く。

「大体見積もっていくらなんだ？」

「まあ一ヶ月10万としても120万。これが最低値だな。仕事内容によってレートは変わるんで詳しくきかねえとなんとも言えないな」

ギ、とイスで船をこいで地面を軋ませるヤイナをみて、書記は激昂する。

「ふざけるな！お前には義理ってものがないのか！？」

ダン！と、書記が叫びながら思い切りカウンターへ拳を叩き付けた瞬間、書記の視界は反転した。

そして気付いたときにはヤイナに馬乗りに乗られて、喉元にナイフ

を突きつけられていた。

「ふざけるな？義理？お前商売って言葉しってつか？シアトルがどれだけ温室で、ドンだけ社会を知らせていないが知ったこっちゃないがな、ここは社会なんだ、金がないやつは客じゃねえんだ。それにシアトルが消えようが何しようが俺には関係ねえよ。力ないやつが吼えるな。耳障りなんだよ」

ヤイナはそれだけ言うとな이프を腰に戻して軽くジャンプしてカウンターを跳び越し、イスへと再び身を落ち着ける。

「さっさと出てってビニールハウスに居ろよ、温室野郎」

キツとにらみつけられて逃げるようにしてその場を去った書記は、歩きながら思う。

さっきの俊敏な動きは一体。

悪びれる風でもなく、書記の思考は続く。

およそ人間のできる動きではない。

本当に

本当に峰委員長の言うように彼は運動音痴なのか・・・？

そんなはずがあるわけ無い。

「どういことなんだ・・・？」

理解が追いつかずについたため息と疑問の言葉は、夕闇に消えていった。

再開する戦争

「ッハ！んな作戦ちまちまやってられつかよお！あってもセカンドだ。アルマ着てりゃセカンド同士なら俺のほうが強いってのは決まってるんだよ！」

「おいまっうわっ」

一人めのファーストの襲撃者と似たような風貌の男は、空中に浮ぶ空挺から一人飛び降りて下町へと降り立った。

ドゴン！という音を立てて地面を抉りながら着地し、周囲を見渡すとそこは奇しくも一人目と同じ、シアトルの中庭だった。

「ッハア！ここかあシアトルってえのはよお！」

男が大声で叫ぶと、次の瞬間には体に妙な雰囲気を持った女性が一、学校の一部から飛び降りてくる。

「貴様・・・連合国の操縦者・・・だな？」

峰は機械の装甲に身を包んだ男を見て、さっきを伴って言う。

「そおだよアルマ操縦者だ・・・セカンドだぜ？」

男がそういうと、峰の動きが一瞬止まる。

セカンド

軍部における最も強いといわれる分類の人間が、アルマを着て降りてくるとは。

「下町相手に大人気ないな・・・連合側も」

峰が言うと、男はケラケラと笑い、急に真顔になって答えた。

「馬鹿言うんじゃねえよ。これは戦争だぜ？最初は遊びだったが一人やラレチマッタからな。こっちの被害は少ないほうがいいがそっちの被害は大きいほうがいい。だったら派手にハジける事が出来るセカンド、その中でも広範囲攻撃を得意とする俺が出てくるのは当然だろ？お前だって知っているはずだぜ？」

そう言って男が口にした名前は、その場に居た人間全員を凍りつかせた。

ファーマル・ハウンド

狂犬という異名を持つ彼は、連合国第五位の实力を持つ実力者だ。しかしその順位は彼にいたっては当てにならないと聞く。

狂犬たる異名を持つかれはその名の通り破壊を好む。

そのために対面を気にして五位以上にはなれないという噂も流れているほどだ。

というか。

実は狂犬と言う二つ名は第三次世界大戦前のものでしかない。

第三次世界大戦でさらにその狂気に磨きが掛かったファーマルは狂犬という異名をもじり、最凶と呼ばれるようになった。

最 という文字がつく異名が付くのはこれで三人目だ。

最強

最撃

最凶ファーマル・ハウンド

実質世界で三位の異名を持つ彼はあまりにも、峰の手には負えないものだった。

二十分後、無傷で息も整っていて一步も動いておらず汗一つかいていない最凶の前に、ボロ雑巾のように服がずたずたに引き裂かれ、体の各所から血を流す峰が倒れていた。

「なんだよ天然種のセカンドって言われてきたのによお、ンだよもしかしたらこいつファーストクラスなんじゃねえの？」

最凶はそう言って初めて足を踏み出して峰の側へと歩み寄って腹部へと蹴りを入れる。

げふ、と口から血を流して2 m程転がって、峰は止まる。

「おいおいもう終わりか？俺に一撃も加えないで終わりかよ・・・まあ良いぜ、どうせ死ぬのが速いか遅いかのちがいだっただ、ここで消えておけ」

最凶はそう言って、腰から初めて武器たる拳銃を引き抜く。

ガシュン、と間接から排気音を響かせて銃を構えると、最凶は悔しげに最凶を見上げる峰の眉間めがけて、引き金を引いた。

パン

と乾いた音がした次の瞬間。

キン

という不可解な音がする。

最凶はここで一瞬、まさか峰は金属生命体だったのかなどと馬鹿な考えが浮んだが、すぐにそれを払拭して後ろへ後ずさる。

初めての回避行動だった。

「なん・・・」

先ほどまでの余裕の表情は消え、何故か土煙が立っている峰の体があるところへ目を凝らす。

するとその土煙の中から何者かの声が聞えた。

「ハン、弱いものいじめして鼻高々ってか？」

鼻にかかったその喋り方は何処かで・・・いや、何処かで聞いたことがあるというものではない。

実際最凶のこの喋り方は、今の声を真似しているものだ。しかし。憧れのその相手は死んでいるはず――

「雑魚みてえな事やってンじゃねえよ、ド三流」

土煙が消えたそこには、金髪金眼の整った顔をした男が居た。そして同時に最凶は安堵する。

あの人が相手ならばすぐさま退散しなければいけないところだった。しかしこいつは違う。

最凶は心の中で安堵して先ほどとは違って巨大な銃をどこからともなく出現させる。

「ツハ！減らず口もたいがい吹き飛べよ！自称いちりゅ――」

いつものように眼前の建物が全て消え去るはずだった。

しかし今回は違った。

何が、といえは一つだろう。

敵が、だ。

「なあに言ってるんだ？ お前」

その声は背後から聞こえる。

「こんな動きにも付いて来れてねえ時点で最凶なんて名乗ってンじゃねえよ」

嘲笑に似た声色を含むその声はまだ続く。

「だいたい、俺が違う奴だと思ってて姿をみて安堵しただろ？」

その時点で、狂気なんてお前には名乗れねえよ

「消えうせろ」

ヤイナはそう言うのと、右拳に透明の膜を張って、思い切り引き絞る。

「サービスだ。お前の国へ送り返してやるよ」

「まさかお前・・・ウィザー――」

最凶と呼ばれる男の言葉を聞かずに、ヤイナはにやりと笑って引き絞った右拳を思い切り突き出した。

ドゴツという鈍い音を響かせて吹き飛んでいく最凶と呼ばれた男は瞬く間に視界から消えていった。

そして吹き荒む風の中、ファームル・ハウンドが吹き飛んで行った方向を見てヤイナは言った。

「狂犬？ ハッ馬鹿かよ。噛ませ犬の間違いだろ？」

「ん・・・？」

峰が目を覚ますと、自分の体には完璧ともいえるほどに丁寧な応急処置が施されていた。

「まあそれはいい」

峰はそういつて、まだ混乱が収まらない頭をフル回転させて状況を整理しようとする。

（昨日・・・いや、いつの事だかは分からないけど最凶と呼ばれる

人間が襲ってきて？それでボコボコにやられて・・・最後にとどめ、
というところでヤイナがかばってくれて・・・それで最凶をあっさ
りと一撃で吹き飛ばし・・・た)

峰は自分でそう思っ、にわかに信じられないと溜め息をつく。

もし昨日見たあれが事実だとしたら・・・というか傷がある時点で
事実なんだろうが。

吹き飛ばされ際に最凶が放った言葉『ウィザ』・・・ここから察す
るに、ヤイナは全世界に六人しか居ないウィザードと呼ばれるこの
下町を確立したメンバーの一人で、そして今までの体力のない云々
は全て・・・演技だということか

その仮説であってほしいと願う仮説をたて、峰は溜め息をつく。
するとその溜め息と同じタイミングでギィ、と部屋の扉が開く。

誰だ？と疑問に思いながら右側に見える扉を見ると、そこから現れ
たのは粥を持ったいつものように気だるげなヤイナだった。

「よお起きた・・・か・・・」

途中で何故か動きを止めて口詰まるヤイナを見て一瞬疑問に思った
が、今の自分は・・・まあ自分で言うのもなんだが凹凸の激しいす
べてが包帯で覆われているだけで、言ってみれば下着を着ているだ
けの状態だという事で、それはつまり裸同然だということ。

ガバツと体から走る痛みを省みずに布団を引き上げて体に巻きつけ
ると、目をグツと閉じてそっぽを向いているヤイナに声をかける。

「ごめん、いいよ」

峰がそういうと、ヤイナはゆっくりと目を開けてこちらへ歩み寄っ
てくる。

「ったくなんて格好してんだよ・・・」

ヤイナが呆れながらそう言っ、ベツトに備え付けられたテーブルに
粥を置いて、そばのイスに腰掛ける。

「どうだ？傷、まだ痛むか？」

ヤイナが峰に聞くと、峰はゆっくりと両手を上げようと試みるが、
2cmと動かせない。

さつきは慌てて気付かなかったのか、かなり痛みが走ってただろう。というか傷開いてないだろうか。

「この処置は・・・ヤイナが？」

「いや。流石に俺にお前を脱がす度胸は無かった」

「ああ・・・ありがとう」

「ここは俺の家だよ。別に違うところでも良かったんだけどな。面倒な事に俺の戦鬪を見てたやつがいて、お前が怪我してるのをいい事に普段の恨みを持ったやつが襲ってこないとも限らないってんで俺のところに匿ってるわけだ」

「腕、動かないのか？」

するとヤイナは仕方ないな、と言ってお粥のおわんを持って峰の口をあけるよう促す。

まさかあの恋人がやるような恥ずかしい行為をやるというのか！？
峰の思考はそんな事で埋まっていて、おずおずと口を開くとあろう
事かヤイナはその口にスプーンを持っていくでもなく、器自体を傾
けて差し入れようとした。

[illegible]

「そこはスプーンで持ってたあーん！あーん！だろ！おいヤイナてめえ分かっててやってんのか委員長の珍しいしおらしい姿なんだぞもっと辱めてやればいいんだよ！」

中断させてくれたのはありがたいが後半は限りなく歓迎できないぞ。心の中で反抗する峰をよそに、ヤイナは答える。

「いやだっていちいちスプーンですくうなんて面倒だし、別によくな？」

そう言って再び器を傾けるヤイナをみて、大野は慌てて止めに入る。

「ま、まあ落ち着け、確かにだ、確かに面倒だけどな？お前ちよつとそれ人の道外れてるぞ重度のけが人に熱い粥を問答無用で口に流しこむ外道がどこにいるんだ」

大野がそういうと、ヤイナは当然のように答える。

「いや、ここに」

「ああもうそういうと思ったよチクショウ！」

残念ながら私も思った。

変な意味で信頼されているヤイナに呆れて、峰は傷む腕を無視して器を奪い取る。

「自分で食べる」

峰はそういうと、さらに腕を酷使してスプーンを持とうとするのだが、それをヤイナが止める。

「まあ、スプーンで口に持ってきて欲しいならやるがね」

ヤイナはそう言ってスプーンを手を持つ。

「照れ隠しだったんだろーせ・・・ったく最初からそうしろよつんでrグハッ」

まあ、ここは追求したらまずい場面だろう。

結果として大野が地面で悶えているということだけ伝えておく。

ヤイナが顔を赤くしてるなんて伝えたくないし。

そんな事を思っただけでアーンという恥ずかしい極まりない事をしてもらっているという事実を頭の隅に追いやり、五口目というところになって大野が元気を取り戻して言う。

「そういえばヤイナに伝言だ」

大野に言われて、ヤイナは顔をしかめて答える。

「誰だれからだ？」

「なんか青いローブ着た胡散臭い連中」

「第三次世界大戦。再開だつてよ」

大野がサラリというその言葉に、一瞬で部屋の空気が凍るが、すぐにその凍った空気は大野のコメントで溶ける事となった。

「にしたつてお前等・・・主に峰の放つ甘甘オーラが果てしなく俺をイラつかせるわけなんだ」

大野はそう言つてずかずかと部屋の出口へ歩いていき最後に一言

「もげろ」

とだけ言つて部屋から出て行った大野を見てから、ヤイナはボソリと呟いた。

「日の国へ・・・行く必要があるか」

学生（前書き）

同じ物語です。決して別の作品を投稿してしまったとかそういうわけではありませんよ

学生

「・・・ふう」

重たい頭を持ち上げてベットからゆっくりと起きてうつすらと差し込む太陽の光を全身に浴びるためにベットの横にあるカーテンを勢い良く開けると、そこには真っ青な空が浮かび上がっていた。

はつきりと開けない目をこすっていると、一階のリビングから聞きなれた声が聞える。

「おーい、ごはんー」

ハスキーなこの声は聞き覚えがある。

「まったく今日の朝はいらなんて言っておいたのに・・・」

小さくそうこぼすが、作ってもらってしまったなら食べるしかないだろう。食材の問題的に。

自分で自分に言い訳をして階段をおりていくと、そこにはいつもの馴染みの顔があった。

「おそいよー？学校遅れちゃうってば」

普通のポニーテイルではなく、首筋あたりで黒い髪を縛った整った顔の幼馴染の彼女は才色兼備で剣道では全国一位にすらなってしまう所謂エリートというやつだ。

対して自分はさえない顔に何一つ秀でた能力もない。

卑屈になるなというほうが無理だ。

「今日はいらないって言ってなかったっけ？」

ぶつぶつと文句を言ってリビングのテーブルにつく。

朝食は日本人らしい焼き魚に米。

テンプレートと言ってもいいがシンプルイズベストなんてことも言うしメニューに関しては申し分ないだろう。

そんな事を思っているうちに目の前に並んでいた料理がなくなっって、準備も終わり、いざ学校へ出発、と意気込んで玄関を開けるとひんやりとした空気が肺を満たすように体へ入ってくる。

「冬だなあ」

スウ、と深呼吸をして一人呟くと、隣に並んでいる幼馴染がそうね、
と言って同じように深呼吸をする。

「じゃ、行きますか」

「うん」

二人はそう言っていると、学生カバンを持ち上げて学校へと歩みを進める。
するとものの十数分歩いただけで、友達の一人と出会う。

「よう、元気してるか夫婦漫才コンビ」

背後から聞こえてくる元気な女の声はこれまた学校で優秀な体育成績を収める人間だ。

「だれが夫婦漫才コンビじゃ阿呆」

毎度のように言い返すと、これまた毎度のようにごめんごめん、
言って自分と幼馴染の二人の横に並ぶ。

「んで？アキ、アンタ今日どうなのよ、開始のテスト勉強やってきた？」

活発そうなショートカットの女性に、一言目から嫌な言葉を言われる。

「全くしてねえわ・・・」

アキと呼ばれた俺・・・ひろせあきら廣瀬輝通称アキは溜め息をついてうなだれる。

それを見て幼馴染の宮ルイみやは呆れて溜め息をついてポニーテールを揺らし、活発そうな通称ココと呼ばれる彼女は笑っている。

「さっすがアンタね！勉強のべの字も知らないでしょ！」

ケラケラと笑い転げるココにうるせえと言って一蹴する。

そんなやり取りをしているうちに、とうとう学校が見えてくる。

「そろそろ別れないとねー」

ココのその言葉に、アキは苦笑いをして答える。

「そーいやこいつは憧れの的だったな・・・こんな粗暴な奴のどこがいゝ」

隣にいる幼馴染を罵倒しかけたところで、当の幼馴染にさりげなく

わき腹をつねられ、そしてさりげなく足の甲を踏まれる。

「あらどうしたの？怪我？大丈夫？」

ニコニコと笑いながらアキに心配そうな声をかけてくるのは一般的に見ればまあマリア様のように顔が整った女子が冴えない男子を氣遣ってやってる程度なのだけれど、実際事情を知ってればほら、ココのように顔が引きつってるもんだ。

「黒すぎるだろ・・・」

ハア、と溜め息をついて立ち上がると、俺はこっちだから、と二人に告げて下級クラスのある第二校舎へと入っていく。

この学校はA～Fクラスで編成されており、まあお決まりのようにA～Fでランク付けがされている。

ちなみに言えば俺はFでココやルイはAクラス。

噂でSクラスという、一応在籍してはいるがセカンド等の人間のため、能力が高すぎて違う特別講習を受けているクラスもあるとか。

アキからしてみれば雲上人のようなものだと言われる。

そんなことを改めて確認して自己嫌悪に浸りながら、未だ原理が解明されていない魔法式の階段とやらで自動的に二階へ行くと、自分のクラスへとはいっていく。

最初はまあここで嫉妬の炎を燃やしに燃やした人間たちが暖かい出迎えをしてくれたもんだが、今のやり方を始めてからそれも大分収まった。

「やーいアーキようー」

まあ多少うざったいのも付くようになったけれど。

「なに？」

そう言って振り返ると、サルのような顔をした唯一の友達がこちらへ一冊の雑誌を持って廊下を駆けて来ているのが見える。

「これ見ろよう、やばくね？ボンキュッボンだぜやべーよ超興奮する」

鼻息を荒くしながらそう言ってくるその友人がアキに見せたのはそう、いわゆる写真集というものだ。

名前も知らないが顔がそれなりに整っている女性が水着姿で写っている。程度の認識でいいだろう。

「おまえ完全に胸大きくないとダメ派なんだっけ・・・？」

「おうともさ！」

アキはそう言っただけで猿のような顔の友人の答えを聞いて思う

まあ、その主義がこいつと付き合ってる理由でもあるわけだけども。

だけでも。

「あんな学校一の美人と噂されているルイちゃんだってひんぬーだろ！どこが良いんだよ貧乳なんてよお！やっぱでかいほうが良いだろ！夢は多く詰まってるほうが良いだろ！」

「ああ分かった分かったお前の主張は分かったからとりあえず落ち着けっ」

アキがどうどう、とサル顔の友達、通称モンキと呼ばれている彼を落ち着かせる。

（その主張をあいつの前で言ったら殺されかねねえなあ・・・）

アキが心の中で苦笑いしていると、いつの間にやら始業のベルが鳴り響く。

そのベルの音に背中を押されるようにして教室の中にはいると、なにやら不穏な雰囲気の流れている。

（なんだ？）

あまり他人に関心を持たないアキも、流石に異変を感じたのか耳をそばだたせてヒソヒソと噂されている言葉を懸命に聞き取る。

「おい・・・戦争・・・」

「まじか・・・また・・・？」

「今度は学生も・・・」

「徴兵制度は廃止されたはずじゃ・・・」

四人の言葉の断片しか拾えなかったが、まあ状況は分かった。

とどのつまり

いつの間にか休戦していた第三次世界大戦が再び、始まるらしい。

「嘘だろ・・・？」

同じタイミングでモンキが珍しく真面目な口調で呟く。

「戦争が・・・始まった・・・？」

モンキのその声と、いつしか幼馴染のルイが言っていた言葉が重なる。

『争いは・・・もういやよ・・・』

訪れる戦争の火の粉

ポカポカと暖かい日差しを窓から浴びていると、本当に戦争が始まったのか、なんていう実感は程遠い物だ。

「徴兵制度・・・もないしなあ・・・」

アルマに乗れるほどの才能の持ち主でもなければ、軍に引っ張り出されるなんてことはない。

またいつものように違う世界のように進んで、違う世界のように終わっていく。

他人事だ。

それで済むはずだった。

異変は、その日の夕方に起きる。

『今日のニュースは！こちら！』

家に帰ってリビングで、調理も終わってあとは幼馴染の帰りを待つばかりという時頃、テレビをつけると甲高い声で今日の有事を伝えるアナウンサーが出てくる。確かこのアナウンサー、日の国の民放では一番の人気を誇る人ではなかったか。

そんな事を思いながら見ていると、最近世間をにぎわしている人物がドアップで画面いっぱいに表示される。

「またか」

画面に表示されたバラを咥えて登場でもしてきそうな雰囲気の大男は、その名も英雄。

その名、と言っても本名が分からないために付けられたただの通称だが。

彼は常人離れした身体能力をいかになく発揮し、様々な人助けをしている。

木に引っかかった風船から、立てこもり事件の解決まで様々に。

といっても、ここまで人気が出たのはその事件解決が主だが、もう

一つの側面がある。

アルマを使わない。

そう。

この男は、身体能力的にはセカンドでもおかしくないと学者に言わしめるほどの人物なのに、彼がアルマを使っているところは微塵も出てこないのだ。

自らの素の身体能力だけで英雄になった。

この事実はもちろんのように少年に受け、そしてアルマという兵器が嫌いな老人方にもウケた。

実際自分も、気障な物言いさえなければそんなに嫌いじゃない。やっている事は善であることに違いないのだから。

そんな事を思ってから、時計を見ると、時刻は七時半。

冬に入ろうかというこの時期に七時半というのは既に周囲一帯が真っ暗な時間帯だ。

「流石に遅いな・・・」

今日は多分帰りにココが付いているだろうから襲われても心配はないだろうがそれでも心配はしてしまうものだ。

「ま、俺がエリート様の心配ってのも可笑しな話だけどなあ」

自虐的に言いながら冷蔵庫のジュースをペットボトルに移してテレビの前へどかりと座り込む。

口にペットボトルを咥えてから朝にクラスメイトたちが話していた話題がフラッシュバックする。

『戦争が始まるんだってよ・・・』

まさか、とは思うが・・・

アキがそこまで思っていると、玄関の戸が静かに開いた音がする。違和感を感じながらソロリソロリと玄関へ歩み寄って、角から覗く様にして玄関へ視線を投げると、そこには見覚えのあるシルエットの二人の少女がいた。

それを確認すると、警戒を解いてジュースの入ったペットボトルを片手に歩み寄って言う。

「なんだよ遅いな。なんかあったのか？」

近づいてみて分かる。

（疲れきってんな・・・？）

その理由は分からないが、とりあえず今は聞くことだけ聞いてしまおう。

「どうしたんだ？お前等そんなにしょんぼりして」

努めて軽い調子で放ったアキのその言葉は表情と一緒に凍りつく事になる。

「私たち」

口も開けない様子のルイに代わって、ココが口を開いた。

「アルマ搭乗者選ばれて、強制的に戦争に行く事になった」

その言葉を聞いた瞬間に、付かれきったルイの表情に、朝と同じものがフラッシュバックする。

『争いは・・・もう嫌よ・・・』

パシャン、とペットボトルが地面に落ちてつぶれる音がして、足が濡れているような気もするがそれも無視してアキは追い討ちをかけてしまうように尋ねた。

「お前らは、いいのか？アルマに・・・乗りたいのか？」

アキのその問いに二人は枯れ切った声で答える。

「嫌に・・・決まってるじゃない・・・」

二人はそう言って何かの堰が切れたように崩れ落ちた。

「おい・・・」

慌てて駆け寄ると、二人は意識を失っていた、というよりも疲れきって倒れて寝てしまったようだ。

それを見て安堵の溜め息を漏らす。

「ったく、お前等は神経図太いんだか細いんだか・・・」

アキはそう言って二人を担ぐとルイの寝室へと連れて行き、少し高さのあるベットへと寝かせる。

すると、ベットのふちに何か赤い物が落ちているのに気付く。

赤紙と呼ばれる赤く染められたB5サイズの紙だった。

「嫌な文化が残ってるもんだぜ・・・」

赤紙を見て溜め息を吐き、赤紙に書かれた文章を見て再び溜め息を吐いた。

「お前らの命を差し出せ・・・か」

かなり捻じ曲がった解釈で意識をして、赤紙をくしゃくしゃにしてゴミ箱へ投げ入れて、ギリ・・・と鈍い耳障りな音を立てて歯軋りをする。

「全く戦争って奴は・・・こうもあいつから大事なものを取り上げやがる・・・」

アキはそう言ってベッドの上に抱き合うようにして寝転がる二人を見て続けた。

「許せねえなあ・・・つまらねえなあ・・・」

「あつたまくるなあ・・・」

試練の壁

「ふむ」

二人が倒れこんだ翌朝、二人は何も言わずにそのまま登校していた。

一般市民からの徴兵制度は無いものの、優秀な人間は引き抜かれるということなのだろう

止めて欲しそうな顔をしていた・・・といえはそうだけれど、今から俺がしようとしている事を言ってしまうえば猛反対しただろうし、今日の朝に言葉をかけて同様させるのも不自然な挙動につながって不味い。

「つまりこれが二人の移動ルートと、俺の脱出ルートでいいんだな？」

そろそろ学校の始業ベルが鳴ろうかという時間帯にもかかわらず、アキはパソコンを開いて、表示された地図の二本のくねくねと曲がりくねった線を凝視していた。

『ああそうだよ。一番の難関はここだね』

そう言って指し示されたいくつかあるうちの一つの丸印は、赤く示されていた。

『そこは外殻といって、日の国の端っこ。そこを抜けられればその先にある下町と呼ばれる小さな街に出られる。そこはどっちの国にも属さない独立地区みたいな扱いなんだ』

聞きなれた声は、一旦言葉を切って何かを呑んでから続けた。

『んで、問題は越える時の話。もちろんのようにそこには兵器がある。けれどもその兵器はあくまでも外から内への攻撃に対する兵器であって、内からの攻撃には対応してないんだ。だから問題になった時は守衛の人間だけが対応できる。』

「だったらそんなに難しくないんじゃないか？」

モンキの声に差し込むように自分の疑問を投げつけると、モンキは

まあ落ち着けてば、とアキを諫めてから続ける。

『問題はその人間さ。たった二人しかないんだけど、その二人が問題。アルマを操るファーストだよ。一人は機械ではできない連絡用、一人は機械で対処できない敵用として配置されてるけど、内からの攻撃・・・しかも学生程度だったら連絡なんかするよりも先にアキ達を潰そうとして二人とも来るだろうね』

アルマ。

突然降りかかってきた問題に、アキは頭を抱えた。

「アルマの対処法は？」

アキがだめもとでモンキに聞くが、モンキはしばらくの沈黙の後に残念そうに返す。

『残念ながら、国家機密級の情報はノーリスクで手に入れられないねー。要所にハッキングでもすればいいんだろうけど・・・まあ下町に行ってしまうばもう相手の管轄外だから追ってこないよ、たぶん。ハッキングすれば破壊できる方法も分かるだろうけど・・・』

モンキが危険なところへと突入しかけた所で、アキは慌てて止める。

「ああ、いいよいいって。そこまで頼めない。情報は十分だよ。ありがとう。感謝するよ」

アキはそういうとパソコンを閉じてイスの後ろにおいてあったリュックサックを肩にかけると、ふとポケットの携帯が震える。

何だ、と思って携帯を見てみると、来たメールはどうやらモンキからだ。

件名・・・なし

本文・・・感謝する必要はないぜ、こっちも趣味だよ。祭には参加しないよね？

あと、この携帯は壊しておく事をお勧めするよ。いまどきGPS機能の無い携帯なんか無いから・・・骨董品好きのおっさんならいざ知らず。お前の持つてる携帯は十中八九付いてるぜ。

俺宛のメールはいつでもドンと来いだからメールアドレスだけ持つ

ておいてくれよ。流石に顛末は気になるし。

P・S

三人元気に暮らせよ。

下町に知り合いは居ないからなんとも出来ないけどあそこはかなりフランクな所だって聞いたぜ。大丈夫だろ。

頑張れよ

ぐ、と目の奥に何か熱いものがこみ上げてくるのを感じて目をつぶる。

一見ただの馬鹿にしか見えないモンキは、なかなかどうして格好良いところがある。

あいつがモテモテになるのは・・・まあ難しいだろうけど、そのうち・・・きっとそう遠くない未来に恋人が出来るだろう。

妙な考えで頭を埋め尽くしてこみ上げてくるものを押し返すと、折りたたみ式携帯を閉じた勢いそのままに握りつぶした。

「後に引き返すのなら・・・今」

正直言ってしまうはこのまま逃げ出したいし、このまま家に居たい。そうすれば戦争は何処かの誰かが戦っている出来事であって、俺には関係ない、といったスタンスで生きる事ができる。

けれども。

だけでも。

「それじゃあやっぱり・・・楽しくねえわな・・・」

あいつと、あいつらともう出会ってしまった。関わり合いを持ってしまった。

あいつらの事を好いてしまった。

なら自分の隣に居ないのは・・・嫌だ

「子供のわがまま・・・と言われても仕方ねえさ」

バイクにまたがってフルフェイスヘルメットを被ると、一気に加速して学校へと発進させる。

「MAP表示」

アキが低い声でそう呟くと、目の前の目を保護する透明な部分にうつすらと先ほどダウンロードさせておいた経路を表示させる。

その地図の赤い経路の中に青い点が一つある。

「まだ学校は出てねえか」

予定に変更はない。

現時刻九時十五分。

あいつらの出発は、十五分後だ。

「十分だな」

アキはそう言って更にアクセルを踏み込んだ。

すると予想通りに後ろにい幾台かのパトカーがファンファンと大きな音を奏でて追ってくる。

「ここまでは順調だ」

速度法違反で大きな音声でとまることを促してくるがそれを無視して突き進む。こうしてくれることでパトカーの音に反発する磁石のように、この近辺から人は居なくなっていくだろう。

そう言ったモンキはやはり頭がいいというか、民衆の心を理解しているというか。

彼の言うとおりに、ものの五分としないうちに周辺に人の姿はなくなっていくた。

「やっぱあいつFクラスにいるのおかしいだろ・・・」

普段はただのエロ猿だというのに・・・

既に線としてしか捕らえきれなくなった風景を横目に、第一目標地点が視界の前に現れた事を確認すると、バックパックスの中から小さな爆弾を取り出した。

爆弾、と言っても衝撃を加えると容器が破裂してドライアイスと熱

湯が混じって爆発するといった代物だが、中に刃物等を入れることによって状況で使い分ける事が出来るため、そういった意味ではかなりお手軽で、かなり有効に使える物だ。

こぶし大のものを自分のバイクの排気口に入れると、学校の入り口に止まっている車を確認してフルフェイスヘルメットの機能を使って中に誰もいない事を確認する。

「暇つぶしで作った高性能ヘルメットがこうも役に立つ日が来るとは思わなかったな・・・」

苦笑してそういった次の瞬間、アキは顔を陰しくして何かを決意したような表情になる。

「さあ・・・反乱だっ！」

そう言って、グ、と両の足に力をためる。

「まだだ・・・まだ・・・まだ・・・」

アクセルをどんどんと踏み込み加速度的にスピードを上げながら入り口に止まっている黒い車に接近する。

そして残り5mを切ったかというところでアキは両の足の力を振り絞って飛び上がった。

「飛べ・・・っ！」

高校生の足の力に加え、300kmは出ていたであろうというスピードで駆けていたバイクの速度が加わり、そのジャンプはかなり大きくなる。

そしてさらに一つ要因が加わる。

ゴン、という金属と金属が鈍く正面衝突する音が響いた次の瞬間、背後で耳をつんざくような轟音が鳴り響いた。

ゴウツと爆風に煽られたアキは更に飛空に加速をつける。

「こりゃ着地できっかな・・・」

フルフェイスヘルメットの下で冷や汗をかきながら地面を見ると、地面までおよそ10mはあるだろう。

「死ぬんじゃないか・・・？」

などと考えてしまうだけではなく口にまで出てしまうが、もう引き

返せない。

空中で慌てて姿勢を整えて体を丸めると、体を回転させながら、上手く地面に足が着地するように調整し、そのまま回転を緩めずに勢いのままに転がる。

そうして気付けば、すでに学校の裏側だ。

「あの爆風だ・・・爆発もかなりでかいだろうし・・・爆煙のおかげで俺の姿もばれてないと・・・思いたい」

アキはそう言って痛む節々を無理やり動かして立ち上がる。

すると目の前におあつらえ向きに動揺する黒服三人と、ココとルイがいた。

「よーお、朝ぶりだな」

フルフェイスヘルメットを外しながらそういうアキを見て、二人は何事かと目を丸くする。

「おいおい、そんな反応はねえだろ？」

「誘拐しにきたぜ」

アキはそういった次の瞬間には銃を構えていた男へフルフェイスヘルメットを投げつける。

（地図はもう記憶したいらねえさ・・っ！）

しかしフルフェイスヘルメットだけでは、とてもじゃないが目隠しにはならない。

だからこそ。

「拡散！」

アキがそういうと、フルフェイスヘルメットはキン、という音を響かせた後に派手な音と閃光をもってして弾けた。
何も見えない。

しかし記憶の中に、配置は入っている。

記憶をたどって車の運転席に駆け寄りざまに、開いているはずの運転席ドアを蹴って乗ろうとしていた男をドアごと吹き飛ばす。

「どーせ邪魔になるドアなんざいらねえっ！」

ドンツと鈍い音を立てて後部座席に乘ろうとしていたSPごと吹き飛ばすと、一気に車を駆け登って反対側にいる混乱したままの二人を後部座席に寄せ、その流れで助手席にいる男を引きずり出す。見えない視界で暴れる男の動きを予想し、後頭部を掴むと思い切り車にぶつけて気を失わせる。

「悪く思ふなっ」

気を失った事を確認して後ろに放り投げ、視界が段々と治ってきたので割れたガラスを拾って最初に銃を構えていた男の側へ行き、銃を持っている腕と両の足の腱を切り裂く。

ズブ、という肉にガラスが食い込む感触はなんとも言いがたい嫌悪感を胸に孕ませる。

手から零れ落ちた銃と、ポケットから顔を覗かせるマガジンを取り出すと、すぐさま運転席へ駆け込み、アクセルを思い切り踏み込め、キュガツとゴムが削れる音を響かせながら急発進し、未だ混乱するパトカーの横を通った。

ドアが外れている運転席側にパトカーが居たなら確かに危ないが、幸いというか計画通りというか、いまパトカーは助手席側にいる。そしてさらにいえば、これは政府直属の車であり、パトカーがこれを追う理由はない。

「上手く行き過ぎて怖いな・・・」

決して自分の才能によっているわけでもない。

いや、酔えるほどの才能があるわけでもないのだけれど。

アキはそう呟いてバックミラーで後部座席を見ると、そこにはまだ混乱した頭を整理しきれない二人が居た。

「え・・・アキ?・・・だね?」

おずおずといった様子で運転席を覗き込みながら聞いてくるルイは、とてもじゃないがいつもの冷静な表情は消え去っている。

「おうよ」

再び線のように流れる風景を見ながら神経を研ぎ澄まして運転をして、質問に答える。

「えっと・・・何・・・してるの？」

何の質問が来るかとおもえば・・・

「なんだろうねえ・・・まあ、最初に言ったとおり、誘拐さ」

アキはそう言っただけでハンドルを切って角を曲がる。

それなりのスピードが出ていたために曲がったときの横へかかるGは凄まじいが、後ろの二人はそれなりに身体能力が高いので大丈夫だろう。

「誘拐？」

「そう、誘拐。いまから日の国を出て下町に行く。引き返すなら今だぜ。俺はあそこで誘拐って言ったからお前らに罪は被らないはずさ」

アキはそういうと、バックミラーで二人の姿を確認する。

すでにそこには青い顔を引っ込めて真剣に何かを考える姿があった。
(つたく・・・速いねえ)

何が、とはいう必要も無いだろう。

「つまり・・・アキは私たちが戦うのが嫌だ・・・っていうのを知って助けに来た・・・ってこと？」

ルイの言葉の途中で、録音機能があるであろう箇所を破壊して答える。

「まあ。そうだね」

アキがそういうと、弾かれたようにルイが叫ぶ。

「馬鹿じゃないの！？アンタ普通に生きられたのに！あんたは普通に生きていられるって言うからせっかく行くことを許可したのに！こんな事されちゃ台無しじゃない！どうせ逃げられないわよ！だって外殻があるんだよ！？アルマがいるんだよ！？無理じゃない！」
堰が切れたようにまくし立てるルイの言葉を全部聞いてから、アキは静かに言った。

「まあ、お前が俺にどんな気遣いをしてくれてたかなんて分からないけど、俺が自分勝手だってことも知ってるけど。けどさ、お前らが知ってる俺は、幼馴染や親友が戦場に言ってるのに一人安穩と

生きられるほど、イイ性格してないだろ」

アキがそういうと、ルイは黙り込む。

「んま、全部俺の自分勝手さ。下町に行ってもっと良い生活が送れるとも限らない。いやなら、ここで降ろしていくぜ」

アキがそういうと、今度はココが答える。

「そんなこと・・・できる訳無いじゃない・・・私たちだって・・・戦うのはいやだよ・・・人を殺すのなんて・・・」

ココがそう言って、ルイがうなずくのを見て、アキは心の中で溜め息を吐く。

（正直ここが一番の難関だったからな・・・こいつらに逃げる意思がなかったらただのおせっかいだったわけだし・・・ってまあ今更だけど・・・）

「んじゃ、ちょっと手荒なエスコートをお許してください。」

アキはそういうとハンドルとアクセルを固定してドアの無い運転席から身を乗り出して後部座席へ行くと、二人を抱きかかえるようにして持ち上げ、車の中においてあったコートで自分ごと包むとそのまま自分を下敷きにするようにして飛び降りる。

幸いこのコートはかなり滑りやすい材質で出来ているので、先ほどのように転がらなくても・・・まあダメージは軽減される。

大丈夫だと思ったらすぐにコートを広げてその場にすて、そのまま路地に入り込んで置いてあるバイクに乗り込む。

サイドカーがついている自家製品だ。

「乗って」

そう言って二人にフルフェイスマスクを投げると、アキをサイドカーに乗せ、ココを後部座席に乗せる。

「行くよ」

ガコン、とスタッドを上げてエンジンをかけてしばらく裏路地を走り、大通りへでて更にそこをしばらく行くと、そこには空高くそびえ立つ外殻と呼ばれる物が鎮座していた。

「こいつを越えれば、終わる」

壁越え

「さて、行くか」

カラン、と乾いた音を響かせながら、休業中とかかれた表札をドアにかけると、ヤイナは仕切りなおすように言った。

時刻は朝六時。

冬もそろそろというこの時期は、この時間だと息が白く凍る。

建物の森、そう別称が付けられる下町は、その名の通りだ。

上から見て地面を見つける事はそう容易じゃあない。

何故、といわれれば、狭い土地に沢山の人数が住む事になったので上に逃げるしかなかったといわざるを得ないだろう。

実際、今ヤイナが住んでいるこの建物は40階立てだ。

40階立て、といってもビルのように真っ直ぐ立っているわけではなく、キノコのカサのように広がり、曲がりくねっている。

そんな建物たちが入り混じっているので、生活圏が地表という普通の人間はかなり珍しい・・・というかそんな物好きは聞いた事がない。

こんな高い街構造のため、雨はたいした問題になったことはない。一度酷い雨が降った日があったけれど、あれでも精々地面が浸水した程度だったし。

この土地の地面の水はけも異常ではあるのだけれど。

カン、カンと甲高い音を響かせて屋根を踏んで進む。

やはり高いところだと風が問題になるのだが、その問題も幸い、外殻で覆われている二国が両端にいたので、大丈夫だ。西も東も囲まれているのでそんなに強い風は直接当たらないものの、北風や南風といった冷たいのや暖かいのが来るので、それもそれで楽しい。

言ってみれば、二国の中に住んでいる人間からすれば生活レベルは極端に下がるだろうが、住めば都とは良くいったものだ。

そんな事を思っているうちに、日の国の外殻へとたどり着いた。

どんなに高さがある下町の建物でも、いくら上に積み上げようこの外殻はその10m先を進むように作られている・・・というか補強されるだけなのだが。

その10mあまりを、魔法を使っても簡単に登ると、厚さ10mほどもある外殻の上に立って下を見下ろす。

「こいつぁ・・・たっけえなー・・・まあた高くしたのか？これ」
ヤイナはそういうと、眼下に黒い点がこちらへ近づいてくるのに気付く。

この時点で眼に魔法を使っているのは明白だろう。
地面までおよそ800mもあるのに、それが何か、とそこまで詳しく把握できるのだから。

「ありゃ・・・傷だらけの青年が女二人をバイクに乗せて走ってるのか」

若干の興味が出たのでそのまま見ていると、どうやら何かから逃げているようで、意味も無く路地へ入ったり出たりしている。

「しかし・・・結局最終目的地はここなんだろう・・・あんまり意味なさそうに見えるがね・・・」

まあ、何か考えがあつてのことだろうと思つて放置をして、ひとまずは隣にいるアルマの相手をするべく立ち上がつてアルマをにらみつける。

「良く・・・私に気付きましたね？」

大人しめのその声の主は、最低限のプロテクターしか着けていない細身の女の子といえる程度の年齢の女性だった。

「あぁン？お前・・・学生か？」

日の国のアルマを操る学生の特徴を知っているヤイナは彼女にそう言う。

「それも・・・良く・・・分かりましたね」

感心したような雰囲気は僅かに含まれるその言葉を聞いて、ヤイナは呆れたように言う。

「良く分かるねなものにも、お前腕章付けてるじゃねえか。それ学生

って証拠だろうがよ」

普通ならアルマの装甲で隠れる二の腕に付けられた腕章は、とある学校のSクラスの人間だということを物々しく語っている。

「そう・・・でしたね」

ゆっくりとした動作で腕章を外すところを見ると、学生だと知られるのに多少なりとも不都合があるのだろうか。

「ンで？お前は俺に何の用だ？」

図々しい態度でそういうヤイナに表情を微塵も変える様子も無く、彼女は静かに答える。

「貴方は日の国の人間ではない・・・速やかに退去してください・・・」

消え入りそうなその声をかろうじて聞き取ると、ヤイナは笑って答える。

「ハン、お決まりの展開だ。いやだ、と言ったら？」

ヤイナがそういうと、彼女は右腕を少し上げて拳銃を引き抜き、ヤイナに言う。

「ここで、排除します」

「やってみろよ」

凄むヤイナを見て、少女はためらいもなく引き金を引いた。

パン、と乾いた音が響いて銃口から鉛玉が出たのとタイミングを同じくして、アルマを着ている彼女のプロテクターが粉々に碎かれる。

「・・・！？」

終始無表情で通していた彼女に初めて、驚きと羞恥の表情が浮ぶ。

「なあにハズカシがってんだ。とっとと終わらせるぞ」

女性の背後に立つヤイナはそう言って、彼女の足を払う。

パシ、といとも簡単に払われたその体はバランスを崩し、そのまま外殻の内側へと落ちていった。

「学生・・・にしちゃあ弱すぎるだろ・・・あれ・・・」

ヤイナはそう言って下を覗き込むと、普通なら出せるはずのブースターを出せずにあくせくしている姿が視界に入る。

第一世代型以降のアルマ・・・つまり全てのアルマは小型化した装備を肥大化させることで武器や装備を出現させるのだが、それをするためにはかなりの想像力が必要となる。

小型化して体のどこかにつけているアクセサリーを元の大きさに戻したときの質感、重量、形、色、それらすべてをリアルに想像しなければならぬのだが、今の彼女は落下という恐怖にそれらの想像力が押しつぶされていてブーストを展開する事ができない。

「んま、助けるほどお人よしじゃあないがね」

ヤイナはそういうと、外殻から飛び降り、中ほどまで言ったところで思い切り外殻を蹴って九十度の方向転換をして日の国の中心へと飛んでいった。

「ねえみて！」

ルイが大きく叫びながら指差した方向を見ると、外殻から落ちてくる少女の姿が眼に見える。

どういうことだ・・・？

さっきアルマの一体が飛んで言ったということは中央への連絡・・・？

じゃあ二人目に飛んでいたのは・・・？

アルマが二人ともここを離れるとは思えない。

だとしたら。

（襲撃！？）

いや待てよ・・・そんな事があるはずが・・・！

ここへ来て連合国が日の国へ攻め入ってきた可能性が浮上し、脳裏で引き返すか？と自分に問う。

馬鹿言え、今引き返したらそれこそ袋のネズミだ。

「進んで。逃げよう」

進むか退くか迷っているところに、背後に座っているココの声が響

く。

「——うん」

ブオン、とエンジンが唸りを上げる。

史上最初の、日の国からの脱出劇だ。

急激に速度を上げたバイクに体がもっていかれそうになるのをかろうじて踏みとどまる。

外殻まで残り5 m

上手く行けよ……っ！

ブン、とバイクにつけていた巨大な三日月状の刃だけの円盤をエレベーターへ投げつける。

そして、衝突。

飛び上がって、バイクと同時に外殻へと衝突する。

すると地面に設置されているエレベーター装置が破壊され、一気にロープが引き上げられるが、肝心のエレベーターがロックされているために上昇しない。

ガチン、と再び動きを止めてしまう直前のエレベーターは先ほど投げた円盤と、爆風によって再び動き出す事になる。

爆風でエレベーターを保護していたガラスが割れ、そして円盤がエレベーターを吊り上げようとしていた紐を切り裂いた。

結果。

とてつもない勢いで紐が上方へと引っ張り上げられる。

そしてそれにリンクするようにして、今ここにいて、という目印として付けられている強力な磁力によって集められた赤い砂鉄が上昇していく。

「磁力オン、くっつけ……っ！」

アキがそういうと、足のブーツがブン……と低い音を上げて突然重くなる。

安全策を講じたたび職人の作った安全靴は、鉄にくっついて落ちる

事を無くした・・・という画期的なアイテムである。それを改造したのが今アキが使っている靴だ。

次の瞬間。

ガン！と凄まじい音を立てながら赤い砂鉄が集められているところへと足がすいついた。

「あが・・・れえええっ！」

ぶお、と凄まじい風圧を全身に受けて、背中に背負われている二人の負担を軽減する。

勘ではおよそ、時速500kmもの速度が出ているだろう。

そしてかすれる視界の隅で落ちてくる少女を捕らえる。

正直ここで手を出して掴んでそのまま引っ張り上げる事はおろか、そのまま引きずられて下に落ちてしまう確率のほうが多い。けれども

「どうせなら・・・っ！」

ガツと左手を突き出して少女の肩の服を掴むと、そのまま引き上げる。

ボギ、と鈍い音を立てて左肩が外れる。

「骨が外れようが・・・筋肉はついてらあ・・・っ！」

加圧に負けないように左手の力を限界以上に引き出す。

「っつらああああああああああああああああああ！」

加圧に持つてかれそうになる体を、叫び声を上げる事でかろうじて踏みとどまらせる。

恐らく背中にくっ付いている二人はもう気を失っているだろう。

急上昇と急降下は身体と精神にそれなりのダメージが加わる。

計画を知っていたから俺は良いが、何も知らない二人はもう付いて来れる範囲は軽く超えているだろうし。

そんな事を思っているうちに、とうとう頂上まであと10m。

「磁力解除！」

アキがそういうと、足を引っ張り上げていた力がフツと無くなり、あとは慣性であがっていくのを待つばかり・・・だったのだが。

残り2 mと言う所で慣性が力を使い果たした。

「やば・・・っ！」

アキは咄嗟に身をひねりながら壁を思い切り蹴り、2 mは越えられたのだが、壁を蹴った事で壁から離れてしまった。

「ちくしょうが・・・っ！」

そう悪態を吐くと、左腕に抱えられていた少女がボソリといった。

「私を壁の上に。引き上げる。」

後で考えればその言葉が真実である保証はどこにも無いのだが、当時のアキはそれすらも考えられないほどに切迫していた。

「たのんだ・・・ぞ！」

壁を身をひねって蹴ったために生まれた回転力を生かして骨の外れた左腕で少女を壁の上に投げる。

ドン、とワンバウンドして止まった少女はすぐさま立ち上がり、右腕を振りかぶって円の形で何かを投げるようにして腕を横に振った。ヒュン、という風を切る音が聞えたかと思えば、胴体にワイヤーが巻きついている。

そう把握した次の瞬間、全身に思い切り風がぶつかる。

「そういうことか・・・っ！」

しかしこれでは壁にぶつかる。

重力によって落下する自分達の体がとてつもないスピードで壁に迫るのを見て、思わず眼を瞑りそうになるのを必死に堪えて、足の磁力を鉄反発モードにする。

（この操作を誤らなければ、上手く着地できるはず・・・）

凄まじいスピードで壁に迫る体の勢いを殺すために、段々と鉄反発モードを最大出力にする。

するとだんだんと速度は緩まっていき、次第に勢いは止まる。

最大出力にすると壁と同じようにいきなり止まるのではないかと内心冷や汗ものだったが、距離のおかげで効果が段々出るといった結果に終わった。

「この選択は正解だったね・・・」

ふう、と溜め息をつく、少女の引き上げるワイヤーに身を任せて
そのまま上がっていった。

壁越え（後書き）

ここへ来て新キャラクターが参入です。

下町への進出

「すっげえ・・・」

外殻の上から見下ろす。

眼下に広がるソレは

「鉄の・・・森・・・」

そういうしかないだろう。

鬱蒼と生え立つ家々はとてもじゃないが日の国の中の整った家並みとは全く違う。

乱雑として、秩序も無く見える。

けれども。

家々の隙間から見える人間はとても元気に活き活きと闊歩している。

「これが・・・外殻の・・・外・・・」

自分も初めて見た、という風に呟く少女は、どうやら外殻の中ほどまでしかいけないらしく、それ以上外に出てしまうと軍規に反するのだという。

「へえ・・・で、どうする？」

アキが聞いたそのどうする？という問いは、このまま軍に留まって軍規違反した罰を受けるか、それとも出るか、という問いだ。

「もともと・・・私は戦いは嫌い・・・出たい」

「ん、そうだな。一緒に行こう」

そう言って一番近いところを見下ろす。

「10mはありそうだなあ・・・」

困ったように一番近い建物をみて、まあ上がってきたときと似たような感じで行けばいいか、と心の中で呟いて足の磁力をオンにしようとした・・・のだが。

ヴ・・・ヴ・・・ヴン・・・

「ん？」

もう一度オンにしてみるが、こんどは小さな音すらでないところを

かんば見ると、どうも先ほどの最大出力と無理な改造のせいでお陀仏らしい。

「参ったなこりゃ・・・」

困ったように頭を掻いて解決を模索していると、下の建物に人影がひよっこりと現れて消え、そしてしばらくたってから一人の大きめの女性を連れて再び現れた。

そして女性はこっちを見て最初の人影と少し何かをやりとりして、奥の建物から一人の男を呼び出した。

だるそうに動くその男は木と木をつないでは切り形を整えてはしごを作っている。

「え・・・そこから・・・？」

思わずアキが口にした疑問は、誰しもが抱いたものだとおもう。

「やあ、久しぶりにあんなところに立つ普通の人間を見たから連れてこられた時は驚いたよ」

委員長モードの凜とした面持ちの峰が、建物の間を蜘蛛の巣のようにうねって繋がっている道を案内しながら歩く。

「いや、俺としてはむしろハシゴを作れって言われたときが一番びびったわ」

コキコキと肩を慣らしながら隣に歩く大野が悪態をつく。

「あ、ありがとうございます」

未だ展開に付いていけないアキがおずおずといった様子で彼らに礼を言う。

すると峰が振り返り、引きつる笑顔で答える。

「やっぱまだ痛むのか？」

大野が心配して聞くと、峰は少しだけ首を縦に振ってうなずく。

「んま、これで痛くねえとか言ったらもう人間やめてるけどな。まあいいや。お前はヤニ坊の家行ってる。俺が案内しておくさ」

大野の提案に苦言を申し出ようと峰が口を開きかけたところで、大野が手で制す。

「知ってるだろ？ お前より俺のほうがここには詳しいんだ。先輩にまかせろよ」

含み笑いをしながら大野が言うと、峰はしぶしぶといった様子で引き下がった。

「じゃあ、頼む」

未だ委員長モードの解けない峰を苦笑で見送ると、大野はそれぞれ一人ずつ背負っている二人を見る。

「さて、君たちの計画を聞こうか？」

大野がそういうと、アキがはつきりと答える。

「ここに、住まわせてもらえればと」

アキのその言葉を聞いて、やはり大野はしばらく考え込むだろう、というのがアキの考えだったのだが、彼は思った以上に反応が早かった。

「よしいいぜ、じゃあ住居は・・・全員一緒に良いな？」

「え、は、はい」

思った以上にサクサク進んでいく話に若干の気後れ感を覚えながらも応答する。

「んじゃあ・・・学生・・・だよな、お前達」

「はい」

「ふむ。じゃあ後でちよつとやってもらわなきゃいけないことがあるんだ。ああそれと」

大野のやつてもらわなきゃいけないという言葉に若干の不安感を覚えながらも、その先の言葉に耳を傾ける。

「しばらく・・・まあお前達の顔がここに馴染むまで日の国出身だって事は内緒にしておいてくれ。本当は頼りになるやつがいるはずなんだけどなあ・・・あいつはまたどこに行ってたんだか・・・」
呆れた様子で言う彼に苦笑して相槌を打つと、彼も笑って言う。

「ああ、ここじゃ社交辞令なんてえのはあってないようなもんだ。

社交辞令で言ったはずが本当になっちゃったって事も多いからな。そこらへんは気をつけたほうがいいぜ」

世間知らずとも言うがね、と大野は言うのと、最後に一つだけ、と言葉を区切ってアキ達に聞く。

「お前達の見た通り、ここは建物の森だ。本当に日の当たらないところから一日中日のあたるところまであるけど・・・ああ、いや。こんなご時勢だ・・・特に今はな・・・」

なにか聞こうとして言葉を始めたのだろうが、途中で独り言となった彼の言葉を聞くに、ここを中心人物であるヤニ坊という名前の人間の近くに住むのが一番良いだろうという話だ。

「まああそこが一番日当たりの関係も良いし風通しも良い。冬も暖かいし良いだろうなあ」

大野はそう言って、ガシガシと頭を掻きながら立ち上がって付いてくるようにアキたちを促す。

しばらく歩くと、ぽつぽつと人が増えてくる。

しかもその表情は一樣に晴々としていて、どこか楽しげだ。

「私たちの国の人たちは・・・違うね」

いつの間にか眼を覚ましていた背中のココが、しんみりとした調子で言う。

「ああ。俺たちの国の人間とは違って・・・この雰囲気は・・・」

アキがココをおろしながらそういうと、脳裏に戦争前の学校での祭りの光景がフラッシュバックする。

全員が全員楽しげな顔をして、笑って、いつも根暗な人間もこのときばかりは笑顔になる。そんなとき。

今日の日の国でも祭があるにはあるが、今となっては形だけの、楽しくもなんとも無い祭だ。

「天賦祭、つってな。この下町が一斉に沸く祭さ。いつもお祭り騒ぎだから祭だなんだつたっていつもの雰囲気かわらねえがな」
ゲラゲラと笑いながらそういう大野をみて、アキ達は思う。

（ここの人たちは・・・しっかり生きているんだ・・・）

無機物的な祖国の人間とは違う。

そんな事を思いながら歩いていると、いつの間にか目的地へと到着した。

「ここがお前達の家だ。一時的にここに留まるもよし、永住するもよし。まあなんでもいいさ。好きにするといいぜ。ちよっくらやることがあるから、部屋の掃除でもして待っててくれよ」

大野と名乗った彼はそう言うときささと何処かへ行ってしまう。

「敷金礼金とか、そういう問題はいいのかしら」

ココがそういうのを聞いて若干の不安を覚えるが、何も言われなかったということは別に良いと言う事なのだろうか。

「まあ、とにかく入ろう」

アキがそう言って背後にあるドアをガチャリと開けると、そこには少しほこりっぽい空気がたまっていたものの、テーブルやベット、イスやソファがしっかりと配置されていて、今すぐにでも住めそうな雰囲気だ。

「凄い」

ココやアキが思わず漏らしてしまうほどに凄いのは、窓から差し込んでくる光がその室内を幻想的に演出している。まるで一枚の絵画のようなその光景だ。

「こんなところで過ごせるなんて、夢にも思わなかった」

ココが感心したようにそう言ってソファに座り込むと、ボフツという空気が押し出される音とともに埃が部屋中に舞い散る。ゲホゲホと咳き込むココの声を聞いて、ルイも目を覚ましたようだ。

「バツカだなあ。掃除しろって言われたばっかだろ？」

アキが呆れたように言いながら掃除用具を探していると、ココが小さく反論を口にする。

「うるさいわね、ここまでほこりが溜まってるとは思わなかったのよ」

「あら、ここは・・・？」

ルイが眼を覚まして何が起きてるのか未だ把握し切れていないよう

な声色で言う。

「ああ、目を覚ましたね、ここは下町。思った以上に良い所だよ」
アキがそう言って、ルイに箒を手渡す。

「ま、まずはここを掃除しないとなんとも言えないけれどね」

ダン！と両開きの大きな木製ドアが蹴破られる。

「何者だ！」

数人の護衛兵が迎撃するために槍を構えて立ちふさがる。

まぶしく差し込む日の中から現れたのはぼさぼさの髪を掻きながら
ゆったりと歩くヤイナの姿だった。

「よーお。なあぐりこみだ」

牽制

「何をしにきた・・・貴様」

白い髭を生やした男性の目の前にふんぞり返るヤイナは偉そうに肘掛に頬杖を付いて答える。

「はん、何をしに來たか、なんてのはよく分かってるだろ？・・・戦争は勝手にしろ。だがな、下町に手を出すなど言っておいただろ？」

ギロリとにらむヤイナの剣幕にたじろぎながら、初老の男性は言い返す。

「ふん、何の話だか分からないな」

「そおかよ。わからねえなら教えてやる。あの狂犬のたずなを放したのはわざとだろ？」

狂犬、という単語を耳にして男性がぴくりと体を震わせるのをヤイナは見逃さなかった。

「凶星って所か？あいつのたずなを離して下町に餌放り投げりゃ下町に来るのは当然だろおが・・・にしたってまあ・・・あいつが着ていたアルマが第一世代だったのはちつとばかり不可解だけどなあ」
ヤイナがそういうと、男性は組んでいた腕を解いてイスに体重を乗せる。

「それで？貴様は何をしにきたんだ」

「何をしにきたか？んなこた決まってるだろ？お前の隠してる・・・いいや、隠し持ってるといったほうが正しいか？犯罪集團の事、教えろよ」

ヤイナはそういうと一呼吸おいて口を開く。

「確か・・・名前を、嗤う骸骨集團・・・だったか？」

ヤイナの言葉に、初老の男性は冷や汗がどつと吹き出るのを感じる。

「嗤う骸骨集團・・・聞き覚えの無い集團名だな」

「嘘をつくなよ、クソ狸が。まあいい。心当たりが無いならやるこ

たあ一つだ。この国のアルマ使い・・・明日も見れるといいな？」
嫌な笑みを残して立ち去ろうとするヤイナを、男性は慌てて引き止める。

「まっさて！」

「あん？」

「嗤う骸骨楽団・・・という組織ではないが一つ心当たりがある・・・ヴォイス、という組織だ」

ほう、と言って動きを止めるヤイナをみて、男性が微かに微笑んだのを、ヤイナは見逃さなかった。

(丸々太った駄狸野郎が・・・)

所変わってここは照明も落とされている所謂バーという所だ。

しかしそこに集まっているのはいずれも年若い学生ばかり。

「おい・・・そろそろ始めるぞ・・・」

「全員アルマは・・・」

なにやら不穏な動きを見せる彼らのいるバーの扉が勢い良く蹴破られたのはその瞬間だった。

「よーお餓鬼共。粹がるのはここまでだ」

ドアから差し込む光で学生達の顔が仄かに光る。

(本当に子供しかいやがらねえ・・・ったく嫌なモンだ)

チツと小さく舌打ちをして、右手に短剣を持つ。

「ここが線引きだ。生きるか死ぬか。テメェらで決めろ」

ス、と掲げられた短剣を見て、学生達は気付く。

「こいつは敵だ！政府の犬だぞ！殺せ！」

誰かがそういうと、弾かれるようにしてアルマの装甲を展開しながら一斉にヤイナに飛び掛る。

「ハン、お前等実戦経験皆無じゃあねえのか？」

ヤイナは嘲笑するようにそう言って、短剣を翻してその場にいる全

員の足の腱を切り裂く。

「遅すぎるぜ」

影が見えたなら上出来、というレベルの速さで動くヤイナを目で追える人間などいるわけもない。

全員が反抗する気が失せているのを確認すると、先ほど叫んだ男へと詰め寄る。

「オイお前・・・嗤う骸骨楽団っていう名前の組織、知ってるか？」
初心者にでも扱える第一世代しかここにはないが、ここまで集めるのには流石に学生だけの組織では無理な話だろう。なぜなら、アルマを集めるのにはそれなりの流通経路も必要だし金も必要だからだ。しばらくたっても答える様子の無い男を見て、ヤイナは言う。

「仕方ねえな・・・んじゃあ俺がお前等に代わって悪党をやってるよ。何のためにこいつらを生かしておいたと思う？」

ヤイナは言いながら地面に転がる人間達を見下ろして短剣をくるくると回す。

その光景だけで、何を言わなくても分かる。

「卑怯者・・・っ！」

苦しそうにそういう男にヤイナは笑って答える。

「褒め言葉をありがとう。んで？お前がそんなこと言っただけで状況は何も変わらないぜ？どうする？生きるか。周りを道ずれに死ぬか。俺が言った線引きはここさ。さあ大事な選択だ。迅速に、後悔しない答えを出せよ？」

きらりと煌くナイフを掲げて言うヤイナはとてもじゃないがいつもの生活からは想像できるものではない。

「あ・・・ああ・・・知ってる」

漏れるようにしてこぼれるその声を耳ざとく聞き取ると、ヤイナは追求する。

「んで？」

「あ・・・アルマを格安で大量に売ってくれたからな・・・廃棄処分にする予定のものを売ってくれたんだよ・・・」

段々と流暢に話し始める男を見て、やはり圧力が掛かっていた事を悟る。

「で？」

「そっそれだけだよ俺の知るのは！もうしらねえよ！」

慌てて言う男を見て、ヤイナは質問を変える。

「お前等、学生だろ？どこで犯罪組織と知り合ったんだ？」

ヤイナがそう問うと、再び男は口をつむぐ。

「そうか・・・残念だな。まったくこれでうら若き命がまた一つぶれる事になる。」

そう言って思い切り短剣を振り上げると、男は慌てて口を開く。

「成城高校だよ！成城高校と試合したときに会ったんだ！」

成城高校？

「なんだ・・・しらねえのか？FからAまでランク付けされたクラス編成で成ってる今時珍しい高校だ・・・噂じゃ軍人高校生もいるとかいう話だけだよ・・・流石にそこまではしらねえ・・・」

男の言葉を聞いて納得したヤイナは男の首元から手を離してポケットから塗り薬を取り出して男に放り投げる。

「助かった。手荒にしたのはそれが一番手っ取り早いからでな、悪かった。」

ヤイナはそういうとさっさと成城高校に行くために駆け出した。

「君はどなたかな？」

何で正門が粉々になってるんだ・・・と考えながら粉々になっている正門をまじまじと見てみると、がたいの良い教師がつかつかと歩み寄りながら声をかけてくる。

「なに、見学に、とね」

ヤイナが無愛想な顔でそういうと、男性教師は更に訝しげに問う。

「名前と登録番号と所属学校の名称を教えてくださいませんか？」

男性のその問いに、ヤイナは答える。

「名前は木下桐谷。登録番号は37564。所属学校の名称は楽団を潰そうの会所属の成城高校廃棄部隊さ。あいにく学校の名前じゃないがね」

男は楽団という単語が出てきたときにまず顔をしかめ、そして成城高校廃棄部隊と名乗ったときには既にアルマを展開してヤイナへと振り下ろしていた。

「おっと」

サツと後ずさると、ヤイナのいた地面がごっそりと抉れている。

「そりゃあ第三世代のアルマか。やっぱりファーストに部分展開は難しいか？おい」

にやにやと笑いながら男性教師に声をかけると、男性教師は青筋をたててこちらをにらみつける。

「なあんだよ文句あつか？」

「文句・・・ある・・・何故アルマを展開しない」

男性教師のその言葉を鼻で笑って一蹴すると、ヤイナは挑発するように短剣をクルクルとまわして言う。

「お前なんぞにアルマはいらねえよ。かかってこいよ脳筋野郎」

ヤイナの挑発に完全に乗ってしまった男性教師はアルマを全身展開し、分厚く角ばった茶色の装甲で全身を覆った。

「ふん、貴様のような非力な人間、押しつぶしてくれるわ！」

ブン、と唸りを上げながら迫る装甲で固められたその拳をヤイナは片手で易々と受け止める。

「へーえ？これが非力じゃない力なのか？」

ヤイナはそういうと、ハン、と鼻で笑って右手の短剣で装甲を一瞬のうちに全て剥ぎ取る。

「第三世代型の全身装甲型のアルマってえのはな。弱点があんだよ」ボロボロと崩れるアルマ装甲を見て、男性教師は目を丸くする。

「装甲のつなぎ目の役目をしてるアルマ粒子の結束がかなりよわくてな。突くのは難しいが突いてしまえばボロボロと崩れ落ちるだけ

だぜ」

人間と、同じようにな

ヤイナのその言葉を聞いてハッとしたように男性教師は振り返るが、次の瞬間には意識は彼の手中から離れていた。

ドサリと倒れこむ男性教師をみて、ヤイナは軽い口調で言う。

「さあ、この国のアルマを減らそうか」

ニヤリと笑った次の瞬間に、成城高校の各所から砲台が浮かび上がる。

普通の人間ならばそれが学校に備え付けられた装備だと判断するのだろうが、目の良いヤイナは、それら全てが学校から少し離れている事に気づく。

「遠隔出現か。第四世代以降のアルマ・・・か。セカンド、だな」

ヤイナがそう呟いた次の瞬間。

巨大な砲弾の雨が降り注いだ。

ダダダダダダダダ、と耳をつんざくような轟音を耳にしながら、その全てをかわす。

「やっとそれなりの人間が出てきたなあ！」

飛んでくる砲弾を足がかりに更に飛び上がるのを繰り返し、学校の屋上までたどり着くと、そこにいたのは三体のアルマだった。

「へえ？お前等が嗤う骸骨楽団かい？」

ヤイナがふざけた調子でそういうが、三人のアルマは何も言わずにヤイナへと襲い掛かる。

凄まじいスピードで飛び掛る一人のアルマは剣使い。

もう一人は先ほどの大砲を出現させたであろう遠距離系。

そしてもう一人は縄を扱う中距離系。

「バランスが良い組み合わせだな。だけど残念ながら――――」
凄まじいスピードで突きを繰り出す戦闘の青いアルマ使いの攻撃を首をそらすだけでかわし、短剣を持つ拳で腹部を思い切り殴る。

ドッという鈍い音を立てて転がる近接を横目に、地面を蹴って中に浮く中距離系を追う。

アルマを着ていないのにここまでできたのが既に人間離れしているが、それ以上に赤黒いアルマを装着した人間は驚くことになる。

「動きが直線的だぜ。折角のムチが台無しだ」

ガツと縄でできたムチを掴み取ると、思い切り引いて赤黒いアルマへ一瞬で接近して縄を持つ腕を足でホルド、身動きが出来ないようにして右手の短剣の腹で首の裏を叩く。

「馬鹿か？中距離のお前が急所であるところを装甲で抑えないでどうするんだ？」

馬鹿にして笑って、次に銃を構えている白いアルマ使いへ飛び掛る。パパパ、と乾いた音とともに放たれた銃弾を短剣で弾き飛ばすと、そのまま短剣を投げつける。

ブォ、とブーストを聞かせて横移動で短剣をかわすアルマの行動を予測したかのように、その場にヤイナはいた。

「仲間の縄で気を失いな」

ヒュ、と風を切りながら迫る縄の先に着いた文銅のような錘はかわしたが、不規則に動く中間の縄に足を取られる。

「そおら捕まえた！」

ブン、と右手を振り下ろして白いアルマを屋上に叩きつける。

ボゴン！とコンクリートが碎ける音がして、その場に小さなクレーターが出来る。

それを見るに、恐らく白いアルマの世代は第五世代型。

軽い粒子防御が出来るレベルか。

しかし縄をそれで防御しなかったところをみると、予想外の攻撃はかわせない、か。

心の中で適当にあたりを付けると、二本目の短剣を引き抜いてなげつける。

ガツとコンクリートに突き刺さる短剣を首をひねってかわしていたアルマ使いは目をつぶらずにそのままこちらを見上げている。

「へえ、中々度が据わってるじゃねえか」

感心したようにヤイナは呟くと、魔法を背中に発動させる。

「終わり・・・だっ！」

ブン、と音がしたかと思えば、次の瞬間には白いアルマ使いの腹部の装甲を突き破ってヤイナの拳がアルマ使いの腹部を突き刺していた。

「カ・・・ハッ」

くの字に曲がって持ち上がるあごをすぐさま引き抜いた右腕で狙い打つ。

パン、と軽い音がしたなら、それは上手く決まった証拠だ。

ガクリと崩れるアルマ使いをみて、気を失った事を確認する。

「・・・ふう」

久しぶりの戦闘で流れた汗を拭うと、気を失ったために消えたアルマの中から姿を現した三人を見る。

「学生・・・か」

例の軍人学生かね、と思いながら三人のアルマを回収すると、背中に何か飛んでくるような気配を感じて前へ転がりながら回避行動をし、すぐさま背後へと視線を投げる。

「へえ、良い動きをするね」

優等生のような口ぶりで現われたアルマ使いは茶髪の若い男だった。

「なんだてめえ。何様だよ？」

めんどくさそうに舌打ちをするヤイナをみて、現われた茶髪の男は苦笑して言う。

「なんだい？第五世代尖鋭部隊のこの僕が現れてやったって言うのに、敬意の一つも表さないのかい？」

「第五世代先鋭部隊？田舎くせえったらありやしねえな。古臭いおもちゃ転がしていうに事欠いて先鋭部隊か。滑稽だな。笑えるぜ」
ハン、と嘲笑の笑みを浮かべると、眼前に立つ男は顔を引きつらせる。

「何でもいい、来ないならこっちからいくぞ」

ヤイナはそういうと、ダガン！とコンクリートを弾かせて弾丸のよう直進する。

先ほどの第四世代の人間ならばこれで十分だった。

しかし。

「おっと、そんな簡単に済むのは第四世代までだよ？」

スッと右腕を掲げると、男は体に力をこめる。

するとどうしたことか右腕から得体の知れない半透明なものがこちらへ向かってじわじわと進んでくる。

（きもちわりいな）

ヤイナは心の中で舌打ちをすると、両の手を思い切り叩いてからゆっくりと離す。

「吹き飛びやがれ」

ニヤリと笑ってヤイナがそう言った次の瞬間に、ヤイナの手の手ひらの中に生まれた真空がその半透明なものを吸い込む。

スゥ、と一通り吸い込んだとヤイナは判断すると、突然真空の塊・・・今となつては半透明な得体の知れないものの固まりだが・・・それを男へと投げつける。

「なん・・・っ！」

常識を外れた攻撃に目を見開いてあわてて後ずさりすると、男がいまままでの場所で真空が炸裂する。

パン！と軽い音を立てて破裂したソレは、半透明なものを勢い良く噴出した。

一瞬で破裂した場所を埋めた半透明なものが触れたモノはすべての動作がゆっくりになった。

土煙も、落ちていく石もだ。

「へーえ？　ったく行き過ぎた技術は魔法と区別がつかないとはよく言ったもんだな？　イイモン持ってるじゃねえか」

ヤイナはそういうと、脳裏に半透明なものをイメージしていく。

「使わせてもらうぜ？」

イメージ構成が完成すると、ヤイナは不適に笑ってそう言った。

すると次の瞬間に、ヤイナの服の隙間という隙間から半透明なものが噴出しはじめた。

それは男の使うソレとは違い、出るスピードが速い。

つまり先ほどの対処の余裕をなくすことに加え、さらにひとつ決定的に違うものがある。

全身から発しているために、動くことに何も制限がない。

「まあお前がこの技を使うのに制限があるとはおもわねえけど・・・なあ！」

ヤイナは大きな声でそう叫ぶと、初激の突進の二倍程の速度で男に迫る。

「今度はかわせないぜえ！」

グオン！と風を切ってあまりにも速いスピードで迫るヤイナに反応できずに、あっけなく体を霧で包まれて鈍化され、頭を手でつかまれる。

「ぐっ・・・」

ギリ、と齒軋りをする男を見ながら、そのまま腕に力をこめる。

グ、グ、グ、と万力のようにだんだんとしまっていく拳のなかで、不意に男が笑った。

「なんてな、ばかだなあ君は。自分の能力の対策を自分でしてないとでも思ったのかい？それに君は勘違いしてるだろうから言うておくよ。」

男がそれだけいうと、突然あるまの装甲が展開し、噴出口が出現する。

すると次の瞬間。

プシュ、という小さな音を伴って、液体が噴出される。

その噴出された液体が触れていったところから、だんだんと半透明なモノが消えていく。

「へえ？」

その現象に眉をひそめてるのを隙と見て、男は分厚い装甲をすべてパージして石つぶてのように吹き飛ばし、ヤイナを後退させて言う。

「僕の切り札は、この速度さ」

ニヤリと男が笑ったと思った次の瞬間。

「こっちだよ？」

ゴン、と鈍い音が体を伝わったと思ったら、視界が反転していて地面に叩きつけられていた。

「てえっ」

悪態を吐きながらすぐさま立ち上がって先ほどまでヤイナがいたところを見るが、そこには誰もいない。

「だから、遅いんだよ」

どこからか聞こえてきたとおもえば、先ほどと同じように殴られて学校の屋上からグラウンドへと叩き落されていた。

「ゲホッゲホッ」

口に入った砂を吐き出しながら恨めしげに前を見ると、そこには勝ち誇った顔の男がゆっくりとこちらへ歩いてきているのが見える。

「だからいったらう？ 君では僕の相手は役不足だ」

「言ってるよ、馬鹿野郎」

男の罵声を真に受けずに言い返すと、男の姿が再び消える。

「殴られるだけの能無しが何を言っているんだい？」

その言葉とともに背後から放たれた拳を捕まえるのは、ヤイナにとっては容易な作業だった。

「おっとお、危ない危ない」

拳をつかんだヤイナがニヤリと嫌な笑みを浮かべながら後ろを見ってくるのを見て、男は脳裏に自分が殺される映像がフラッシュバックして思わず全速力で後ろへと後退した。

「どういうことだ・・・僕のスピードはあの人以外見切れるものではないはずなのに・・・！」

ギリ、と悪態を吐きながらヤイナを見据えようと視線を上げるが、すでにそこにはヤイナの姿はなかった。

「ずいぶんと狭い世界だなあおい。お前のスピードを見切れるやつなんてこの世にはゴマンといるぜ？」

嘲笑するような調子を孕んだ声色が背後から飛んできてあわてて後ろを見ると、そこにはヤイナが立っていた。

「お前はたぶん、第五世代先鋭部隊でもかなり下の下だろ？・・・
というかそオじゃないと流石に戦争おこさねえと思うぜ、坊ちゃん
よ」

ヤイナがそういつてにやりと笑った次の瞬間には、視界が反転し、
いつの間にか地面に倒れていた。

「なにを・・・した・・・」

ゆっくりとしか動かない口が、どこか違和感を感じさせるが、その
まま喋るとヤイナは理解してくれたように答える。

「何ってお前、お前さんの使っていた半透明なこれさ」

ヤイナは笑って右手を肩ほどまで持ち上げて、その手のひらからふ
わふわと半透明なものを大きくしたり小さくしたりしてもてあそん
でいる。

「そ・・・それは・・・私の洗浄液で除去した・・・はず・・・
この空間ではしばらく使えない・・・はず・・・」

男がたどたどしくさういうと、ヤイナは笑って言う。

「そりゃあ、厳密にはお前と同じなわけじゃねエからな。これは
ただ結果が同じなだけだ。お前らが苦心して開発した工程とは違う
のさ。言ってみれば死ぬ病と同じか。結果としてどちらも死ぬ病だ
からといってAの病にしか効かない薬をBに使っても意味がないだ
ろう？さういうことさ」

シュン、と半透明な霧を引っ込めると、ヤイナは男の腰に下げられ
ていた小さな小刀を引き抜く。

「お前、本当は第四世代を使ってるだろ？加えて言えばその中でも
実力は最下位に近いだろう？あいつらも、お前も」

ヤイナがさういうと、地面に倒れている男は悔しげに顔をしかめる。
「まあ残念だったな。若気の至りですめばいい話だがこれは実戦だ。
お前の人生はここでドロップアウトってわけだ。残念だな、若造」
ヤイナはさういうとわずかに微笑んで、右手に持っていた小刀をく
るりと一回転させるとそのまま男に突き立てた。

「お勤めご苦労さん」

ヤイナはそういうと、学校の校舎の中をグラウンドから覗き込む。するとそこにはいつもとなんら変わらない日常が広がっている。

教師が教鞭をふるい生徒が従う。

「何も見えていない・・・ってわけだ。皮肉だねえ」

世の中のことを学んでいるのにすぐ隣で起きている一大事には気づかない。

皮肉なことこの上ないな。

そんなことを考えて三人分のアルマを回収し終えると、ポケットにしまいこむ。

「しかし第四世代のアルマってのはまた奇妙なモンにしまっただな」

そう言っただけポケットに入れたアクセサリをまさぐると、何の関連性もない三つの小さなものを感じる。

十字架に、指輪に、ミサンガ。

「まあ、いいか」

大して何を考えるでもなく、ここには目的のモノがないことを把握したヤイナは日の国の中心にあるセンタービルを見据える。

「聞こえるか？丸ダヌキ」

ヤイナが風に声を乗せてビルの最上階にいる日の国の首相に話しかける。

すると彼がビクリと体を震わせるのが、ここからでもわかる。

『きつきこえているぞ』

「そりゃ上々だ。俺が言いたいことはわかってるな？」

ヤイナが釘を刺すように言うと、日の国の首相はうなづく。

『わ、わかっている。戦争の痕跡を下町に残せばその時点で即刻この国に対して解体戦争を申し込む・・・だろう？わかっている。承知した』

「承知した、じゃねえんだよ」

『下町に被害を出さないことを確証する』

「それでいい」

ヤイナはそう言うのと首相とのリンクを切り、同時に接続してこの会話を聞き取れるようにしていた連合国の評議会へと言う。

「だ、そうだが？」

『う、む。異論はない。君達を相手にして勝てる気がしないからな』
重苦しいテノールの聞いた声でそう言う男性の言葉を聴いて、ヤイナはそれでいい、とだけ言ってリンクを切った。

（二ヶ国への牽制は上々・・・俺がほとんど力を使っていないのに四世代型を使ったセカンドは手も足も出なかった。しかも四世代型のセカンドと言えば二国の主力級・・・これで十分だろう）

ヤイナはそう言うのと、外郭から外へ出て自分の家へ戻るために歩き出した。

「さ、帰って飯でも食って寝るか」

牽制（後書き）

隠れたところでいそいそと工作をするヤイナさんまじ裏方。

天賦祭

「・・・ふう、これで終わりかな？」

ため息を吐いて埃だらけだったへやを見渡すと、二時間前とは打って変わって塵ひとつ見当たらない。

「いや・・・疲れたわ・・・」

普段家事という家事をやらないココはぐったりと疲れこんだようにイスに座り込む。

その様子に苦笑しながら、ルイがどこから引っ張ってきたのか紅茶セットを大きめのテーブルの上に並べ始める。

「ねえアキ、水とかコンロとかが無いのだけれど、どうすればいいの？」

ルイの質問に、アキはルイがこの部屋に着いてから目を覚ましているという事実を思い出す。

「ああ、そういえばルイはここに来てから目を覚ましたんだっけ。

案内役を買って出てくれた大野って言う人が知ってるから・・・」
「っと思っただけど今どこにいるのか知らないな」

「え・・・大野？」

何かに心当たりがあるのか怪訝そうに眉をひそめるルイを無視して、まいったな、と頭を掻きながらどうしたもんかと考えていると、タイミング良く玄関を開けて大野が峰を引き連れて訪問してきた。

「よお、どうだ調子は・・・っってもう掃除終わったのか？早いな」

感心したように言う大野に笑って、疑問を口にする。

「ちょうどよかった。ここって水とかガスってどうするんですか？」
アキがそう言うと、大野はああ、と言って答える。

「ああ悪い悪い。ここは電気も水もガスも通ってなかったな。じゃあ・・・峰、お前に任せられるか？その、件は」

大野が峰に言うと、委員長モードになった峰はゆっくりとうなずく。
「もう何回やったと思ってるんだ。もう慣れたよ」

「そりゃ上々だ。じゃあ俺はガスと水と電氣の話付けてくるから、お前たちは峰から話を聞いてくれ」

大野はそれだけ言うと、急いだように玄関を開けて外へ出て行ってしまう。

それを見届けた峰は脇に抱えた資料を机にドサリと置くと、アキたちを自分の反対側に座るように促す。

四人が横に並んでもまだ余裕があるぐらいのダイニングテーブルなのだから、それなりに大きいことは分かる。

「さ、て。君たちには一つどうしてもやってもらいたいことがある。行動の制限とも取られるかもしれないな。」

頼杖を着いてそう切り出す峰の言葉に、面々は体を硬直させる。

やっぱりいくらフランクだといっても日の国の人間は信頼できない・・・か。

アキの心の中での嘆息交じりの言葉を汲み取ったかのように、峰は訂正する。

「まあそんなに重く考えることでもないさ。ただ君たちには行ってほしいところがある、それだけのことだ」

峰はそう言うと、資料の中から四枚の紙を取ってそれぞれに配る。そこに書かれたのは、シアトルという文字と大きく張られた建物の写真。

「シアトル・・・この下町と呼ばれる場所の唯一の学校だ。小く大学まで全てを網羅している学校。まあ通うのが義務というわけではないのだけれど・・・実際通ってないものもある。さっきの大野なんかは一度も通ってないしな」

横を向いて呆れたようにため息をついて、四人に言う。

「それと制限、というのは大野から聞いたかも知れないが、しばらくは日の国とも連合側の人間とも言わないほうがいい、ということぐらいだな」

峰はそう言うと、話は以上だ、質問はあるか？と自分の話を終わらせる。

すると、ルイがまず質問する。

「この大学・・とか高校ってどう判断するんですか？」

「ああ、それに関しては学力的に、だな。ここにはいろんな事情を持った人間がいてな、いくら年齢が高くても文字が読めないのもしるし、その逆もある。まあ君たちのように高校生のくせに大学生並みの学力を持った人間もいる、ということさ」

峰の言葉に、アキは体を強張らせて聞く。

この短時間で自分たちの素性がここまで知られたとでも言うのか、

「なぜ、ルイとココがそこまでのレベルだと分かるんですか」

「かまをかける、という言葉を知っているかな？」

アキの緊張した言葉に、フ、と笑いながら答える峰を見て、やられた、という思いが心のうちを占める。

「まあ下町ではこんな感じに揚げ足を取ったり情報を抜き出そうとするやからもある。気をつけることだな。君たちの居た日の国とは良い意味でも、悪い意味でも違うんだ」

峰はそう言うと、まあ、と言って続ける。

「それだけにそういう輩を抑える係が居るわけだ。本人は不本意だがヤイナ・フレイニアという何でも屋の人間が居てな、何かあればそいつを頼りにすると良い。場所的にはここから西に30mほどかほとんど隣といってもいいくらいの近さだ、そう面倒くさがることもあるまい。また、抑える係りはヤイナ一人じゃあないんだ。私達シアトルの委員会もそう言う役割を果たしててな。シアトルに通っていれば何かと簡単に力になれる。そういう意味でもシアトルに通うことを考えておいてくれると良い。」

峰はそれだけ言うと、他に質問は、と聞きなおす。

しばらくの沈黙の後、四人のうち一人だけ異質な雰囲気放つ少女が言う。

「アルマ・・というものは知っていますか」

少女がそう言うのを耳にして、ココとルイは驚く。実はアルマというのはかなり秘密裏に動かされているもので、実態はおろか名前す

ら一般市民は知らされていない実情だ。それなのになぜ彼女は知っているのか。その疑問は次の瞬間に易々と解かれる。

「これ・・・です」

パン、と軽快な音を立てて展開されたプロテクターは必要最低限のものすら粉々に砕かれている。

ソレを見た瞬間に二人は把握する。

アルマ操縦者だから知っていたのか。

少しの驚きはあったものの、外郭の前は仲間に居なかったのに外に居る今自分たちのように下町の外の人間として説明を受けているということは外郭で仲間になったということだし、あんな荒っぽい動きについてこれるのはファーストかセカンドぐらいだろうとあたりを付けていたために、心底驚く、というほどではなかった。しかし、その事実以上に驚く言葉が峰の口から発せられる。

「ああ、知っているとも。君のソレはおそらく第三世代型だろう？」

峰がそう言う、アキと少女を含めた四人は驚きに目を丸くする。

「まあいざれ知ることだし、今言っておいてもいいだろう」

峰はそう言う、最近の状況をつらつらと口にした。

「こんな、どっちつかずの状況の下町だ。しかも日の国と連合国の間に居るんだ。どちらの標的にもなりえる・・・実際一昨日は・・・知っているかどうかは知らないが狂犬と二つ名が付くほどの人物がやってきた。まあ幸い第一世代型に乗っていたためにヤイナは簡単に撃退できたんだが・・・そういったことはあまり珍しくない。君たちが何を思っコにきたのかは知らないが、第三次世界大戦というこの時代だ。完全に安全な場所などどこにも無い。そこは頭に入れておいてくれ」

峰の言葉に、四人はうなづく。

「ま、今この下町が本気を出せば、日の国と連合国二つを相手取っても負ける気はしないがね」

ふざけた調子で言う峰に苦笑していると、峰は話題を切り替えるように言葉をつむぐ。

「ま、くらい話題はここまでだ。次は明るい話題をしようじゃないか。今夜始まる天賦祭、名前だけは大野から聞いたかな？」

峰の言葉に、四人は再びうなずく。

「それは上々。天賦祭はその名の通りに才能を試す祭りだ。勉学、運動、知恵、技術。まあ様々な分野があるな。その中でも一番人気の分野は戦の才と呼ばれるトーナメント戦の総合格闘技のようなものさ。もちろん、本当の殺し合いではない。ルールがあつての試合さ。」

峰はそう言うのと、一瞬だけ表情を暗くしてから続ける。

「それともう一つの目玉は委員戦。シアトルの委員対他のメンバーで編成されたグループで戦う組織戦・・・ということかな。しかし今年はまあ運動音痴がそろいにそろってしまつてね、負けたら解散だというのに肝心の委員長であるわたしは満身創痍のこのさまでね、頼りな男も出払つてしまつていてチェックメイトをかけられているところ・・・なんだ」

峰はそこまでいって、自分が四人に妙な要求じみたことを言っていることに気づき、慌てて話題を戻す。

「いや、すまん話題を戻そう。とにかくも天賦祭のどの分野でも優勝すると100000ゴールドもらえるんだ。出場者の大体はソレ目当てだな」

峰の言葉の中に、聞きなれない単語が出てきてルイは思わず質問をする。

「ゴールド?・・・?円でも\$でもなく?」

彼らの質問に、峰はああ、といって答える。

「ここでは円もドルもゴールドという通貨になるんだ。一応円もドルも使えるんだがそれはそれ自体に書かれた値段でだけ使える。為替のように円高だのなんだのというのは無い。1セントは1円。1ドルは100円。それで固定だ。だからお釣りが10円硬貨二枚と1ドル札が4枚なんていう面白いことも多々ある。ゴールドというのは下町独自の通貨で、硬貨には1とか2とかしかかかれていない。

円を基準に考えているが、1Gが大体200円の計算だな。2ドルでも良いが。つまり100000ゴールドというのは二千万もの大金ということだな。」

峰の最後の言葉を聞いて、四人は驚きのあまり何も喋れなくなる。

「に・・・にせんまん!？」

最初に驚きの叫びをあげたのはアキだった。

「ああ、確かに普通の生活するには多すぎる金額だが、まあこの住民は多趣味過ぎてね、二千万でも少ないという文句が続出さ。

こまった浪費家共だよ、全く」

呆れたように言う峰に、アキは恐る恐る質問をする。

「えっと・・・一番早く使い切った人・・・とか分かりますか？」

アキの質問に、峰は眉をひそめて答える。

「珍しい質問だな。まあいい。そうだな・・・ああそうだ一番早く使ったのはあの大野だな。その場で100000万ゴールド全て使いきったからな」

「え、何買ったんですか？」

「天賦祭に来ていた技巧職人の売っているもの全てさ。それでも払いきれずに多少借金を負ったらしいが、それでももうそろそろ返しきったころだろう」

呆れてものも言えない、といった様子でため息をつく、峰は続ける。

「まあ正直わたしも把握しきっていない部分はある。下町の住人とはにかく祭りが好きでな。天賦祭にかこつけて個人間でもイベントやらなにやらあるからそこらへんで配ってるチラシなんかも目を通すといい。よかったな、ここにきたときに天賦祭があつて。稼ぎ時だぞ」

峰はそう言うと、悪いがもうそろそろ傷が痛んできたから休む、と行って玄関から外へ出て行った。

それと入れ違いに大野が入ってきて、ガスと水と電気を確認すると、ポケットからジャラジャラと音が鳴る袋を取り出してダイニングテ

ーブルに投げた。

「それ、長老から差し入れた。せっかくの天賦祭なんだから楽しみよ、だとき。俺は忙しいから出ちまうが、案内役は適当な人間に頼むといい。この人間はいやなら断るが断るような人間はあんまりいねえからな。頼めば大体案内してくれるぜ」

大野はそれだけいうと、じゃあな、といって急いで外へと駆け出した。

大野の勢いについていいけずにはぼつんと取り残された四人はとりあえず、当分の生活費として頼りになるであろう財布を開いて中身を確認する。

すると中には1と書かれた硬貨がざっと300枚ほど入っていた。

「ボンと六万円だすとかドンだけ気前が・・・」

この人間はいろいろとずれている。そう思ったのはアキだけではなく、四人共通だろう。

市民主催大会

「で、どうする？今夜始まる天賦祭だけど、どうする？行く？」

アキがリビングにあるソファに座りながら聞くと、ルイとココは今日はまだ寝る、とだけ言って寝室へといってしまった。

（ま、こんだけ急に状況が変わったんだから当然か）

それだけ思うと、少女へと向き直る。

「そういう名前聞いてなかったね。何て言うんだ？」

「木下 飛花^{きのした ひか}」

「へえ、木下ね。分かった。んで？木下はどうする？」

アキのその問いに、木下も寝る、といって寝室へと引っ込んでいった。

（なんでい元気あるのは結局俺だけかい）

アキは心の中でそう呟くと、日の国に居るであろうモンキに思いをはせる。

「無事・・・だろうけどちょっと心配になってきたな」

そう思って電話をかけようと思ったが、考えてみれば電話をかける手段も、相手が今何をしているかある程度分かるような時計も無い。

「なんもないな」

嘆息すると、袋の中からポケットに何枚かの硬貨を移すと、寝室へ袋を放り込んでおく。

「ま、盗みに入るかどうかなんて分かったもんじゃないしなあ」

ココが居るからたいていの盗人は返り討ちだろうし。

アキはそうあたりをつけると、外へと繰り出す。

玄関を開けて外を見ると、いたるところに提灯や幟が飾られている浮世離れた風景に心が躍る。

帰りに迷わないように道を確認しながら歩いているとこんがりと香ばしいにおいが鼻をくすぐった。

「そういえば朝から何も食べてないな」

においをかいで空腹を覚えたアキは、においの元を探すべく少しあ
るくと、建物の屋根の上に大きく開いた広場のようなものに行き着
く。

地面がコンクリートや草木ではなく、鉄の屋根の鉄板であつたりと
か、新鮮なことばかりなのだが、今となつては食べ物を探すのが目
的だ。

その大きな円状の広場の外側にずらりと、中心に二列並んでいる。

記号で言えばΦのような形に屋台が並んでいる。

「うわあ」

思わず感嘆の言葉を漏らしてしまうその光景は、もうここ二、三年
は見たことがない。

何を食べようかと屋台を見回すと、もう日の国では見れなくなった
綿飴の屋台やかき氷など、いわゆる体に悪い食べ物の屋台が並んで
いる。

全部を食べたいがそんなにお金を使えないし腹にも入りきらないだ
ろうと、何が良いかと一番のものを探していると、ふとお好み焼き
を焼いているおじさんに声をかけられる。

「おいニーチャン見ない顔だね！新人かい！」

怒鳴り声のような声量なので一瞬怒られているのかと思つて首をす
くめてしまうが、その内容が歓迎の言葉だと気づくと、笑顔を浮か
べて答える。

「そうなんですよ！」

アキがそう答えると、気前のよさそうなおじさんは続ける。

「へえ！連れさんはいるのか！？」

「ええ！」

アキがそう言うのと、おじさんは鉄板の上にお好み焼きを広げて六つ
ほど焼くと、たつぷりとソースとマヨネーズ、ケチャップで作られ
たソースをかけ、お好み焼きと青海苔を振り掛けると割り箸と一緒
にプラスチックのタッパにお好み焼きを入れてアキに手渡した。

「歓迎祝いだ。元気にやれよ！」

陽気なおじさんに元気付けられ、お好み焼きが冷めないうちにと駆けながら家にもどると、おこしても居ないのにお好み焼きのにおいに釣られた三人の少女が目をこすりながらおきてくる。

「やあ、まだ一時間も寝てないのにどうしたんだい？」

アキが笑って言うとお好み焼きが好物なルイとココはアキが持っているものを見ると一瞬で目を見開いてキッチンから箸と皿を持ってテーブルに待機し始める。

あんなに疲れた疲れたといっておきながら食べ物になると流石の早さだな、と呆れてものも言えずにテーブルにつくと、少し遅れてテーブルに着いた木下にもお好み焼きを一枚づつ配る。

「残った二枚は切って分けようか」

アキがそういつて切り分けているうちに、ルイとココは皿の上のお好み焼きを一瞬でたいらげてしまう。

「おいしいね！これアキが作ったの？」

ルイがテンション極まりといった様子でアキに聞くと、アキは苦笑して答える。

「いや、違うよ、ちょっと行ったところに屋台があるからね、そこで買ったんだ」

アキがそう言うとお、屋台という単語にルイとココは過敏に反応する。そういえば二人とも屋台が大好きだったな

心の中でそう思いながらお好み焼きをたいらげると、待ちきれない様子で玄関の前に立つ三人を連れて、通貨入りの袋を持って先ほどの屋台へと繰り出した。

「ほああああああ！」

もはや日本語じゃないその言葉を発しながら人が出てきた屋台村の中をあれも良い、これも良いとはしゃぎながら走り回るココとルイは、屋台の人間にはほえましい顔で見つめられている。次第に二人を気に入った屋台の主が二人に商品をおごり始める始末だ。

呆れて見ていると、いつの間にか背後に立っていた肩で髪を切りそ

ろえた女性がクスクスと笑いながらその様子を見ている。

「や、新入り君」

アキからの視線に気づいた女性は、笑いながらアキへ挨拶をする。

「私は美樹^{みき}よ。以後よろしくね」

青い髪をした彼女は、それだけ見れば連合国の人間の人間のように見えるが、顔立ちが日の国の人間のようなのでハーフなのだろうか。そんなことを考えていると、美樹と名乗った彼女は妖艶な微笑みを浮かべてアキに言う。

フフ、と笑ってそう言うのと、後ろに居た一輪を押す男性を引き連れて木のテーブルが置かれた一角にチラシを並べる。

どうやら彼女はこの祭りのスタッフのようだ。

「ちよつと見てみるか？」

隣に立つ木下にそう言うのと、彼女はうなずく。

「んじゃ、行こうか。」

どうせココとルイはここではしゃいでるんだからまあ良いだろう。

今はしっかりと金を払って射的を楽しんでいるようだ。

テーブルに到着すると、チラシに目を配る。

賞金が出るようなのはそんなに無いが、とりあえず参加しようといった人たちが続々とチラシを持っていく。

聞く話によればどうやらチラシが参加証のようだ。

「これ、いいんじゃない」

そういつて差し出されたチラシには、つわもの求む！と大きく書かれている。

「これって挑戦者募って戦うっていう、あれかい？」

アキがそう言うのと、木下はうなずく。

よく見て見れば、勝者には賞金200Gと書いてある。

つまり、賞金四万円。

思わず生唾を飲んでしまう。

ここの物価の相場は分らないが、屋台を見るに日の国と大体似通っているようだし、四万もあればこの人数でも、少なく見積もって

も一ヶ月は豪華な生活を送れる。

「とりあえず行くだけ行ってみるか・・・」

そう言っただけ自分の分のチラシもとると、ルイとココに声をかけて、渋る二人を連れてチラシの案内する場所へと歩く。

するとすでにそこには何人かの人間がちらほらといて、開始時間まで残り10分ほどとなっていた。

どうやらこのチラシで募集するようなものは、昼間から夕方にかけて、天賦祭本番は全員楽しむといったスタンスがほとんどのようだ。そんなことを考えていると、突然薄暗い倉庫の中の電気がパッと付いて明るくなる。

『レディースエーンじえーんとるめーん!』

途中までは発音をがんばったが、後半は力尽きたのか司会の男性はイントネーションが残念な英語を披露して華麗に登場した。

シルクハットを被り、燕尾服に身を包んだ小太り気味の男性が現れると、途端に会場は熱を帯びる。

会場から黄色い声なんかが飛んでいるのを聞くに、男性はかなりの人気の司会進行役なのだろうか。

そんなことを思いながら中年程度の年齢の男性から視線を外して周りを見渡すと、会場の隅に一人無言で険しい表情を浮かべながら立つ峰がいた。

（なにをしているんだろう）

そんなことを思っていると、突然背後にいた男性に話しかけられる。

「ああ、やっぱり人選が難しいんだろう」

何かを見透かしたように心のうちの疑問の答えを言い当てられた事に驚きながらも、アキは聞き返す。

「委員戦・・・ってやつですか？」

アキがそう言うと、男性は少し驚いたような様子を見せてからうなずく。

「そう。シアトル在学学生は今あの教育性質上・・・平和な奴が・・・というよりも運動音痴が揃い踏みでな・・・実際この町を護衛する

こともかねている委員で頼りになるのはあの峰委員長ぐらいさ。そいでもって彼女は以前ここを襲ったアルマ使いに深手を負った。つまり今の委員はチェックメイトをかけられている・・・まあ人を選びに来たんだろうな。ここに。委員はちょうど全員が一年経過して交換はいつでもできる状況さ。彼女なら勝ち目がないと悟った瞬間に委員長の権限を行使して全員をクビにするだろうね」

「な、なんでですか？」

「委員戦。前回までは顔見せ程度の遊びだったからいいんだがね、今回は相手さんはどこぞのシアトル嫌いの連中さ。委員が負ければシアトルが潰れる。だからこそ委員戦は殺し合いにすらなるかもしれない。ってのがもっぱらの噂さ」

男性はそう言うと、ま、新入りも手伝ってやれるなら手伝ってやってくれよ、とだけ言ってその場を立ち去っていった。

「つまり・・・仲間に怪我をさせたくない・・・ってことか」

峰をみてそう呟くと、いつの間にか前座のこまごまとした注意事項などを全て説明し終わった司会の男性が二人目の挑戦者を探している。

「じゃ・・・ソウデスネ・・・YOU！アナタ来ましょう！」

そう言って小太り中年シルクハット男が杖でさした先は・・・

「ええ・・・俺・・・？」

「レエエエエエエエエエドチイイイイイイイイイイイム！ハリーヤアアアアア！」

レスリングパンツをはいて部隊袖から現れた屈強な戦士としか言いようのない男は会場から惜しみなく浴びせられる歓声に答えるべく手を上げて中央へと歩み寄る。

そして筋肉隆々のその体が中央で止まったのを見計らって、シルクハットの司会役が杖を上げてからこちらへビシッと突き出して叫ぶ。

「ブルウウウウウウウウウチイイイイイイイイイイイイイム。期待のビギナー、下町の新星となるか！？名前、所属不明

の若者だあ！」

「えらい紹介のされ方だな・・・」

苦笑して部隊袖から歩み出ると、パツとライトがいつせいに浴びせられる。

成る程挑戦者を演出しておいて華やかに登場するもチャンピオンが華々しく返り討ちにしてエンド・・・こういう品書きかい
内心でそんなことを思っ、チャンピオンの目の前に立つ。

「お前も気の毒にな、そんな貧弱な体で俺に勝てると思ってるのか？」

チャンピオンの余裕あふれるその言葉に会場は沸くが、アキと司会の男だけは顔に浮かべた笑みを崩さずにいる。

「おいおいなんだよ緊張で表情が凍っちゃったか？」

そんな軽口を叩いて、試合を始めるために四角く浮かび上がったリングの端へ移動する。

見てみれば、相手側には専属のマネージャーらしき人間がいる。

（ま、一対何人ってスケジュールをこなす予定なんだから当然か）
深くかぶったフードの奥で、かすかに微笑む。

「久しぶりの喧嘩・・・か。懐かしい気分だねえ」

ルイとココの才能と見た目から、いじめられることが多かった二人の護衛役をしていたためにそれなりの身体能力の自信はある。

「派手にやろう・・・っ」

フ、と息を短く吐くと、勢いよく立ち上がる。

「なんでもあり・・・勝敗は相手が負けを宣言するまで・・・だったね？」

アキが確認すると、チャンピオンはうなずく。

「いいねえ新人、俺はお前みたいな無茶が好きな人間・・・嫌いじゃないぜえ！」

チャンピオンがそう叫ぶと同時に、高らかにゴングが鳴り響く。

試合開始——

心の中にその四文字が浮かび上がった瞬間に、今まで耳を占めてい

た喚声が一瞬で遠のき、次第に消える。

軽薄な雰囲気から一瞬で戦闘体勢へとシフトチェンジする彼をみて、司会の男性は嗤った。

「ヤハリ——」

登場した瞬間に、深くフードをかぶった挑戦者が新人のアキと名乗る人間だというのは容易に分かった。

一瞬驚いたが、資金繰りという面を考えれば四万と破格なこれにてくるのは当然だろう。

「さ・・・て・・・かかった魚は・・・でかいかな・・・？」

峰はこの大会の賞金を引き上げたのが成功したのを感じて、会場へと注視する。

カン！

と高らかにゴングが鳴り響いた瞬間に、会場にいた数人が挑戦者へと視線を向けるのが分かった。

一瞬で雰囲気が変わった。

日の国出身と言っていたからそれは経験ではなく・・・才能か。

まさか彼は・・・

そこまで思い至って、峰は小さく笑って呟いた。

「まさか小魚だと思っていたのが大型の肉食魚だったとはね——
良い誤算・・・だったのかね」

音が遠のき、視界がスルーになる。

その視界のなかで、ゆっくりと右手をクイクイ、と捻らせて挑発をするチャンピオン。

（余裕ぶっこいてまあ・・・）

心の中でそう呟くと、10mほどの距離を一瞬で詰め、挑発のために出していた右手を左手で掴んだ。

「ホールドだ、チャンピオン」

ハン、と笑って掴んだ左手を思い切り引いてチャンピオンを引き寄せると、右拳でチャンピオンの顎を打つ。

スパン！というきれいな音がして、チャンピオンは崩れ落ちた。

（呆気ないな・・・）

若干の肩透かし感じながら、面白くなかったと緊張を解く。

そして一瞬で寄ってきた音が伝えた言葉は。

「まだよ！！！」

え――

声に弾かれるようにして咄嗟に後ろへ後ずさると、アキの顔のあった場所を真下から突き上げるようにして右拳を放ったチャンピオンの姿が目に入る。

「伊達にチャンピオン名乗っちゃいねえんだよ・・・」

チャンピオンはそう言いながらゆっくりと立ち上がると、こちらを見据えて、静かに言った。

「甘く見ていたことは謝るぜ・・・ギア、入れる」

チャンピオンのその言葉は負け惜しみでも、なんでもない。本当に最初は手を抜いていたのだと、次の瞬間に分かる事になる。

キュ、と左前方から音がした。

（左か・・・っ！）

腕二本を左側に構えて防御をしたが、衝撃はがら空きの右脇から全身を貫いた。

（そうか腕だけで・・・！）

やられた、と反撃するために顔の前に出していたガードの腕を解いて左拳を右前方に居るであろうチャンピオンに放つために引き絞るが、そこにチャンピオンはいない。

「最初からこっちだ、馬鹿やろうが」

声は、右後ろから聞こえた。

パン、と右腕を掴まされると、押されるだけで呆気なくバランスを崩して足をつまづかせる。

「ちくしょ——」

倒れ際に右足を苦し紛れに放つが、それも呆気なく掴まれる。

「ホールドだ、若造」

右足を掴まれた状況で地面に倒れこんだ瞬間に、チャンピオンは腹部に思い切り拳を叩き込んだ。

「げ……ふ……っ」

胃液が逆流してくるのを何とか押さえ、くの字曲がった体を直すことをしなかったのが間違いだった。

上に引き上げられた首を左手でつかまれ、持ち上げられる。

「降参か？ 若造」

ニヤリと笑いながらそう言うチャンピオンの顔を、アキは右足で蹴り上げる。

少し緩んだ隙を突き、両手で左手を引き剥がすと、落ち際に回転しながら踵を横なぎに放つ。

それは後ずさりすることかわされたが、一発は決めてやった。

「降参？ 馬鹿いうんじゃないや。意地でも勝ってやるよ……！」

そう言って一瞬で集中モードへと転換する。

同時にステップを踏んだチャンピオンを見て、どこから攻撃が来ても良いように体を脱力させて、彼の動きを見切るために視界に全精力を注ぎ込む。

右足で踏み込んで左へ、そして……右。

そして姿勢を低くしてさらに踏み込みながら回り込むようにして……

「後ろ……っ！」

先ほどと同じように右後ろに回りこんだチャンピオンの放った拳を振り向きざまに左手で受け流し、勢いに乗ったチャンピオンの顎を右肘で打ちぬく。

カクン、と綺麗に決まったが、先ほどと同じ過ちは犯さない。

降参と言わせるまでが――勝負。

勢いが止まった左手をさらに引き、衝撃でバランス感覚が狂っているチャンピオンの足を引っ掛けて空中に横倒しにした瞬間に掴んでいた左手を離し、同時に地面についていた両足も空中に振り上げる。全身のばねを使って回転しながら踵を落とすという、最速にして追撃としては最強の威力を誇る持ち技。

ゴツと鈍い音が響いた次には、地面に肉が打ち付けられて派手な音が鳴り響く。

この技の後には大きな隙が生じるので、一気に後ずさってチャンピオンの様子を見るために視線を上げると、すでにそこにはチャンピオンの姿はない。

咄嗟に視界を広げると、左に一瞬影が写る。

あれは……まっすぐ後ろに回りこんだのか！

（無駄……！何度やっても同じこと！）

同じ要領で振り向きざまに受け流しか防御がいつでも出来る様に脱力した構えでチャンピオンを見ると、彼は左足をしたから蹴り上げるように放っていた。

（この軌道じゃあ受け流せない……止める……！）

どうせ俊足移動を無理やり止めた後の攻撃。

スピードも乗っていないし大した威力ではないだろう、というのはただの希望的観測だった。

さらに言えば、その希望的観測は粉々に碎かれることとなる。

ガードは完璧だった。

角度、力の入れ具合。どれも喧嘩慣れた彼だからこそ出来たといえるガードだが、チャンピオンのけりは技量でどうこうなるレベルのものではなかった。

メキ、と音がした瞬間に、脳裏で警鐘がけたたましく鳴り響く。

（まずい……！）

折られる、そう脳裏で判断したアキは咄嗟に両足を伸ばして地面を突き放した。

その判断は功を奏した・・・と言えるだろう。

最善を尽くしても脳へのダメージは抑え切れなかったのか、地面に倒れて朦朧とした意識の中、チャンピオンの言葉が聞こえた。

「若造、なかなか強いじゃねえか・・・見所、あるぜ」

委員戦、開始

「————」
息を吸いながら目を覚ますと、そこはどこかの控え室のような場所だった。

一瞬自分の居場所が全く分からなかったが、次第に記憶を掘り起こすして把握する。

確か俺は賞金が出るあれに出て——

回想を始めようとしたところで、突然控え室の入り口が荒々しく開いた。

「あ、起きてる！」

勢い良く入ってきたルイはアキの身よりも何かを案じている風な雰囲気漂わせている。

「峰さんが、シアトルが！」

ルイの言葉に、そういえば天賦祭なんてものがあったな、と思い出す。そして次に記憶の表層に出てきたのはそう——

「委員戦・・・か！」

思い当たった瞬間に、体の上にかけてあった毛布を跳ね除けて駆け出す。

そして火で照らされた会場のそばまで行くと、そこには五人の屈強な戦士の前にたつ脂汗を軽くかいた峰がいた。

腕に委員章を何枚も付けているということとはやはり・・・そういうことだろう。

「まさか・・・一人で・・・！」

ルイがそう叫ぶのを無視して、会場の上で交わされている会話を聴覚をフルに使って聞き取る。

「つまり・・・お前たちの不戦敗で・・・いいってことか？」

ニヤニヤと大将の右側にたつ副将であろう男がいやらしい笑みを浮かべて峰に聞いている。

今、峰が頭を縦に動かせば、シアトルはその存在をこの下町から消す事になる。

生徒であろう姿が自分のいる場所も含めた観客席にずらりと並んでいるが、その全てが固唾を吞んで峰の行く末を見守っていた。

しかし誰一人として、何をしてほしいと願うものはいない。

願いたいことがないわけではない。

彼女の負担になりたくない、そう思うからだ。

「なあ、ルイ。ここには学校があるんだ。」

アキのその言葉に、一瞬首をかしげたルイは何か思い当たったのか、呆れたような表情を浮かべてうなずいた。

「うん、知ってる。」

「お前、また学校・・・行きたいか」

アキのその質問に、逡巡して、答える。

「・・・うん」

「そうか。ならいいんだ。なら、戦える。俺の目的は戦いから逃げることでないから・・・まあ、居場所を守るためなら・・・なんだってするさ」

アキはその場で小さくため息をつく、息を深く吸い込んで大きく叫んだ。

「委員長！遅れました！」

峰がうなずく直前、会場の端から怒号が飛んだ。

もちろん、自分のものだ。

一瞬で会場全体の注目を浴びるのをそのまま無視して、つかつかと委員長へ歩み寄り、一番下にある庶務と書かれた委員長章を荒々しく剥ぎ取る。

「言われていた例の委員に就く話、決めましたよ」

峰の前に男どもに向かつて立ち、アキは続ける。

「委員に、就かせてください。」

そうして、シアトルの命は延命された。

「本当に、いいのか？」

峰の何度目かも分からない確認に、アキはうなづく。

「ええ、良いんです。俺は学校に通いたいし、通わせたい。だから・
・戦うんです」

そう言って、アキは立ち上がる。

「君は・・戦いから逃げるために、ここへ来たんじゃないのか？」
峰の質問に、どこまでこの人は見透かしているんだ、と内心ため息
を吐きながら答える。

「いいえ。俺は違います。一緒に連れてきたルイとココは戦いたく
ないからですが。俺は違う。俺はあの二人を助けるために動いてる
んですよ。だからそこに何があるうと、どんな汚れたものが降る場
所があるうと、俺が笠になってやらなきゃあいけない。」

その結果、その笠に偶然他人が入った場合もある。ただそれだけの
ことです。」

そう言って、アキはさっきとは違う、選手用の控え室の扉を開いて
会場へと赴いた。

服装はいつもと同じ、髪型もいつもと同じぼさばさに伸ばした髪。
けれども決定的に違うものがあつた。

「覚悟は・・・持った。もう、大丈夫だ」

決着

「まったくお前のせいでよお、もともと動けない委員長が不戦敗で消えてくれて俺たちの勝ちでたんまり報酬がもらえたってのに。お前のせいで無駄に働かなきゃいけなくなっただろうが」

腰から下のブカブカの長ズボン以外に何も着用していない彼は、ナイフを片手に持っている。インドだかどこかの踊り子のような格好だとも言えば分かるだろうか。いやそれでも分かりにくいが。

「成る程・・・ね、聞いてはいたけれどこれがほかの委員をクビにした理由か」

アキは言いながら、脳裏に峰の忠告を思い起こす。

例年ならばただの親善試合だったが、今回は一歩間違えば死が襲う。

相手も殺そうとは思っていないだろうが、万が一というものがある。限界を感じたら迷わずリタイアするんだ。

人差し指を立てながらそう言う峰を思い出して、思わず苦笑が浮かぶ。

「お人よし・・・なのかただたんに他人を巻き込みたくないだけなのか・・・まあどっちでも一緒かね」

アキがそう言っていると、眼前の男は口を開く。

「お前、新入りなんだってな？何でわざわざ参加しようと思ったんだ？やっぱりそこまでの戦いの自信はあるってことか？」

男の言葉に、アキは笑って答える。

「いーや？俺は十中八九凡才しか持たない平凡無能な高校生さ。掃いて捨てるほどいる高校生さ。ファーストでもない。ましてやセカンドなんかでもない。けれどもね、残念な事に俺は頑固なんだよ。とっても残念な事にね。だからこそこで自分の意見を曲げられないんだ。呆れるほどに頭が固いのさ。無能で頭が固いなんて性質が

悪いだろう？」

そう言って、アキは審判に開始を促す。

「俺はもう、曲げないぜ、周りに合わせて曲げられるところを曲げすぎたんだ。もう曲がるところは、無い」

カン、と甲高くゴングが鳴り響いた瞬間に、アキは動いた。

タン、と石を蹴る軽快な音を響かせながら、三步で男の懐へと詰め寄る。

苦し紛れに出てきた右膝を軽くかわすと、背後へと一瞬で回りこんで首裏へと手刀を叩き込む。

気絶した。

この男はチャンピオンほどタフではないのか、しっかりと目を剥いている。

そして審判がゴングを鳴らそうとしたのと時を同じくして、アキの視界の隅にきらめく光が視界に入る。

咄嗟に前転してその場から立ち退くと、気絶した男からナイフを剥ぎ取り構える。

すると男の後ろにはまた同じ程度のナイフと背格好をした人間が立っていた。

「いきなりルール無視かい？ まあいいさ・・・僕だってこの集中力は切らしたくないからね」

「・・・強い」

ボソリと台詞が口から漏れたころには、すでに三人目との戦いが佳境に入ったところだった。

「チャンピオンとの戦いは・・・本気ではなかったということ・・・？」

思わずそんなことを思ってしまうほどに、圧倒的だった。

しかしそれはただ単に相手が弱かった、ただそれだけのことだ、と

気付けというのは、実戦経験の少ない彼女にとっては無理だというものだろう。

「呆気なくやられましたね」

先ほどもでの似通ったような人間の三人とは明らかに持っている雰囲気が違う二人のうち、小柄な方が大きな目のローブをゆらゆらと揺らしながら余裕を持ってこちらへ歩いてくる。

深くかぶったフードのせいで奥のもこいつも、顔が分からない。

「僕も呆気なく倒せてしまったもんでね、びっくりしているところだよ」

ふう、と流石に疲れた体を重く持ち上げると、目の前にいる敵と戦うために集中をさらに尖らせる。

限界まで尖らせた。

そのはずだった。

いや、そのはずだった、というのはおかしいか。正確にはそれなのに、見えなかった。

気付いたときには右肩が至近距離にいる敵の持ったレイピアのようなもので、貫かれていた。

「なん・・・？」

目の前に現れたのは、大きく刺青が彫られた特徴的な顔だった。

嗤った骸骨の後ろにト音記号が描かれた見たこともないその刺青が何を意味するのか、なんていうものは知らないが、そこから発せられる禍々しいオーラはこの人間が真っ当な人生を送っているような人格者ではないことを物語っている。

肩に刺さったレイピアが傷口を傷つけるのを無視して荒々しく後ずさる。

（どうなってんだ・・・全く見えなかった・・・）

余裕を持って立つ男を見据えて何が起こったのかを考えていると、

男は口を開いた。

「いやぁ・・・こんな生ぬるい人間に下っ端でもうちの構成員が負けていたと考えるとおぞましいですねえ・・・」

ピッ、と剣の先に付いた血を払って、こちらへ向き直る。

（だめだ勝てない・・・勝ちようがねえだろ姿がみえねえんだぞ・・・！）

「初の、死人ですね？」

フードの下に隠れた顔が醜くゆがんだかのような錯覚まで覚えるその声に背筋が凍る思いがする。

そして、視界の男の姿が消えた。

（くそっ・・・ここまでか・・・っ）

脳裏でそう処理する。

曲がるのではなく、強制的に折られる。

初めての経験が、最初で最後になるというその瞬間だった。

（速過ぎる・・・！）

「ダメだアキ君退け・・・っ！」

思わずそう叫んだ時に、左腕に付けていた腕章が二枚剥ぎ取られる感覚が襲う。

弾かれるように見れば、そこにはココとルイが意を決したような顔で立っていた。

「君達・・・」

それは・・・ダメだ、そう言おうとした瞬間に、左腕の腕章を再び誰かに剥ぎ取られる。

何者か、と視線を投げれば、そこには紺のローブを身にまとった不審な男が一人、しかしよく見てみればどこかで見覚えのある背格好の人間がいた。

「にぎやかにやってるじゃあねえか。あいつらに用があった所だ・

・これ、借りるぜ」

副委員長と描かれた腕章を手にして、ローブに身を包んだヤイナは峰に言った。

「それとお前たち」

ローブを着たヤイナは、ルイとココに向かって言った。

「お前達が今からやろうとしているのは、あいつの決意と覚悟を無駄にしようとしている行為だ。加えて言えばお前達二人が入ったことで反則負けになってこっちの詰みだ、考えて行動しろ餓鬼」

ヤイナはそれだけ言うと、50mあまりもある戦闘中の二人へと肉薄した。

もうダメだ、そうあきらめ、せめて死ぬ瞬間だけは目を開いていようと心臓に迫るレイピアを凝視していると、ふとそのレイピアの動きが止まった。

「こいつア降参するってよオ」

鼻にかかった声で審判にそう言うと、アキの胸倉を掴んで峰のいるところまで軽く放り投げる。

「悪いな、これからは俺が相手だ」

ヤイナはそう言うと、目にも留まらぬスピードで迫るレイピアの歯を易々と掴んだ。

「はじめての死人・・・ねえ？残念ながらそれは――」

キン、と中ほどでレイピアの刃を折ると折れた刃を握り、返し拳で男の胸につきたてた。

「お前だったな？」

ドス、と鈍い音を立てて崩れ落ちる男を掴み、後ろにドツシリと構える大男へと投げつける。

「久しぶりだな。まさか嗤う骸骨楽団に入ってるとは思わなかったぜ。ケイツェル」

ヤイナが笑いながら言うと、ケイツェルと呼ばれた男はゆっくりと立ち上がり、リングへと上って答える。

「貴様もこんな生ぬるいところで手をふやかしたか？フレイニア」
「言ってくれるぜ、理念も何も無い犯罪集団はお前毛嫌いしていなかったか？」

「ああ、今でも毛嫌いしている。しかし私のいるここは、ただの理念なき暴走をする犯罪集団では、ない」

「へーえ？言うじゃねえか学生の集まる場所を襲ったのもお前達の構成員の一人だろうが」

「あれは個人の暴走だ。断じて俺たちの理念に基づく行動ではない」
ケイツェルの言葉に、頭を掻いてヤイナは答える。

「お前、前期第三次世界大戦の時に言っただろ？それは、いみねえんだよ。お前の組織の違う派閥だろうがなんだろうが、お前の組織であることにはちがいがねエんだ。そこに区別は必要ねエ。甘いのはお前だろうが。あいつは俺と同じ思考回路してる訳じゃネエから仕方ねえ？ちげーよ、違うんだよ」

「組織ってモンはな、一人が全てで、全てが一人なんだ。つまり、そういうことなんだよ。残念ながら」

ヤイナがそう言うと、ケイツェルは鼻で笑って答える。

「フン、ウィザードのお前はもっとカリスマというものがあったものを、みすみすこんなところで腐らせたな、今の貴様からは馴れ合った牙の無い虚勢を張るオオカミにしか見えんぞ」

ケイツェルはそう皮肉をこめた言葉を放つと、きびすを返して会場を後にする。

「しかしお前がいるとなればもう現時点でここにこだわる必要は無い。忘れるな。お前は二国を支配したつもりだろうが、お前はここに縛り付けられただけなのだ」

そう言って、観客席の影へと吸い込まれていくケイツェルは、残されたアキ達に何か不吉なものを予感させた。が、当のヤイナにいた

っでは平然と、日常的な何かが起こった程度の事でしか、今起きた出来事を把握していなかった。
けれどもそれはあらゆる意味で、良かったのだと思う。

新生組織の暗躍

「で？こいつが新入りか？」

ヤイナが目細めて、峰がつれてきた四人を見つめる。

「ええ、そうよ」

委員長モードを解いている峰がそう言うのを聞いて、ヤイナは首をかしげる。

「で、こいつらがどうしたんだ？」

別にココにつれてこないといけないなんていう決まりがあるわけでもあるまいに。

ヤイナが聞くと、峰は答える。

「彼らを、助手として雇えないかしら？」

その言葉に、ヤイナは拍子抜けしたように脱力して答える。

「ナンで」

「彼ら収入が無いのよ。知っての通り新入りだから保護してくれるような人もいるわけもなし」

「探せばどこにはいるンじゃねえか？シアトルとか」

グシグシと頭を掻いて答えるヤイナに、峰は笑って答える。

「まあいいじゃない、副いい——『わあったよわあったわあった仕方ねえな』」

いやなことを承諾してでも言わせたくない峰の言葉を途中でさえぎると、入り口が突然荒々しくあけて一人の男が飛び込んでくる。

「おお、そろいもそろってどうしたんだ？」

飛び込んできた大野は何事かとヤイナに聞くが、ヤイナの不満そうな態度と新入りの硬い表情、そして峰の満足げな顔を見れば大体分かる。

「ご愁傷様だな・・・そんなお前にもう一度訃報だ。長老が呼んでるぜ。ヤニ坊だけじゃなく何でも屋全員を、だ。それと峰、アンタもだ。」

大野の言葉を聴いて、ヤイナはさらに不満げにうなだれる。

「あーのジジイに呼び出し喰らってろくな目にあった試しがねえよ・
・・」

ツカツカと、下町の主要メンバーとも言える七人は歩く。

「用は一体なんなんだよ・・・」

薄暗い屋根の下の通路を歩きながら、ヤイナはまだ気が進まなそうに大野に聞いたが、大野は答える様子もなく押し黙っている。

（ここではいえない内容・・・戦争・・・関係かねエ）

日の国と連合国の勢力は抑えた。

つまり今問題なのは第三勢力の存在。

囓う骸骨楽団。

犯罪集団だといわれている彼らはこの緊迫しきった状況のなかどう動くのか、全く推測が出来ない。

そんなことを考えていると、ルイがアップテンポな曲を口ずさんでいるのに気付く。

「なんか聞き覚えある曲だな、それ」

あまりにも退屈な道中なので、ヤイナはルイに聞いた。

はじめてあってからまだ20分ほどしか経っていないヤイナに突然聞かれて一瞬どぎまぎしてしまうが、すぐに平静を取り戻して答える。

「ミュージックグループ『謳う女神達』のデビューソングですよ」
つらつらと答えるルイの言葉を聞いて、ヤイナは脳の片隅で埃をかぶっている記憶を掘り起こした。

「ああ、確か・・・なんとかって集団の中の・・・」

なんだったか、とヤイナが首をひねっていると、大野が答えた。

「『セクタディーワ』・・・意味は継ぐ妖精って意味だ」

そう、そうだったセクタディーワ。芸術集団の彼らは大多数、それ

こそ二ヶ国の合計人口の八割の心を奪っていると言っても過言ではない彼らの動きも、今後の情勢にはかなりかわるだろう。

「まったく、こう組織が多いと覚えるのも大変だな」

謳う女神達というグループが組織に所属していたことも知らなかった新入り達を差し置いて、古株の三人はそろってため息を吐いた。

「めんどくせえ」

そんなことを言い合っていると、建物の森の中でもひととき大きな家の前に出た。

言ってみれば木々の中に生える巨大な古い木・・・という雰囲気だ。そのドアをノックもせずにヤイナが開くと、中には大きな部屋があり、その一番奥にひげを生やした老人が一人座っていた。

「よおジジィ、呼ばれたから来てやったぞ」

ふてぶてしい態度で言うヤイナへと、老人は静かに告げる。

「おぬし、やらかしたな？」

「ハン、うるせえ。役にたたねえお前のために働いてやったんだ。金をもらってもいいレベルの働きだったろ？」

ヤイナがそう言うと、老人は苦笑して答える。

「おかげで二ヶ国の動きは制限できたがの、例の組織と新生組織の二つがおかげでぶつかり始めたぞ」

「例の組織と新生組織、そのどっちが喰う骸骨楽団だ？」

「もちろん新生組織が喰う骸骨楽団じゃ」

老人の言葉を聞いて、ヤイナは眉をひそめる。

「つてえことは何だ。例の組織つてエのはまさか――」

「そうじゃ。ウィザードじゃよ。御主達二人が所属していたウィザードが宣戦布告と同時に活動を開始したのじゃ」

大方予想通りだったその内容に、峰は一つ疑問を抱く。

「おぬし・・・達、とはどういうことでしょうか長老」

峰が思わず口を挟むと、長老は笑っていった。

「フェツフェツフェ、言ってなかったのか？お主。」

老人がそう言うと、大野が嫌そうな顔をして答えた。

「うるせえよシヨンベン垂れ小僧に皺が増えたかと思えば面倒なこ
とないやがって」

チツと言って悪態を吐くが、老人の言葉はさらに続く。

「フェツフェツ、そ奴・・・というのも失礼だがのう、峰よ、その
大野と名乗っているのはかのアルマ開発者であり連合側に交換人質
として送られていた本人じゃ」

老人の言葉に、知識の少ない峰は首をひねったが、ルイは反応した。
「嘘よ・・・だってアルマの第一世代が開発されたのはもう30年
も前よ・・・？当時大野恭介はもう20歳前半だったはず・・・い
くら寿命が延びたからってこんな若い姿でいるわけないんじゃない？」

「それが妥当な反応じゃの、お嬢さんしかしのう・・・理不尽なこ
とにこの世界は常識外れな事で埋め尽くされているもんなんじゃよ」
「そのとおりだ」

ヤイナが面倒そうに同調すると、大野がソレをとがめる。

「常識外れのバケモン筆頭が何言ってるんだ」
「るっせえよ」

軽口を言い合う二人を咳払いで老人がいさめると、老人は続けた。

「それで、じゃ。ウィザード頭首と副頭首である御主達たちは一体
どうするつもりかな？」

その老人の言葉に、今度は峰が目を丸くして驚いた。

「ウィザード頭首・・・？ってことは実質二人で第三次世界大戦を
休戦に追いやったウィザード頭首と副頭首って・・・アンタ達だっ
たの！？」

「おうよ」

「指示とか面倒極まりないことは全部大野に任せてたけどな」

たいしたことなさそうに答える二人に呆れて、本日二人目の驚き
で言葉を発せない人間が生まれた。

「ジジイ・・・いや、がきんちよ、俺たちは今ウィザードではなく
て下町の人間だ。それ以外には何もない。だから相手がウィザード

だろうが何だろうが、この下町に危害を加える連中は全てが敵。それで良いだろうが」

ヤイナは吐き捨てるように言うと、ダン！と荒々しく扉を開けて、玄関の外に一步踏み出して続けた。

「そろそろ、時期だぜ」

アキ達には意味が分からない言葉を残していったヤイナをみて、大野も続くように言葉を連ねる。

「んま、そう言うこった。いずれくる悲劇はすでに確定事項だ。いまさらクヨクヨなやんでも仕方ねえよ。俺たちは俺たちの生きたいように生きる。飛んだ場所に嵐が来ようと、雷が来ようと突風が来ようと関係ねえさ。俺たちの翼はそう簡単には、折れない」

大野はそう言って扉を出て行った。

二人が出て行ったのを見届けて、峰も続ける。

「この話に続きがあるとは思えませんが、私も言いますが、おそらく貴方が憂いているような事にはなっても、この下町がなくなるといったことはありませんでしょう。大事なのは私たちの安否じゃないんですよ。この下町の、存続それ自体が一番の目的なんですからおそらくそれは皆が分かっていると思いますよ」

峰もそう言うと、それでは新しい委員を迎える準備をしないといけないので、とだけ言って、新入りを連れてその場から立ち去った。残された老人は思う。

「全く困った奴らじゃのう・・・」

「え、歓迎会、ですか？」

アキが思わず聞き返してしまうと、委員長モードを解いた峰はうなずいて答える。

「そろそろ新学期が始まるころだ。委員の仕事も入って君たちは何でも屋の仕事もある。今やっておかないとやる機会がもうないだろ

うしね」

峰の言葉に一応は納得して、アキは言う。

「でも、どこでやるんですか？」

アキの質問に、峰は笑って答える。

「そりゃもちろん——」

「おい、なんでその流れで俺の家なんだよ」

呆れてものも言えないような顔でカウンターに足を乗せて座るヤイナは早々に邪魔者扱いされてどかされてしまう。

「ほらほらどいたどいた、食べ物がないだろう」

ずらずらと手際よく作られていった食べ物が続々とテーブルを埋めていくのを呆然と見て、さっきの理不尽の話を思い出す。

「一番の理不尽はこいつだろ・・・」

「まあまあ、ゴチになりますって」

いつの間にか隣に来ていた大野をとりあえず蹴飛ばして、ふて腐れる様にカウンター横に設置されたソファにどかりと座り込むと、機嫌の悪いヤイナのそばへ新人のココが歩み寄っていた。

「えっと、すいません、なんかうるさくしちゃって」

すこししんみりと謝る彼女を見て、ヤイナは怒る気をなくしたのか、手をひらひらと振ってさっさと行けと意思表示する。

「あ、はい」

いそいそとキッチンへ引っ込んでいくのを見て、ヤイナは思う。

（ま、緊張を隠そうとする心理は分からなくもねえし・・・仕方ねえほっとくか・・・）

ヤイナは心の中でそう呟くと、静かにソファから立ち上がってドアを開けて月明かりにぬれる建物の森へと出た。

玄関を静かに閉めてその場に座って、深くため息を吐くと、いつのまにか隣にいた大野がヤイナに話しかけた。

「ずいぶんにぎやかになったもんだな」

「うるせえ限りだ」

ヤイナが嫌々そう言うのと、大野は続ける。

「まあ、よ。もうあれから40年も経つんだ。そろそろ相棒の一人でも見つけたらどうだ？」

「はん、うるせえよ余計なお世話だ。俺は相棒を作るには、恨みを作りすぎた」

ヤイナが物悲しげな瞳をしてそう言うのを聞いて、大野は嘆息して言う。

「今のお前は40年前と違うだろうが。実力は今となっちゃあもう誰もお前に敵いやしねえだろ？」

励ますような彼の言葉を、ヤイナは跳ね除ける。

「守る力と殺す力。それはイコールじゃねえんだよ、お前も知ってるだろ」

「知ってるけどよ、それでもお前・・・」

「もう良いんだよ。俺はもう誰も相手には出来ねえんだ。それで良いんだ」

「独りが好きだからか？」

「独りが好き・・・だったらこんなところにはいねえさ。ただ単純に、俺は嫌なだけさ」

何が嫌なのか、とははっきりとは言わずに会話は終わったが、言わずとも分かるというものだ。

「大事な人間がいなくなるのが嫌ならばそこまで深い関係を作らなければ良い。それがお前の生き方か」

「あア、その通りだ」

「臆病だな」

「言い返す言葉なんざねえよ」

「言い返す必要なんざないさ。お前の生き方だ。誇れよ」

それだけ言って大野が玄関から中に入ってしまったから、ヤイナは空を見上げてボソリと呟いた。

「誇れるかよ、クソツタレ」

新生組織の暗躍（後書き）

久しぶりにあとかぎです。

書き溜めの三分の一程度が終わりました。

いやあ私のいつものくせというか、なんというか。

色んな組織やら人間が沢山出てくるのはもうどうしようもないんですかね。

最初は少数先鋭っていうような感じで、本当はヤイナと委員長、大野とアキ達だけのはずだったんですけれど、どんどんと組織が増えて増えて増えて・・・もう手に負えません。

なんてことを思いながら、まだ組織があったりします。

自分で言ってて自分で呆れてきましたけれどもまだまだ続きます！

初めての依頼

どんちゃん騒ぎが終わった翌朝、カウンターに座るヤイナに話しかける初老の老人がいた。

「ンで？何の用だ」

にらみを利かせているのかは分からないが、とにかくも新人四人がすくみ上がる様なヤイナの言葉と態度に、老人はうろたえもせず
に答える。

「いやなに、いつもの依頼さ。毎回天賦祭の後夜祭で出る暴漢がまた出たんだよ」

老人の言葉を聞いて、ヤイナは呆れたように言う。

「まアたか」

「残念ながら、まただよ」

「ンで？報酬はいくら出すんだ？」

「今回はファーストが二人いるからね。ファーストが一人当たり100G。一般人なら50Gでどうだい？」

「暴漢の総人数は？」

「不明だ」

一通りの条件を確認すると、ヤイナは頭を掻いて言う。

「委員に任せらんねえのか？」

「彼女たちはいいい意味でも悪い意味でも日に当たる側だ。何かと都合が悪いのさ」

老人の言葉を聞いて、ヤイナはさらに呆れたような表情になる。

「つまり・・・そ奥いうことか」

「ああ。そう言う事だ」

「ソレも解決しろって事か？」

「解決してくれたらさらに200G上乘せしよう」

「・・・仕方ねえな・・・」

ヤイナは逡巡した後のため息を吐くと、ソファで固まって座ってい

る四人に声をかける。

「おいお前ら、暴漢を捕まえて来い。アルマに乗っていないファーストも倒せないようならここにはいらねえ。捕まえてきた奴の報酬は全員お前らにやるから、がんばるこった」

ヤイナはそう言うのと立ち上がって玄関から外へ出ざまに続けた。

「せいぜい死なねえこった。お前らが死んだら峰の奴に怒られるのは俺だからな」

あいつは面倒なんだ。と愚痴るようにこぼすと、外へと出たヤイナは近くにあっていいる穴からまっすぐ下へと飛び降りていった。

「え・・・ちよつと・・・」

ルイが訳が分からないといった様子で引きとめようとしたが、その声はヤイナに届かなかった。

「ふむ。君達はこのメンバーなのかい？」

まだ部屋にとどまっていた老人は、興味深げに四人に話しかける。

「はい」

アキがうなずくと、老人はうれしそうに答えた。

「峰君の押し付けかもしれないが・・・うれしいねえ」

ニツコリと笑う老人は、続ける。

「新入りに頼むようなことじゃないかもしれないが、彼を、ヤイナ君をどうか頼むよ」

老人に思いもしなかった言葉をかけられ、四人は動揺する。

「い、いや。私たちが守られていますし、とても助けが要るような人には見えませんよ？」

ココが思わずそう言うのと、老人は笑って答える。

「そう見えるがね。私は彼との付き合いがそれなりにある。その全部を見て思うよ。彼は寂しがり屋だ。どうか、頼むよ。わしもがんばってきたがもうそろそろ寿命が来てしまう。峰君と大野君。加えて君たちがいてくれれば、もう心配はないよ。どうか。頼みます」

老人に頭を下げられ、さらに動揺する四人を置いて、話は続いた。

「さて、その前に信頼を掴まないといけないね。君達、町で暴れて

いる連中を引っ立てて来てくれないかい？」

老人の言葉に促されるように、四人は外へと繰り出すと、先日行った屋台が大量にあった広場へと向かった。

「暴漢・・・って。いやねえ」

ココが少し残念そうに言うのと、木下が答える。

「日の国でも祭りの後は暴漢が後を絶えませんでした。祭りで気分が昂ぶってしまったてその気分をぶつける先がない人間が集まった結果が暴漢なのでしょう」

木下も残念そうに言うのと、ルイもうなずく。

「でも、まあそれを防ぐ側の私たちが嘆いても始まらないわ。さっさと行動しましょう」

「何か賞金稼ぎになった気分だな。」

アキの言葉に、ルイは苦笑すると、ふと頭上を影が通過した気がした。

「賞金首のお出ませ、お嬢さん方」

突然背後から聞こえた声に弾かれるようにして四人は前へ跳んだ。

「いい反応するねえ、キミたち」

ぼさぼさに伸ばしたその髪は見ての通り、と言う他ないだろう。骨ばった手にはナイフを握っているのを見れば、確証を持てる。

「いや思った以上に速いね、出てくるのが」

アキが冷や汗をかきながら言うのと、暴漢は隙間だらけの歯並びを見せて嗤う。

「手間が省けただろう？」

嗤う暴漢を見て、思わずアキ達も引きつった笑みが浮かんでしまう。

「うれしいね、大人数で大歓迎とはやってくれる」

アキがそう言うのと、暴漢は少し驚いたように目を丸くして手をサツとかざして何か合図をする。

するとすぐに、建物の間という間からざっと見10人ほどの人間が続々と出現する。

「ファーストがいるかどうか知らないけど、これ全員で2000G

か・・・いい値段だね全くうれしいよ」

皮肉をこめてそう言うと、ルイとココに合図をする。

『逃げろ、家で落ち合うぞ』

二人がその合図の意図を掴む前に、アキは行動を開始する。

「さあ捕まってもらおうか！」

アキはそう叫ぶと、隣にしたから上へと伸びるパイプを思い切り蹴飛ばす。

するとそのパイプから白い蒸気が噴出し、一瞬で周囲一体を真っ白に染める。

相手もそれなりの腕だったのか、寸分たがわぬ正確さでこちらへ肉薄してくる。

真っ白な視界から突然生えてきたナイフを持った拳をкаろうじて掴むと、そのまま握りつぶす。

ゴシヤツといやな音が響くのを気にせずに、落下中のナイフの柄を受け止めてその先にあるであろう首めがけてナイフを思い切り突き出すが、その突きは何者かによって止められる。

一瞬身構えるが、止めるだけでいつまでたっても追撃が来ない。

いつ攻撃が来ても良いように身構えていると、そのうちに霧が晴れてしまった。

誰かの手によってパイプが補修されていたようだ。

晴れた視界の向こうには、砕けた右手を抱えて転がった男と、アキの右手をしっかりと握って離さないヤイナが居た。

「一体、何のつもりですか」

依頼を任せたのに最後までやらせてもらえなかった。その気持ちが行先しての言葉だったが、ヤイナは大して取り合うでもなく答える。

「やり過ぎだ。馬鹿が。賞金首は生きててなんぼだ。殺してどうする」

その言葉に、今自分が相手を躊躇なく殺そうとしていたことに気付いて愕然とする。

「その顔、自分が何しようとしていたか気付いてなかったみたいだ

な」

大して驚くでもなくヤイナは言う。

「はじめての命をかけた殺し合いだ。やりすぎちゃったってことはあって当然なんだ。柄じゃねえが励ましておいてやるよ」

意外なヤイナの行動に面食らって少しの間何も言えずにしていると、ヤイナはふと視線を鋭くして続ける。

「後な、柄じゃないついでにもう一つだ。お前のその戦い方。それじゃあそう遠くない日に壁が来る。気をつけるこったな。今日はもう帰って良い。報酬は後日届ける」

ヤイナはそれだけ言うのと、いつの間にか一つの箇所にはさまれていた暴漢たちをひよい、と担ぎ上げると、瞬く間にその姿を霞ませて消えていった。

「・・・壁・・・？」

ヤイナの言った事がいまいち理解できずに、まあいいか、と判断を下して帰路へと付いた。

その様子を一部始終見ていた男が一人、屋根の裏に潜んで笑っていた。

「あのヤイナに気付かれずにやり過ぎせるとは俺も強くなったものだ・・・いつの日かアイツを殺すのもちゃんとした目標になって来たかつ」

心の中で手ごたえを感じてガッツポーズをとって打倒ヤイナ案を考えていると、まず回りにいるのから消してしまおう、という結論に至った。

「あいつのあの戦い方は・・・使えるな」

不敵に笑う男の真意は、分かりやすい。

「自分から分断されてくれるならうれしいことこの上ないぜ。そうと分かれば早速仲間集めだ」

ファーストコンタクト

「おいヤイナ！後もうちょつとで新学期だぞ！」

ボタン！と突然入ってきた峰を見て、ヤイナは突然意気消沈したように顔をだらけたように緩めたのちに、そそくさとカウンターの奥へと引っ込んでいこうとするが、それを峰は服を掴んで止める。

「ほらほら、君には仕事があるだろう？」

一応はその場にいるアキ達に配慮してなのか、何が、とは言わないが、当事者である二人には十分すぎるほどの言葉だ。

「あの場のノリだったんだ許せ。俺はやりたかねエ」

たじろいで後ずさろうとするが、それを服をがっしりホールドした状態で離さない峰が許さない。

「そんな理由で辞退が許される訳ないだろう？ほらお前のポストもしっかり取ってあるんだ。新学期になったら行くぞ」

そんなやり取りをしている二人を見て、報酬で買った新たな服に身を包んだルイが言う。

「え、ヤイナさん学校行くんですか？」

驚いたように聞くルイを、ヤイナは即座に否定する。

「ンなわけねえだろ人間失格レベルに妄想癖の激しいこの腐った髪ぶら下げたヒトモドキがハシャいでるだけだ」

グサグサと心に突き刺さる言葉を言うヤイナの胸倉を乱暴にひつつかんで無言で拳を振り上げる峰を、ココが慌てて諫める。

「と、とにかく。峰さん落ち着いて」

冷や汗を流しながら峰をどうどうと落ち着かせようと頑張るココをよそに、ヤイナは続ける。

「胸倉掴んでなんだよキスでもしたいのか発情娘」

「聞き捨てならないにも程がありますよ・・・？ヤイナさん・・・？」

峰が委員長モードに突入し、ココが争いに巻き込まれて命を落とす

ことを覚悟して脳裏に走る走馬灯を懐かしげに見ているときに、バタン、と玄関を開ける二人目の闖入者が現れる。

「おおなんだお前らそんなに近づいて。キスでもするのk『ゴホア！』」

いい天気朝にテンションが上がって気軽に軽口を言ってしまったのが運の尽き・・・いや、この場面に居合わせたのが既に、というべきかもしれないけど。

ともかくも壁でワンクッションおいて地面に崩れ落ちた大野を見て、峰はハッと我に返って周囲を見渡し、ヤイナを除く全員が引いた目でこちらを見ていることに気がつき、恥ずかしそうにゴホンと咳払いをして話を始めた。

「ゴホン。まあさっきの件はついできしかないの」

委員長モードを解いた峰は、依頼を持ってきたと前置きをして続けた。

「依頼、といっても私もやるから頼みっぱなしってわけじゃないんだけどね」

「なんでも良いから速く説明しろって」

ハア、とため息を吐いて言う峰に青筋を立てる峰を見て、ココが慌てて落ち着かせる。

再び我を取り戻して咳払いをする峰をみて冷や汗を袖で拭きながら友達のいるソファへ戻って思う。

（私ってこんな役柄だったっけ・・・）

そんなことを思うココの表情があまりにも疲れきっていたのか、隣に居たアキがどんまい、と言って肩をたたく。

（それリストラ・・・）

そんなくだらないやり取りをしている横で、依頼のやり取りがなされていた。

「つまり何か、新学期に大きめな教室作りたいから今使っていない教室の壁をぶち抜いてでかい教室作りたいって事か」

ヤイナが纏めて言う、峰はうなずく。

「それ、俺が手伝う理由ねェんじゃ・・・いや、そうだったな」言葉の途中で峰の服の端からのぞく包帯を見て、ため息を吐いて立ち上がる。

「仕方ねえな。いくらだ」

「20Gでどう？」

「お前40000円で壁ぶち抜けてのか。俺は公式設定では非力なンだぞ」

「学校の中での作業だから関係ないわよ」

「あのなあ・・・」

仕方ねえな・・・と言って、未だ意識を取り戻さない大野をそのままに、一行はシアトルへと出発した。

新人は依頼が来たときようにここへ残ろうかと提案したのだが、それはヤイナに一蹴された。

「お前等がいたって何でも屋の一員だとは思われねえよ。それにお前等学校通うんだろうが。場所、分かるンか」

ヤイナにそういわれてあっさりと納得したルイ達はおとなしく付いて行く事にした。

10分ほど曲がりくねったところを歩いて、ハナから覚える気などなかったアキを除いた三人は記憶に混乱が生まれる。

「もう分からないわ・・・」

かつて整理されていた道が通っている町に住んでいたルイとココは、道を覚えられないという未知の経験にげんりしてやる気ゲージが100から4ほどにまで減ったと呟くと、先を歩く峰が苦笑して言う。

「まあそう気に病むな。もう少しさ。」

その少しがここの人たちは遠いんだよなあ、と心の中でアキが思っている、30mほど進んだ突き当りを曲がる。

なんか書いてあるな、と地面を見てなんだただの汚れか、と多少肩透かし食らって顔を上げると、そこには長老の家の10倍はあろうかと言う意味が分からないほどに大きな建物が目に入った。

長方形のその建物は、端から端まで300mはゆうにあるだろう。おそらく見えてないだけで実際はもっとありそうな雰囲気がある。高さと言えば・・・したが地面だからおよそビル八階立てか・・・。果然と見上げる四人を見て笑った峰は、しばらくの間を置いて言った。

「ここはね、学校と同時に学生寮の役割も果たしているの」

その説明を聞いて、納得したアキは、ふと思う。

「それでもこんなにでかい・・・んですか？」

「ええ。この学生はほとんど全員学生寮に居るからね。これでも後もう少して空き部屋がなくなりそうなのよ」
峰の説明を聞いたルイは、ふと疑問を覚える。

「一家丸ごと住めるんですか？」

その質問は、まあ当然といえば当然だろう。そうでなければ全員が全員家族と住んでいないということになる。こんなに近ければ半全寮制の必要性も感じないし、そんなに品格を重んじるところでもなさそうだからなおさらだ。家族全員で住んでいるのか、と疑問に思うのは仕方がない。

「いや、全員子供だけよ」

峰の言葉に余計に頭に浮かべた疑問が強くなったルイはもう一度質問をする。

このあたりで、ココとアキや木下は大体の予想が付いていた。

「え、じゃあいつ家族に会えるんですか？」

「もう、会えないわよ」

ふ、と柔らかくも悲痛な表情で笑う峰を見て、アキ達は胸が締め付けられるような想いに駆られる

いままで自分たちが悲劇の主人公だと思っていたところはどこかにあったんだと、今気付く。

「ここはね、目の前で家族を殺されたり、もつとひどい目にあわされた子達がたくさんいるの。それこそ、死んでしまおうと思うのに容易い程にひどい目にあつた子達が」

ギリ、と奥歯をかみ締める隣で、ヤイナは飄々と立っている風景は、なかなか異様な光景だ、と思つてしまふのは場違いだろうか。

そんなことを思っていると、ふと峰は表情を一転させて悲痛さを少し柔らかくさせた顔で続ける。

「でも、今はそんな子達が元気に生きている。まだ立ち直つていない子はいるけれど、でもそれでも、治つた子はたくさんいるわ。だから、他の子だって」

これからの事を語る彼女は、この場所がいかに素敵な場所か、というのを語つて、ヤイナに同意の声を求めるために話題を振つた。

「ね、ヤイナ」

「ハン」

明るく接する峰をはねのけるようにして答えるヤイナの反応に、少なけれど一行の心象は悪くなる。

しかしそんなことを気にせずに、峰はヤイナへあらかじめ頼んでいたことを開始するようお願いする。

「おいアキとか言つたか、お前」

ス、とアキを指差して言葉をかけるヤイナに驚いたように反応したアキは、囁んでしまう。

「は、はひ」

「なに馬鹿やつてンだ。ちよつと力試しだ。来い。中庭借りるぞ」
峰の返答も聞かずにそそくさと歩き出すヤイナを慌てて追うアキ達を見送ってから、ココは頬を膨らまして言った。

「なんなんですか、あれ。せつかく峰さんが声かけたのに。」
怒つてそう文句を言うココとは反対に、木下と峰は物哀しげな表情でヤイナを見ていた。そしてふと木下が口を開く。

「彼は、いろんな意味で、この戦争とかかわりを持ちすぎた。その代償・・・過ちを犯したのは彼じゃないけれど、彼は代償を負つて

いる。そんな理不尽、矛盾・・・」

ぽつぽつと喋る木下の言った内容は、戦争と全くかわりを持ってなかったココとルイの二人にはなかなか理解という領域に到達することは出来ない内容だった。

たとえば両親が戦争で居なくなったとしても、ただ居ないだけ。

そこに並大抵のことでは埋まることはない穴があっても、広がりはない。

けれども彼は、現在進行形で広がり続けて、すでに余裕は虫に食われていく葉のように残りが少ない。

「埋めてあげられるかな」

不意にポツリともれた言葉は自分でも予期してなかったのか、峰は顔を真っ赤にしてブンブンと顔を振って自分が言った言葉をごまかすと、案内をするためにシアトルへと足を進める。

そんな彼女を見て一行は思う。

（純情すぎる・・・というか分かりやす過ぎる・・・）

「で、一体こいつはなんなんですか？」

開いた口がふさがらない、といった様子で立ち呆けるアキの目の前には、しきりに髪の毛を気障ったく払う金髪の男がいた。いわゆるエリートなのだろうか。どちらかというとき世間知らずのいいところお坊ちゃんのようなだが。

「さあな。こいつと戦っておけと峰委員長サマが言ってたぜ」

退屈そうにどかりと座り込んで、大して興味もなさそうに頬杖を付いてアキと男の行く末を見守るようにこちらへ視線を投げてくるヤイナ。

（やりづらいなあ・・・）

ジッと見られると緊張して体が動かなくなるタイプ・・・ではないけれどやりにくい状況に違いはない。

「フン、峰さんの隣に居るのにあんな貧弱は相応しくないのだよ」

「……ん？何の話だい？」

アキが彼の言っている意味が分からずに聞き返すと、憤然と足を踏み鳴らして答える。

「彼だよ彼！ヤイナだ！あのひよろっこい貧弱がああ強くて凛々しい峰委員長の隣に良くいると考えると腹立だしい事極まりない！」
「ダンダン！」と足を踏み鳴らしながら説明する彼の言葉をきいて、やっと誰のことを言っているのか理解する。

（ヤイナさんが貧弱……？何を言っているんだ……？）

公式設定では云々言っていたのはそう言うことか、としばらく考えてから答えを出すと、なるほど面倒な設定をしているものだな、と思う。

「というか君、そんなに峰委員長が好きなのかい？」

アキの突然の脈絡が大有りのその言葉に、彼は一瞬動きを止める。
そしてどもりながら答える。

「ととと、当然じゃないか！彼女のような凛々しい方には私のようなエリート中のエリートが相応しい！」

彼の言葉を聞いて、アキは思った。

（……苦手、というか嫌いなタイプだ、この人）

表情には出さずに内心だけで思うと、ヤイナの急ぎの催促によって二人は構える。

すると次の瞬間に、彼の今までのギャグのような雰囲気から、一瞬で針で肌を刺されているような感覚にとらわれるような殺気を吐き出す修羅のような表情へ変わる。

ゾクリ、と背筋を寒いモノが奔る。

気圧された……っ！

戦闘で一番やってはいけないことをやったと気付いたときには遅かった。

ゾン、と鈍い音を響かせて一瞬で展開されたアルマを纏った気障な

男は一瞬でブーストを展開。

次の瞬間には体に衝撃を感じるまもなく地面に倒されていた。

何が起った、と思うほどの余裕もないアキは気障な男の芝居がかった言葉でアキの敗北宣言を声高に言うのを大人しく聞くほかに選択肢は残されていなかった。

「くそっ・・・」

ギリ、と奥歯をかみ締めていると、いつの間にか歩み寄っていたヤイナに顔を覗き込むようにして見られながら言われる。

「やっぱりお前はノーマル、だな」

ボソリと呟いた彼の言葉に多少頭に來たアキは、反抗するように言う。

「あの人は、どれくらいなんですか」

「ファーストだぜ」

ハン、と鼻で笑って顔を上げると、気障な男は命知らずにもヤイナへと挑戦状を叩き付けた。

「ついでだ。峰さんの隣の座をかけて勝負しないかい？」

ニヤリと笑っている男は、弱すぎて実力差が分からないのかそれとも単純に馬鹿なのか。

まあ両者か・・・

アキがそんな相手に負けたのか、と内心ため息を吐いていると、以外にもヤイナは勝負を受けた。

「良いぜ。峰の隣なンぞ興味はねえが売られた喧嘩は買う性質だ。^{たち}

ルールはナシ、か？」

ヤイナが不敵に笑いながらそう言うと、気障男はサラリと髪をかき上げて答える。

「一応君のために降参アリというルールを設けよう。降参と言うカリザインと言えば勝負は終わりだ。」

そう言う男の言葉が終わるのを待って、ヤイナは言う。

「じゃあ、はじめだ。来いよ餓鬼。思い上がったその鼻っ柱へし折ってやるよ」

ヤイナが軽く挑発すると、一気に顔を上気させた男が一瞬でアルマを展開。そしてかろうじて影が見えるというレベルの速度でまっすぐにヤイナへと突進していった。

アキ自身もヤイナの戦闘は始めて見るので、どんな風に戦うのか観察したかった。

だから目を見開いてどんな行動も見逃さないようにとまさに目を皿のようにして見ていた。

にもかかわらず。

いつの間にか気障な男が地面に片手で組み伏せられていた。

「え・・・？」

あの速さを殺して、しかも完全に見切って組み伏せた・・・？

（化け物か）

改めて内心でヤイナの化け物じみた身体能力に舌を巻く。

左手を腰に当てて、利き腕ですらない右手で手ごと背中を押さえていたヤイナはふう、とため息を吐くと立ち上がって言う。

「今の俺の動き、全く見えなかっただろ？」

ヤイナの言葉に、気障男は静かにうなづく。

「そこがお前の現在地だ。お前はまだ山すら見えてねえ。スタート地点にすら立ってねえよ」

ヤイナはそう口から毒を吐くと、何事もなかったかのようにその場を去った。

「その気障男にここを案内してもらえ」

どこからともなくその声が聞こえたのは、戦闘が終わってもう日も傾き始めた夕暮れの事だった。

ファーストコンタクト（後書き）

初めてのファーストとの戦闘、●

ライブル

「以上、シアトル全域だ」

ふう、とため息を吐く気障男の案内は、何度遠慮したくなったことが数え切れないほどに高圧的で分かりにくかった。

実際、まともに頭に入ったことといえは入り口ぐらいのものだ。

「ありがとうございました」

一応曲がりなりにも案内してくれたという建前、男へお礼をすると、男はフン、と鼻を鳴らして言う。

「お前、私と戦ったときに手を抜いたな？」

気障男がそう言うので、思わずアキはびくりと肩を震わせる。

「わざとかどうかはまあさて置いて、だ。」

「手を抜いてなんか、いませんよ。僕はあの通りノーマルであり、無能人間です」

両手をひらひらと振って気障男の言葉を否定すると、気障男は答える。

「フン、世の中にはファースト、セカンドとも違う強さがあるものだ。お前はもう知ってるだろう？」

気障男の言葉を聞いて、脳裏に不敵に笑うヤイナの姿がフラッシュバックする。

「まあ、アレの動きは計り知れない。普段は貧弱者だと聞いていたが、どうやら違うようだな」

まったく狐にでも包まれた気分だ、呆れる。と言うと気障男は昇降口の大きな戸をあけて外へ出る。

すると、外はもう真っ暗闇だった。

「夜、だな」

気障男が誰に言うでもなくそう呟くのを聞いて、アキは小さく頷く。

「まあ、また来るといい。今度は生徒としてな。そのときは今度こそ決着をつけよう」

気障男に言われて、拳をゴツンと軽くぶつけると、二人はそれぞれへの家へと買えるために背を向け合った。

アキは少し歩いて路地に差し掛かったところで、ふと振り返ってシアトルを見上げると、自然に笑みが浮かんできた。

「決着をつけよう・・・か」

こんな興奮する言葉が世の中にあっただなんてね。

心の中でそう呟くと、アハッと笑ってきびすを返してアキは路地へと消えていった。

「ただいまー」

ガチャ、とゆっくりと家の扉を開けると、一番最初に目に入ったのは、リビングにあるソファに腰掛けて分厚い本をペラペラとめくるルイだった。

「何だそれ？」

いまさら異変と言うようなものではないけれど、しかし気になったアキは聞いた。

「どうもこの世界に伝わっていた伝説・・・のような物ね」

珍しくメガネをかけたルイが、興味深げに本を掲げてアキに言う。

「よくある英雄譚のようなものよ。世界を救った。英雄の話」

ルイの言葉を聞いて、アキは言う。

「へえ、お前の好きそうな物じゃなか」

アキは茶化してそう言うが、ルイは真剣に答える。

「ええ。これが創作物なら問題は無いの。これもまたただのフィクションだと割り切って言えるわ。ただこれは事実で、私の最も好む分野なの。つまり、これが何を表すか、分かる？」

ルイの言葉を聞いて、アキは思った。

（ルイはこの分野、つまりノンフィクション英雄譚というものが大好きだ。とある傭兵の話だとか、一人で一部隊を屠った人間の話だ

とか。彼女はその系統の話が大好きで、戦争前に全世界トップの品数を誇る図書館に二ヶ月缶詰になって全てを読破したといっていた。そしてこの本を見るに、紙の日焼け具合等からして少なくとも見積もっても15年以上は必ず経っている。ということは……だろうが、

「隠蔽なんてして誰が得するんだよ？」

思わず頭に浮かんだ疑問を口にして、ルイも頷く。

「ま、その程度の問題なんだろうけれど、でも新しい本が見つかったって言うのはうれしいわ。私はしばらくこの本を読むことに専念するから、色々よろしくね」

ルイはそう言って、再び本を開いて読みふけり始めた。

アキもここまで言われて興味が出ない訳が無い。

気になって表紙を見て見ると、そこにはこう書かれていた。

” 聖騎士皇紀連 ”

「妙な名前だなあ」

特に何を思うでもなく、覚えてたら明日峰さんあたりに聞けばいいか、とだけ思っただけに良いにおいがするキッチンへ行くと、木下に教えながら料理を作るココの姿が。

「あれ、お前料理教えられるほど上手かったっけか？」

思わず言ってしまったから、ああこれは下手うったな、と思った瞬間に。

スキャン！

と、乾いた音が響く。

ちらりと光るものが横にあると思って視線を動かして見ればそこには黒光りする包丁が。

「いやいやいやいや危ないって一歩間違ったら死ぬってば」

冷や汗をびっしりとかいて二本目を構えるココに慌ててそう言うのと、ココは一度ニッコリ笑って包丁を納めた。

これはまずい後でこつてりと復讐されるフラグがビンビンです
そんなことを思いながら部屋へとすごすご戻ってベットの腰掛け

る。

「ふう」

ため息を吐くと、突然疲れがアキの体を襲った。

そういえば来てからまだ二日目か・・・

ベツトに倒れ込んで、腕を目の上にかかるように顔に寄せ、電気を遮断する。

モンキの協力を得て外殻を脱出。

トンデモ芸を繰り広げて無事に。

マイホームが出来て、年一回の祭りに参加して。

いつの間にか唯一の学校の委員になっている。

「ハプニングアクシデントのオンパレードだな・・・」

改めてハードスケジュールだったと思ってもう一度深くため息を吐く。

しかし、今のココやルイ達の様子はそれなりに活き活きしているから、悪いことをした気にはならない。

二日程度で何が分かるか、なんてことは分からないけれども。

けれども今この時点では、良かったと思うしか、無い

旧友

彼等が学校訪問をしてから三日――

時間は順調に、平凡に、平坦に流れて、彼らは休暇を得て、今は買い物へ行っている。

「ンで、一人でゆっくりできると思った矢先に・・・依頼か」

「ええ、依頼よ」

はあ、と大きくため息を吐いて、カウンター越しに峰を睨み付ける。

「で？何のようだ」

ヤイナが聞くと、峰は少し間を置いて言う。

「ヤイナは結構年取ってるのよね」

委員長モードじゃないのか、それなら大した依頼じゃあなさそうだな、と思いながらヤイナは答える。

「ああ」

「じゃ・・・ためしに聞くけど、聖騎士皇紀連・・・って知ってる？」

峰の口から出た予想外の言葉に驚きながらも、ヤイナは頷く。

「昨日ね、聖騎士皇紀連の連長である男の子供だって言う13歳ぐらいの子がシアトルに連れてこられてね？それで今日親を探してあげようと思ったんだけど・・・朝氣付いたら逃げちゃってて・・・」
峰の言葉をそこまで聞いて内容を把握したヤイナは呆れたように言う。

「子捜しを手伝えってか」

ヤイナの言葉に、若干顔を赤くしながら頷く峰。

「アホか・・・こいつ・・・」

「本当なら人数が多い方が良いんだけど・・・アキ君達はいま休暇でしょ？だからヤイナに頼もうと思って。」

「くっだらねえ・・・」

ヤイナがそう言って依頼を断ろうとすると、突然ドアが勢い良く開

け放たれる。

「ここが何でも屋ね！」

幼い高い声が部屋を反響した。

「おいおい・・・冗談じゃねエ」

幼い金髪の少女の姿を目にした瞬間に、ヤイナはげんなりとイスに崩れ落ちる。

「何だ・・・知り合いだったの？まあ依頼は・・・」

峰が依頼の完了を告げようとするのを、ヤイナは言葉でさえぎる。

「終わりじゃねえ。残念だがサービス残業だ。餓鬼」

面倒そうに立ち上がって、ヤイナは子供の頭へ手を乗せて言う。

「お前の親父、殴りに行くぞ」

「何の、つもりだ」

買い物に行く途中のアキがギロ、と睨んだその先には、ナイフを構えた男が一人、戦闘体勢でその場に立っている。

「決まってるだろ？お前達は、邪魔なんだ」

ニヤリと笑う男はナイフをクルリと回して、地面へ煙球を投げつける。

一瞬で視界が白く塗りつぶされる。

「逃げろ！」

アキが叫ぶと、弾かれるようにして響く足音が耳に入る。

（退避完了・・・あとは）

何時敵が襲ってきても良いように全神経を尖らせる。

しかし、何時まで経っても敵は襲ってこない。

「・・・ん？」

流石におかしいと思い始め、視界が晴れると、そこには誰も居ない。残されたのはたった一つの手紙。

”三人は預かった”

その文章を見て一気に汗が吹き出る。

「やられた———！」

「お兄さん、私のお父様を知っているの？」

いかにもといったようなドレスを纏った少女は、これまたそれらしい言葉遣いでヤイナに聞く。

「ああ。お前の親父は知ってるぜ。嫌って程にな」

何故かついてきた峰に向かってお前は来るなオーラを強烈に放つが、峰はソレをもともせずについてきている。

「へえ、ってことはお兄さんも騎士連の人なの？」

あどけなく口から発せられるその単語は、ざっくりとヤイナの心の中へと踏み込む。

「いや、逆さ」

「・・・逆？」

ヤイナの言葉に首をかしげる少女は純粹な疑問を口にするが、ヤイナはそれに答えずに進む。

「ま、大人には色々あるんだよ」

いつもと違う口調のヤイナを見て、峰は疑問を抱く。

（言葉が鼻にかかってない・・・！？）

突っ込みどころが違うような気も、しないではないけれど。

和気藹々といった様子で話しながら歩いていると、通路の向こうから息を切らして走ってくるアキがいた。

「なんだお前。休日まで働こうってエ勤勉さはいらねえぞ」

ヤイナが頭を掻いて冗談を言うが、それを受けるほどの余裕もないアキは急いで言う。

「そうじゃないんだ・・・！ルイ達が・・・さらわれた！」

息をまいてまくし立てるアキとは対照的に冷静なヤイナは熱心に状況と対策を述べるアキに一言はなった。

「ンで、仲間をさらわれてスゴスゴと戻ってきたわけだ」
ハン、と呆れたような目でアキを見て、ヤイナは続ける。

「さらわれた。だからなんだよ」

「助けるのを、手伝って欲しいんだ」

意を決して、といった様子でそう告げるアキに、峰は心配そうに歩み寄りそうになるが、ソレをヤイナは手で制して言う。

「知るか、馬鹿が」

ヤイナの言葉は、峰とアキに衝撃を与えた。

「お前が勝手に戦って勝手に仲間がさらわれた。それに俺が関与する理由があンのか？ 仕事の中でさらわれたなら手を出してやらないでもないけどな、今のお前は休暇中で、プライベートなんだ。それぐらい自分で解決しろってんだ」

馬鹿か、とヤイナは吐き捨てると少女を連れてアキを素通りする。

そしてアキの横を通り過ぎて二・三歩歩いたところで、ポケットからゴソゴソと何かを取り出してアキに投げて寄越す。

「・・・これは？」

投げられたのはドックタグのようなものだ。

銀の楕円形のプレートに斜めの字体でアキと書かれている。

「それは俺からの餞別だともおもつときゃいい。そオだな。一つ機能があるんだ。そのドックタグをつけている人間はドックタグ同士で、居場所の検索が出来る。お前に渡すのが一番遅れちまったがまあ、許せ」

ヤイナはそれだけ言うと、きびすを返して歩いていってしまった。
路地の影に消えていったヤイナを見送ると、アキは試しにドックタグをタン、とタップすと、ゆっくりとではあるが、ドックタグ上空10cmほどのところに下町そっくりそのままの模型が表示され、次いで赤い点が五つつ表示された。

どれが誰だろう、と疑問に思っていると、次第に名前が表示される。「いた」

三人の居場所は下に3 mほど下ってから北東の方向へ1 kmほど。

「本気で走れば。4分もかからないな」

アキはそう言くと、ドックタグをもう一度タン、とタップして表示を消してヤイナに礼を言った。

「・・・ありがとうございます」

「なんだかんだ言って、助けるんだね」

呆れたような顔で峰はヤイナに言う。

「助けた訳じゃねえよ。業務上必要なモンが今日出来上がったってだけだ。ただそれだけだ」

「まあ、なんでもいいさ」

峰はそう言って話を終わらせたが、心の中ではもう踊りだしたいぐらいの気持ちでいた。

（全く、ヤイナがここまで人に入れ込むなんてね・・・珍しいことこの上ないね。未来が楽しみでしようがないわね）

フツツと笑っているとヤイナに気持ち悪い等と野次を飛ばされるが、それを軽く流せるほどに余裕があった。

そんなふうに思いながら歩いていると、ふと大きな倉庫の前でヤイナは立ち止まる。

そしてゆっくりと振り向いて峰と目を合わせると、言う。

「お前、ちょっと買い物行っててくれないか。どうも見つかりそうにないんだ。こいつの父親」

ポン、と少女の頭を撫でる動作は優しい。

しかし

振り向いたヤイナの目は、とんでもなく鋭く、冷たい。

今まで浮かれていたのが馬鹿らしい、心の底からそう思えるほどに。

「————分かった」

思わず委員長モードに入ってしまったということは、ヤイナを一瞬でも敵だと認識してしまった、ということに相違ないのだろう。しかし言い訳することが出来る雰囲気でもないことを感じ取り、峰は少女の手を引いて近くの雑貨屋へと歩いていく。何か不吉なものを胸に抱きながら。

再会

カン————

カン————

金属で出来た床を踏んで、音が鳴る。

その音は反響して戻ってきて、まるで音の海に落とされたような、そんな錯覚に陥る。

ゆっくりと、しかし異様な威圧感を持ってよってくる音は紛れもなく、敵意を孕んでいた。

「君が、ヤイナ・フレイニア・・・かね？」

影の中にいるであろうその”敵”に向かって、騎士鎧に身を包んだ初老の男性は言う。

しかし、返答は無い。

「返答はなし・・・か。まあいい。私は皇紀連騎士第三部隊長・・・ジェラルドだ」

ガシャ、と盾と剣を打ち鳴らすようにして前にかざして挨拶をする
と、剣と盾を下げて敵が影の中から現れるのを待つ。

「ハン、皇紀連・・・まだそんなもの名乗ってたのか」

影の中から聞こえたその声は、40年ぶりに聞く声だった。

しかしそれはおかしいだろう。

40年経っているのに何故、同じ声のままで——

ジェラルドの心の中の疑問は、影から出てきたヤイナの姿によって
払拭される。

「やあ、久しぶり・・・いや、この名前の俺とははじめまして・・・か？」

影から出てきたヤイナの姿は40年前と全く同じ若さを保っていた。

「何故・・・」

何故そんな姿で、と言う疑問は、ヤイナが答えるまでも無くジェラルドの脳裏に浮かんだ。

「禁忌に手を出したか・・・ッ！ファリス・・・ッ！」

ジェラルドの声を聞いて、ファリスと呼ばれたヤイナは懐かしそうに言う。

「その名前で呼ばれたのも、40年振りだね・・・元気してたか、ジェラルド」

「私の質問に答えろ・・・っ！ファリス、貴様は本当に禁忌に手を染めてしまったのか！」

「手を染めた・・・まあ手段としてそれを選んだことには変わりはないぜ。お前も知ってるだろ？ 茜の事」

懐かしそうにそう言うファリス（ヤイナ）は、目を細めて続ける。

「アイツが死んだことも、知ってるだろう？」

ヤイナの言葉に、ジェラルドは静かにうなづく。

「おそらくお前の聞いた情報だと、俺もそのとき死んだ事になってるはずだ」

「――ああ」

「カエリスの生き残りは、居ないと聞いた・・・そうだろう？」

世界の四大戦線と呼ばれるうちの一つ。カエリス戦線と呼ばれるそれは、40年前に全世界の有力者達が一場に集結して争い・・・殺し合いをしたという話は、今も本や映像として受け継がれている。

しかしそれら全ては妄想の結果に過ぎない。

なぜならそう、ヤイナの言うとおりに

「生き残りは居なかった。そう聞いたが・・・そうではなかった・・・喜びたいところだが、喜べないな」

「喜ばなくて良いぜ、アレのせいで茜が死んだんだ」

「そう・・・だったのか」

ヤイナの話聞いてジェラルドは一度うなづく、そして疑問を呈する。

「しかし何故・・・貴様が禁忌に手を染める」

「それに関しては・・・皮肉な話さ。息の根が止まった奴を生き返らせる。そのためなら命だって差し出してやる。そうやってた。それなのになぜか俺が不死になりやがった。意味がわからねえとは思ったさ。ただまあ―――考えて見れば俺が死んで得するのはあの時裏切り者を雇ってたクソ狸共だ。そう考えると死ぬ気にはなれねえ、ってな。まだそいつらを殺すことも出来ちゃあいねえ」

ヤイナの話は一見正常に割り切ったと言う風に聞こえるが

「狂っているな」

「分かっている、俺だってわかってるさ。死人を生き返らせるなんて出来るわけがない。でもな、そうでもしないとやっていけないんだよ」

「かつて英雄と呼ばれた男が、弱気になったものだな」

ジェラルドがそう言うのと、今まで悲哀漂う雰囲気放っていたヤイナは一転、笑って言う。

「バツカ、今だって俺は英雄って呼ばれてるぜ。体感するか？久しぶりに本気でやるか？ジェラルド爺さんよ」

「フン、お前も同年齢だろうが」

「残念ながら傍から見たらアンタは爺さんで俺は青年さ。覆ることが無い事実だぜ。」

「その憎まれ口は相変わらずのようだな・・・っ！」

「はん、アンタのその堅物様も相変わらずだな！」

「もうややこしい話はナシだ。傭兵時代に戻ってやろうじゃねえか」
ヤイナがそう言うのと、ジェラルドは笑って言う。

「フン、話より力」

「くだらねえ会話より、殴り合い」

「負けた方が悪、勝てば正義」

「そうだよそれが俺たちだろ？戦友」

「そうだったな、40年振りだったからか忘れてたぞ、親友」

「40年越しの喧嘩・・・腕、鈍ってねえだろうな？」

「お主もぬるま湯につかり過ぎて腕が固まったんじゃないかな？」

「ナメんな。傭兵時代よか強いぜ」

「騎士団の過去を飛ばして傭兵時代の人間と戦うとは思いませんかつたな」

「俺もだぜ、まさかアンタにあんな可愛いお嬢さんがいるとはな」

「ほお、見たのか、私の娘を」

「ああ。一目でお前の娘だって分かったぜ」

「良い娘だろう？お前にはやらんぞ」

「残念ながら50歳差の年の差結婚はいただけねえな。狙っちゃ居ねえよ」

「それは良かった。まあここいらで一太刀・・・」

「やろうか」

いつものように、40年振りのやり取りをして、二人は不敵に笑う。40年振りにあった親友だというのに大人しく話すことも出来ない、そんな不器用な男達の、ささやかな遊びのような、戦いが、今始まる。

「ここ・・・か」

息を整えて見上げると、そこには大きな倉庫が一つ設置されていた。手に持ったタブから浮き出る地図には、三つの赤い点・・・つまりココとルイと木下がここにいることを示していた。

「待ってるよ・・・今・・・助けに」

行ってやるからな。

心の中で決意すると、緊張の汗が吹き出る手のひらを何度も握りなおし、緊張をほぐそうとする。

今に始まったことではないのにこんなに緊張するのは・・・

やっぱり、これがゲーム、喧嘩じゃあないということを俺自身が分かっているってことなの・・・かねえ。

まあでも、この状況、助けないといけない状況っていうのに変わりは無いんだし・・・行こうか。

二度目の決意をすると、ゆっくりと倉庫へと踏み出した。

振り下ろされた剣を持つ右手をひじで勢いを殺しながら受け止めてそのまま握り締め、そして引いてジェラルドの体を引き寄せて返すようにして掴んでいたこぶしを離し、すぐさま握ってジェラルドの顎を打つ。

一瞬ジェラルドの焦点がずれるのを視界で確認するが、すぐさまジェラルドは反撃に移る。

すれ違いざまに鎧で包まれた右足を折り曲げ、膝でヤイナの腹部を攻撃すが、それはヤイナの右手に阻まれた。

膝蹴りを受け止められたことで空中で一瞬動きが止まったジェラルドの隙を逃すほど、ヤイナは戦闘に不慣れなわけでは、無い。

空中で静止したジェラルドの脇腹を左手の拳で思い切り殴り上げ、ジェラルドの体を無理やり上に動かす。

肺の空気を吐き出しながら上方移動するジェラルドを追撃するように、右こぶしで正面から腹部を攻撃。

くの字に曲がったジェラルドが突き出すようにして差し出した顔を蹴り上げる。

見事なまでの三連撃。

いや、顎への攻撃を加えれば四連撃だ。

吹き飛んだジェラルドは金属と金属をぶつけて激しい音を立てながら地面へと倒れ込む。

「ゲフツ・・・腕は・・・鈍っていないようだな・・・」
起き上がることも出来ないのか、寝たままにジェラルドは言う。

「おう、あつたりまえだ」

ヤイナの言葉を聞いて、苦笑いを浮かべてゆっくりと上半身を起こしたジェラルドは、ヤイナに剣を差し出した。

騎士が剣を差し出す。

この行為は二つ意味する。

一つは。

「私はもう、引退する。貴様がこの剣を・・・使え」

引退宣言。

しかしそれは王からの除名宣言でのみ、安全に引退できると言う意味であって、勝負にまけて引退、と言う場合は・・・騎士から退き、隠居する・・・と言うわけではない。

「この剣で、殺してくれ」

最後は潔く。という事なのだろう。

「最後は、親友の手で、終わりたいんだ」

そう懇願する騎士の思うところは、分からないでもない。

もと皇紀連の人間だと言うことは、その時点ですでに不穏分子だと言う事だ。

忠誠心の厚い彼らがいつ連合からイギリスを奪還しようとして暴れるか知れたことじゃない。

実際、皇紀連の連中共は何度も反乱を起こしているようだ。

しかしこの男は根っからの皇紀連、いわゆる騎士ではない。

元はただの傭兵。

しかし、皇紀連であつたがために追つ手がいつまでもついてくる、という有様だ。

「娘に迷惑がかからないように、か？」

ヤイナがそう言うのと、ジェラルドはうなずく。

「・・・そうだ。すでに追つ手はすぐそこまで来ている・・・もう、逃げ切れる自信はない。あの娘は関係ないんだ・・・そして私も仮にも騎士だったことがあるみだ。どうせなら、親友の手で葬つてほしい。それぐらいの、気位は・・・」

そう言って差し出してくる剣を、ヤイナは受け取った。
受け取ってくれた。その事実にはジェルドは喜んだ。

が、殺すために受け取ったわけじゃねえよ、とヤイナは言う。

「気位？馬鹿言ってるじゃねえよ。残された側の辛さは知ってるんだろ？お前。いつも愚痴ってたじゃねえか。おつかさんとおつとさんがいねえから色々辛いってよ」

ヤイナは苛ついたように、しかし励ますように言った。

「騎士？馬鹿言うな、お前は一人に尽くすような気位高い気持ち悪い奴じゃねえだろ。お前は、傭兵だったはずだ。誰に尽くすも報酬しだいの泥臭い、泥の中で生きる奴だったろうが」
それなら、とヤイナは言って、続ける。

「俺が今お前を雇ってやるよ。報酬・・・？無粋なこと聞くなよ。
報酬はお前の命と・・・」

ヤイナがそのまま続けようとしたところで、建物のドアが開け放たれ、金髪の少女がジェルドに駆け寄って抱きつく。
そして満面の笑みを浮かべながら言った。

「今日ね、すごく楽しかったの！」

パア、と陰鬱なその建物がいきなり明るくなったかのような錯覚を覚えるほどのその笑顔を見て、ジェルドはヤイナ・・・いや、フアリスの言おうとしていた事を悟る。

「ああ、そうかそうか。じゃあ一緒に遊んでくれた人たちにお礼を言わないとね」

ジェルドはそう言うと、鎧を脱ぎ捨て立ち上がり、頭を下げた。

「・・・ありがとう。助かったよ」

その一言を聞いて、ヤイナは満足げにうなずいた。

「・・・ああ。」

彼の礼は、もちろん遊んでくれた、と言う意味も含んでいるだろうけれど、もう一つの意味は、親友に対する、旧友に対する叱咤激励の礼だった。

礼に対してうなずいて返事をする、と、ヤイナはつかつかと近寄って、

剣をジェラルドに渡して言う。

「お前はもう一生雇われたんだ。娘を護衛するなんていうちんけな依頼じゃあねえぞ。娘を、幸せにしろよ」

そう言っつて、ヤイナはジェラルドに剣を渡す。

「ああ、もちろんだ」

決意をこめた目で、ジェラルドはうなづく。

「まあ、依頼主が依頼を達成するために色々用意するのは傭兵界じや当然の話だ。ここで住むんだろ？何かと世話、するぜ。何かあれば何でも屋を尋ねな。この世界での、傭兵の名前さ。」

ヤイナはそれだけ言っつて、入り口に佇んでいる峰を引き連れてその場を離れた。

しばらく二人とも無言で歩いていると、息急いで走ってきた娘を背負ったジェラルドがヤイナに言う。

「お前の・・・連れ、今危ないんだ！すぐ助けに・・・」

そういいかけたジェラルドに、ヤイナは不敵に笑っつて答える。

「馬鹿言え、この程度の試練は・・・薄い壁だ。連中なら・・・軽く壊せるさ。きつとな」

終結？

倉庫の薄い壁に耳をくっつけて中の様子を伺うと、なにやら口げんかをしているような怒号が飛び交っている。

片方は聞き覚えのある声と言うことはつまり口喧嘩しているうちの片方はココだろうな……

あのやんちゃお嬢さん全く……

呆れ顔で腰から短剣を引き抜くと、傍の高く建っている建物の壁についているパイプを掴んでバランスを保ちながら駆け上がる。

「あった」

倉庫の上方部分に設置された大きな排気口を見つけると、手に持った短剣を限界まで長くもってそこをやさしく叩く。

すると反応は上々。

それどころか音すらしない。

「何製なんだろ……これ」

そんなことを考えながら排気口へ飛び移る。

くさっ！

倉庫の汚れを含んだ排気がずっと当たっているために臭いというのはすぐに考えついたが、しかしこれは流石に臭すぎる。

鼻が曲がりそうだ……などと考えられるあたり、緊張感が皆無である。

とにもかくも天井の中心へ続く排気口から倉庫の中をのぞくような形になった。

中を確認してみれば敵の人数は六人。

うちの三人は壁際に手を拘束されているだけのようだ。

右側にいるココ以外は意識を失っているのか、目を閉じてぐったりとしている。

まあ、その右側にいるココがこれでもかと言わんばかりにケンケンと騒いでる訳だけど。

その様子を見てげんなりと誘拐犯達は、本当にあいつ来るのかよ・
・なんて話している。

手際が悪いと言うかなんと言うか・・・・

色々なことに呆れていたが、犯人たちの手に持っている凶器をみて
一瞬で背筋が凍る。

馬鹿・・・・これは遊びじゃないんだ・・・・命をかけた・・・・戦い
なんだ！

気を引き締めろ！と自分で自分をたたき上げると、短剣を握りなお
して排気口の金具を慎重に外す。

カコン、と小さい音を鳴らして外れた排気口のネットのような金具
が落ちないように手に持つと、ゆっくりと体を排気口から出してい
く。

幸いここは電球の光が届ききつてはいないため、はっきりとは見え
ていない。

体を出して足だけで体を支えるような形になると、上半身を前後に
揺らして反動をつけて、手に持った網状の金具を誘拐犯の一人へ投
げつける。

とてつもない勢いを持って誘拐犯の頭へぶつかると、誘拐犯はその
まま意識を途絶えさせる。

幸い・・・・というか、なんというか。

ココが騒いでくれていたために、男が倒れた音は聞かれなかったよ
うだ。

しかも金具は男の上に着地。

「出来れば騒いでほしかったけど・・・・まあ仕方ないか・・・・」

はあ、とため息を吐いて、右手だけでぶら下がる形に姿勢を整える
と、下半身を前後に揺らして反動をつける。

これであそこまでいけばいいけど・・・・

そう心の中で思っ、ココと延々言い合いをしている人質に一番近
い男を見据える。

十分だろう、と思えるぐらいにまで反動をつけると、パッと手を離

す。

高さ6 mほどの天井から、勢い良く男の上へ着地する。

肩の上に着地した瞬間に、ゴキン、という音がしたのでおそらく首が外れたか肩が折れたか。

ともかくもその男を盾にして人質の三人へ近寄りながら、手の拘束具を短剣で切る。

すると、パパパ、と乾いた音を響いた。

同時に、手に持っていた男に衝撃が加わる。

こいつら仲間を平気で・・・！

盾にしておきながら言うことではないと思うが。

男の脇から銃を持っている男へ短剣を投げつけると、男の懐に入っている手榴弾を取り出す。

授業で習ったのと全く同じ形だとはね・・・

いや驚いた、と内心で自分の記憶力に感謝しながら安全弁を引き抜き、男たちが集まっている中心へ投げ込んだ次の瞬間。

激しい閃光と衝撃が周囲一体を襲った。

その閃光を男の体で防いだアキは目の潰れた男たちの動きを封じるために手足の腱を切る。

全員切り終わった・・・

ふう、とため息を吐くと、手に持っていた短剣に付いた血をを地面に氣を失って倒れている男の衣服で拭い取り、腰のホルダーへ差し込む。

「終わった・・・」

そう呟いた瞬間に、ドツと疲れがアキを襲う。

突然来た疲労に足をふらつかせながら、氣絶したルイと木下を抱えるココへ歩み寄って立たせる。

「大丈夫？」

心配してそう声をかけると、ココは顔を真っ青にしていた。

人の死を始めて見た・・・からか。

おそらく俺も、もう少し経ってアドレナリンが無くなって来れば、

それこそ死にたくなるんだろうな。

その苦勞を思つて氣分を萎えさせながらも、三人を引きずつて倉庫の外へと運び出す。

運び終え、ふう、とため息を吐いてその場に腰を落とすと、ちょうど良いタイミングでヤイナがその場に現れた。

「助け終わったみてえだな」

小さな路地からひよつこりと現れたヤイナと峰は、四人へ近寄る。

「ずいぶん派手にやつたみてえだな」

アキに付着した返り血と、扉の隙間から見える中の慘状を見てヤイナは言った。

「二・三人死んでるな、ありゃ」

ヤイナがそう言うのと、氣を保っている峰とアキとココは思わず顔をしかめる。

「んじゃ、後始末だ。峰はココ達を連れて行け。アキは俺を手伝え」
ヤイナの指示を受けて、アキは反抗する。

「せ、せめて目を覚ますまでは・・・」

それは二人が目を覚ますまで、と言う意味なのだろうが、ヤイナはその言葉を否定する。

「馬鹿言え、今のお前・・・血まみれのお前を見たらまた氣絶しちまうかもしれねえだろオが」

アホかお前は、と言わんばかりの勢いで発せられたヤイナの言葉を聞いて、アキは悟る。

ヤイナの今の言葉は暗にこう言っている、とも取れる。

（人が死ぬ所を見たココの心を落ち着かせる時間をやれ）

つまり、今のアキは人殺し・・・殺人鬼としてココの目に映っているとも限らない訳だ。

そう考えると、アキは反論することをやめてヤイナに従った。

「・・・わかった」

「わかりゃあいんだ」

アキの言葉を聞いて、頭を掻きながら倉庫へと入っていくヤイナを

追うようにアキは歩いていく。

そして中に入ると、しっかりと倉庫の扉を閉めて、ヤイナは崩れ落ちる男達の近くにある箱へ腰掛けて、アキに言う。

「これは、お前がやった。違ういな」

確認するまでもないことを聞くな、とアキは思いながらうなずく。

「自覚はあり・・・か」

手遅れ・・・いや、まだ手遅れでは・・・ないな。

思考して、会話が止まる。

およそ10分後。

「理由」

しばらく口を開かなかったヤイナが、唐突に言ったその言葉の意味を図りかねていると、ヤイナは続けた。

「お前たちがここに来た理由は・・・言えるか？」

ゆっくりと言うヤイナの口調に吸い込まれるようにして、アキは思わず口を開く。

「ルイと・・・ココを、守るため」

「守るため・・・か」

確認するように言うヤイナの言葉をうなずきで肯定する。

「そうか。なら・・・そうだな。ボーナスを・・・出してやる」

ヤイナは一々言葉の意味が分かりにくいな、とアキは能天気にも思っていた。

「お前は今日限りで、クビだ」

突然言われた解雇宣告に、アキはうろたえる暇もなく口にした。

「・・・え・・・？」

「私は・・・私たちは・・・争いをしないために・・・ここに来たんです・・・」

自宅のリビングで、峰の隣に腰掛けたココは虚ろな目をしていった。

「それなのに・・・それなのに・・・争いばかり・・・これじゃあ本末転倒も良いところですよ・・・」

力なくそう呟く彼女は、やはり限界・・・なんだ。

「本末転倒・・・私は最初に言っただろう」

限界と分かりつつも、峰は続ける。

「戦争というご時勢だ。この世界に安全な場所は、無いと」

「そんなのわかって・・・いました。そんな幻想に縋り付きたいと、思っていたのは事実です。けれどもそれはやっぱり幻想で、幻想でしかなかったんです・・・よね。」

「まあ、幻想は誰しも抱くものさ」

その口調は、突き放すような口調だった。

「けれどもね、私はそれを悪とは言わない。幻想を追うのを、悪いとは思わない。」

確かに、人は時にとんでもない夢を見る。

それは人を生き返らせたい・・・だとか、無機物の何かになりたい・・・とか。

それは確かに叶えるためには途方もない労力が必要なもの。

けれども、私は思うんだよ。

人が夢見る事に、叶えられない事はない・・・とね。

君が争いを好まないなら、温室であるシアトルがある。

それとも君が守られるだけの自分がいやで、その言い訳として争いが嫌いだ、といっているのなら、君達にもってこいのものがあるだろう？」

峰の言葉の最後に引っかかりを覚えて、思わず顔を上げて峰の顔をまじまじと見つめる。

「この世界には、人間が操れる便利なものがあるだろう・・・？しかも幸い、ここにはその専門家・・・この世界で一番詳しい人間がいるんだ」

峰の言葉の裏に隠された内容をココは悟った。

争いを好まないならソレ相応の道具が、ここにはある。

そして、守られるだけがいやなら、それ相応の道具が、ここにある。そしてその道具は、シアトルであり、アルマであり・・・大野。

「どちらの選択をするも君しだいだ。

いや、語弊があったかな。

三択どれを選ぶも君しだいだ。逃げるか、戦うか、それとも・・・両方か、だ」

峰はそれだけ言うと、寝室へ目配せして隠れて話を聞いていたルイと木下を呼び出す。

「まあ、三人で話し合うもよし、個人個人で決めるもよし、それも、自由だ。ここはフランクでね。生きるも死ぬも、墮落するも向上するも、走るのも止まるのも、君しだいだ。甘えるなよ、ここは他人が答えを用意してくれるほど、甘い社会じゃないぞ、思春期の悩み多き少女達」

峰はそれだけ言うと、手に持っていたマグカップをテーブルにおいて、その場を後にした。

カランカラン・・・

と玄関に付けられている鐘を小さく鳴らして外へ出ると、そこには大野が神妙そうな渋い顔をして立っていた。

「お前が説教する側になるとはねえ。娘が一つ成長した気分だぜ」
そう言って笑う大野は、わりと腹が立つ顔をしているが、けれども今ここで怒鳴り散らしても残念な雰囲気になるだけだろうしなあ・・・

峰はそう思って、大野に一つ提案をした。

どこかへ食べに行くかい？お父様。

おお、いいねえ娘よ。もう一人のお父様も誘うか？
良いわね。後始末が終わってたら、誘いましょう。

「嫌です」

「……理由は？」

「今は……まあヤイナさんの説明不足だと、言います」
峰がココに話をしているのと同時刻。

ヤイナは死体を片付け、倉庫の中の箱に腰掛けてアキの話を聞いていた。

嫌……か。

まったくこいつは……誰かさんに似ていやがるな……
ふう、とため息を吐いてヤイナは口を開く。

「お前は今、人を殺すのに躊躇いがなくなる一線を越えようとしている。」

それは陰と陽の境目でもあると……言っておこうか」

鼻にかかった口調から一転したヤイナは続ける。

「お前の今感じている恐怖心のなさは、アドレナリン云々って問題じゃねえ。それは人を殺すのに慣れ始めた証拠……ただそれだけって事だ。お前はいい意味でも、悪い意味でも覚悟が強すぎる。だからこそ目的に進むための環境の変化なら順応が早くなる。けれどもそれはつまり、殺人集団の中に入ればお前はためらいもなく、殺人集団一員となって殺人者となる。そう言う事だぞ」

睨みながらそう言うヤイナの視線から逃げまいと必死に見返して言う。

「俺は……それでも、やらないといけないことがあるなら、そうなるまでです」

「お前の正義は……そう言うことか」

「ええ。俺の正義は、俺の行動、そして結果。それが全てです」

「若いな」

「まだ、17ですから」

アキの生意気な口調に呆れながら、箱から立ち上がると、ポケットの中の携帯が震えた。

件名なし。

本文

飯食おうぜ

・・・

やる気がなくなったな。

まああいつがそうしたいって言うならそれに任せるまでだ。

「そうか。じゃあ好きにするといい。お前はお前だ。せいぜい俺の敵にならないように・・・な。そうなたら俺は容赦なくお前を殺すぜ」

ビツとアキを指差してそう言ったヤイナはそのまま倉庫から外へと歩み出る。

・・・

いやはや全く。

似すぎ・・・ってもんじゃねえぞ。

まさか親子とかじゃねえだろうな。

まあ年齢から考えても孫・・・ひ孫ってレベルだア関係ないとは思うけどよオ・・・

ため息を吐いて空を見上げると、うつすらと光る月が珍しく、建物の間から顔をのぞかせていた。

「この位置に月が来るってことは・・・そうか・・・そろそろか・・・」

こう思うのは二度目だな、と思ってため息を吐く。

俺も年を取ったかネエ・・・

おお嫌だ嫌だ。

もうそろそろ・・・11月か。

嫌な、季節だ

新生組織

「二ヶ国がたった一人に制圧される・・・これは、ひどく情けないことだとは思わないか？」

円卓に座る四人のうちの一人が、頬杖をつきながら言う。

「酷い・・・の？」

無気力そうなその声は、何の感情も感じさせない。

「その一人がワールドランク零・・・番外の化け物だし、仕方ないんじゃない？」

細身のシルエットの女の声はどこまでも平凡そうな印象を受け、

「フン・・・奴が相手です分に戦える人間なぞこの世界に五人とおるまい・・・」

いかついその男の声色は、どこかで聞いたことがある。

「いやいや、君達。ちよつとやる気なさ過ぎるんじゃない？飽くまでも僕たちは犯罪集団の幹部なんだよ？もっと血の気の多い連中を見習おうよ」

頬杖を付いている人間が言うような言葉ではない、というのはまあ言わずとも知れたことだろう。

「私は・・・別に・・・犯罪集団とか・・・どうでも・・・」

「上に同じ」

「私としてはお主に賛成したいところなのだがね。如何ともしがたいな」

「いやいやいや・・・まあ、いいよ。計画に支障さえなければね。

ケイツェル。何か収穫はあっただろうね？」

頬杖をつき、呆れながらそう言う男に反応して、ケイツェルは口を開く。

「予想通り、というところだろうな。先日向かわせた男は何者かにやられてしまっはいたが、収穫はあった」

ケイツェルはそう言う円卓の中心をタップして立体を上から見下

ろす形に描かれた地図に六つの点を描いた。

「一つ。北にシアトル」

ケイツェルがそう言うのと、一番北に置かれた赤い点が呼応するように短く輝く。

「二つ。北東にある尖塔。名称不明。」

同じように、北東の赤い点が光る。

「三つ。北西にある尖塔。名称不明。」

点が光る。

「四つ。中心のヤイナ宅。」

以下説明文は同文章。

「五つ。南西の尖塔。名称不明。」

同文章

「六つ。南東の尖塔。名称不明。」

同文。

「何故か不満な感情がわいてくるが・・・まあ・・・以上だ」

ケイツェルがそう報告すると、頬杖を付いた男は退屈そうにあくびをして言う。

「で？それがどうかしたの？」

「うむ。話はここからだ。この六つの点を結ぶと五芒星・・・陰陽道でよく使うものだといえば、分かるか？」

「うん、分かるよ。」

「それが構成される。」

ケイツェルがそう言うのと、地図上に赤い点を結ぶ赤い線が走る。

「それで？」

「端的に言えば、これは魔法だ。奴の魔法は独特すぎて構成も何も分かったのではないから推測しかできないが、ウィザードを脱退した理由に、奴の個体としての戦力減退が挙がっていた。そして今は組織の頂点たる男だ。それが何を意味するか。言わずともわかるだろう」

ケイツェルの誘導的な喋りに全員が一つの単語を思い浮かべる。

「自分の戦力の増長……そういうことかい？」と、頬杖を付いた男が言う。

おそらくは、とケイツェルが答えると、男は言う。

「じゃあ……君は古い知り合いのことを、倒せるね？」

男の問いに、ケイツェルはしばしの沈黙の後に答える。

「……ああ」

「じゃあ、よろしく頼むよ。僕たちは違うところで用事があるから手伝えないけど……なんとかなるよね。」

そう言って男は立ち上がる。

「用事とは？」

ケイツェルが何となく聞くと、男は嗤って答える。

「もちろん、萎縮した連合国と、日の国の火付け役をやるのさ。連合国には依頼失敗の訃報を知らせないといけないしね」

そう言って部屋から三人が出て行き、残されたケイツェルは一人思う。

「念願……とは言いがたい状況ではあるが、奴との戦闘は、ふがいなくも思うが、楽しみではあるな」

彼奴の力……見極めきれるか

「んで？何のようだったんだ？」

飲み会の翌日、ヤイナは大野が昨日ここに来ていたことを思い出し、ソファでくつろぐ大野に聞いた。

「ん？ああ……っと。居ないな。この間の依頼、成功したんだろ？」

この間の依頼……？

「地下、行ったんだろ？」

地下、という単語を聞いて、ヤイナは頭の中に一つの依頼を思い浮かべる。

アキ達が暴漢達を取り押さえているのと同進行で行っていた依頼。
「それがどうしたんだ？」

「チルドレンがまた呼んでるって言いに来たんだよ」

またか・・・

はぁ、とため息を吐いてヤイナは立ち上がる。

「あー・・・お前等、行くか？」

面倒くさそうに、部屋の隅で固まって漫画を読み漁っている四人に
問うと、四人はうなずいた。

全く・・・

面倒な・・・

「チルドレンって、一体なんなんですか？」

ルイが歩きながら、そう聞いた。

「チルドレンってのは・・・峰とかには言わない方が良くから言う
ンじゃねえぞ」

ぶすり、と釘を刺してから、ヤイナは続ける。

「いわゆる、ストリートチルドレン達の総称だ。」

カタン、カタンと、鉄製の階段をゆっくりと下っていきながらヤイ
ナは説明する。

彼らは・・・

チルドレンと呼ばれる彼らは、日当たりが存在するシアトルの子供
達とは違い、日陰者・・・
つまりどちらかといえば自分たちの方に所属する人間たち。

その存在は影として扱われ、無い者として扱われる。

実は自分たちの存在も、自分たちの何でも屋という存在も、そんな
に知れ渡っては居ない。日陰者の運命ということになるんだろう。
チルドレンは、シアトルに行けない子供達。

その理由は、じきに解る。
カタン。

真っ暗闇の、地下。

本当は地上一階なのだが、空を覆いつくす建物によって、ここに日の光というものは一切入り込めない。

「空は——青」

突然、どこからともなく台詞が脳裏に響く。

「此処は——黒」

右から、左から、不規則に、乱雑に音は反響してヤイナたちの耳に届く。

「白は——翼」

「僕達の背中には、翼が？ぎ取られた痕がある」

「それが意味するのは——僕達は天使？鳥？それとも——」

「カラス？」

「————悪魔？」

ぐわん、ぐわんと反響を繰り返し耳に届く、韻を踏むその唱は頭に響き、意識を持っていかれそうになる。

「あなたは、どおれ？」

ふいに、背後からはっきりとした声が聞こえ、はじけるようにして後ろを振り向くと、そこには小さな子供が一人立っていた。

「やあ、地上に縛られた子達。それと、空を生きる者。歓迎するよ」
キシシッと笑うその子供からは、とてもじゃないが容姿相応の雰囲気は発せられていない。

その雰囲気はまるで——魔女。

「歓迎するよ、じゃねエ。テメエが呼んだンだろ」

アホか、とその雰囲気をぶち壊しにするようにヤイナは言う。

「ウィッチ・ヘルディア。要はなんだ？」

ウィッチ。

科学から程遠いその単語に、思わず体が凍る。

以前ならば、厨二病に罹った可愛そうな人だ、と哀れんだ目で見ることが、後ろに魔法を使うウィザードが居ることを考えれば、その呼び名を簡単に否定することは出来ない。

「そう慌てるなよ。ここの子供達は気が急くのを好まない。君とは正反対とも言える人柄だね」

「俺も気が急くのは嫌いだぜ。ただ短気なだけだ」

「それを気が急くというのではないのかい？」

「何言ってやがる。コレとソレは別物だ。」

面倒だったらありやしない、と小さく呟きながら、ヤイナはヘルディアと呼ばれた彼女の紹介をする。

「ウィッチ・ヘルディア。名前の通り魔法を使う。いや、魔術か？」

「魔術だね」

傲慢げな顔でそう言う彼女の容姿は・・・多く見積もっても16才程度にしか見えない。つまりアキ達と同じような年齢のはず。

しかし、その容姿に反して彼女のまとう雰囲気は、異様だ。

「僕はね、君たちが来るのを識しっていた。」

だから——

彼女はそう言って続ける。

「君達に、いいものをあげようと思ってね。ファリアス・・・いや、今はヤイナ君だったな。彼の友達になってくれた御礼だ。受け取りなさい」

そう言ってアキには小さな杖のようなアクセサリを。

ルイには剣を。

ココには靴を。

木下には盾を。

「アキ君・・・だったね」

ヘルディアはそう言ってアキに向き直って言う。

「それは、時期を見て、ヤイナ君に渡しなさい。きっと役に立つ」
そして君達は――

「時期をみて、大野君に渡しなさい」

そう言うのと、トンツと小さく後ろに飛んで四人を見ながらにこやかに笑って言う。

「君達を地上に縛る鎖を解く鍵は今、あげた。それを使って鎖を解くも、使わずに砕くも、君達の自由だ」

空は――

自由であると同時に、落下の危険が伴うからね。
フツツと妖艶に笑って続ける。

「翼を生やすのは、君達の自由だ。さあ僕の用事も終わったことだし帰ろうか・・・いや、もう一つあったな。ヤイナ君」
ヘルディアはヤイナに視線を投げて言う。

「君の故郷が、君を呼んでいるよ？たまには故郷に羽休めに行ったらどうだい？」

「悪いが俺はもう故郷はここになったんだ。帰る故郷があるとすれば、ここだ」

「そうかいそうかい。それは残念だ。ならば伝言を一つだけうけたまうよ？元気な元気な妹に、会いたいとか、そんなことでも何でも良いんだよ？」

彼女の口から発せられる妹という単語に驚きながら、ヤイナの口から出る言葉を聞く。

「そオだな。あるとすれば――」

大野の生き方とチルドレン

「『犬の首輪の鎖はしっかりとつないでおけ』……この言葉の意味、聞いても良いですか?」

「駄目だ」

無下に断られてすこしへそを曲げるアキだったが、考えてみれば教えてもらう義理もない。

「とにかくも。そろそろだぞ」

その声に反応して顔を上げると、そこには暗い中にうつすらと商店街の影が写っている。

「ここまで下町が高く建った理由はな。人口が増えて縦に移動しないといけなかったわけじゃあねえんだ」

ヤイナの言葉を聞きながら、視界の隅でうごめく何かを見据える。

「こいつらから、善良といわれる市民を、避難させるためだ。」

やっと暗闇に目が慣れたのか、その先に居る何かがはっきりと視界に写る。

それは。

もはや人間の形をしていない。

「チルドレン……正式名称…ジョイントミス」

一人は、右腕が触手のように蠢いている。

一人は、下半身がどろどろの液体のようなものを垂れ流している。

一人は、上半身がないのに、歩いている。

一人は――

ショッキングな映像、というレベルではない。

「う……おえっ……」

後ろで吐瀉物を地面に吐いているのは誰だろう。

そんなことを気にする余裕も、ない。

今はこの目の前にある現実を処理するのに最大限自分の力を使わなければ――吞まれる。

「これは・・・一体、なんなんですか」

「これは、政治の道具になった連中。ジョイントミス。その名前はノーマルを無理やり昇華させてアルマ操縦者にするための実験の被害者。つまりアルマと繋げる《ジョイント》するのを失敗したことから来てる。」

ヤイナが淡々とその説明をしていると、一人の・・・右足が二本付いている少年が歩いてくる。

「こんにちは、ヤイナさん。久しぶりですね」

「ああ・・・久しぶり」

彼らは個体差があるが、一日を四日間分だと勘違い・・・いや、実際に体は一日に四日分の成長をしているらしい。とどのつまり。

彼らがチルドレンと呼ばれる理由はそこにある。

恐ろしいまでの短命。

人の四分の一しか生きられない彼らは最高でも20歳に届くかどうかだ。

そんな事情もあり、以前の依頼でここにきたわずか三日前のことも、十二日前のことだと思っているのだ。

「で？用はなんなんだ？」

「子供達が、ヤイナさんに会いたいと言うもので・・・よければ会ってくれませんか・・・あれ？後ろの方たちは・・・」
見知らぬ四人の姿をみて、少年はわずかに動揺する。

それは吐いているその姿に、か。それともしらない姿に、なのか。

「俺の助手だ。気分を害するかも知れないが選択を迫ったときに俺のところのいたって事は日陰者になると決めたって事だ・・・悪いが堪えてくれないか」

ヤイナの言葉に、少年は苦笑いをして答える。

「仕方ないですよ。僕達は奇形。それ以上でもないけれど、それ以下では、あるんですから。」

彼はそう言って続ける。

「けれども、もう数もだいぶ減ってきました。僕も・・・あと一年・・・いえ、二ヶ月持つかどうか・・・です。減るのはさびしいことだけれど・・・同時に良いことなんですよ。僕達みたいなあぶれ者は、速く消えてしまった方が・・・良い」

そして夕方。

「よお、遅かったな」

片手を挙げて、漫画から目を上げずに挨拶をする大野に返事したのはヤイナだけだった。

「なんだよお前しか帰ってこなかったのか・・・ああ、まあそんなるわな」

目を上げて、アキ達の真っ青な顔を見て大した感慨も無く漫画に目を戻す。

そして数分の沈黙。

耐えられずに思わず大野が声を上げた。

「まあ、お前たちが信じられないものを見たのは解る。信じきっていた国の非道さも、目の当たりにしただろ。でも、気にするな」大野がそう言うと、ルイが堰が切れたようにまくし立てる。

「気にするな、なんて無理に決まってるじゃないですか。あんな人間じゃないモノにされた人たちを見て何も思わないなんて無理に決まってるじゃないですか。あんな暗いところに押し込まれて。あんなひどいことされて。命をおもちゃのようにもてあそばれたあの人たちが！どんなに辛い思いをしているのか、あなたたちにはわからないんですか！」

ダン！とテーブルに拳を叩きつけてそう言うルイに、大した反応もなく、大野は答える。

「お前の杓子定規で、人の悲しみを語るなよ」

「お前があいつらを可哀想だと思った。で、だから、あいつらが可哀想。お前のそれはただの自己満足だ。その顔をしてきて、帰ってきた様子をみればお前等ヤイナが子供の相手をしてきた間中も似たような顔してたんだろ？この子達は可哀想。ひどい。なんて顔を、体をしてるんだと。」

その行為自体が。

「侮辱だ」

その思想自体が。

「軽蔑だ」

お前等がやっているのは差別を糾弾しているようで、差別よりもひどいことをしている。

「あいつらは確かに大変だとも思う。だけどな。俺たちがそれをどうだと語るとは出来ねえんだ。あいつらが望んであそこにいるんだ。自分たちがいつ我を忘れて暴走するかもわからない。いつ市民を思わず傷つけてしまうかもしれない。そう言ってな。」

「奴らは自分たちが大変だとは思ってねえよ。むしろ幸せだと俺たちに言っている。そこまで考えろとはいわねえ。ただな。」

お前の感じた悲しみを、お前の感じた憎しみを。

「人に押し付けるなよ」

大野がそういう終えると、何も言えなくなったようにルイが黙り込む。

そして、再びの沈黙。

「まあ、お前等があいつらのことを可哀想だと思うのは仕方ねえ。

大野が言ったことにも一理ある。だったら悲しみを押し付けるんじゃないくて。幸せを押し付けてやれ。それも自分の感じる幸せじゃなくて。相手の感じる幸せを、だ。あいつらはそれが出来るからこそ自ら地下に引きこもった。お前にそれが、出来るか？」

ヤイナが珍しく諭す。

「ま、出来るか出来ないか、なんてのは大した問題じゃねえ。日の光を浴びせてやりたいなら天井をぶち破れ。元に戻してあげたいと思うなら。直してやれ。」

ただ、それらほとんどが、余計なお節介だと思われる。慈善と偽善なんてのに違いなんてねえ。

やりたいならやれよ。その結果恨まれようが憎まれようが俺の知ったこっちゃねえがね。」

勝手にしろ、と言ってイスから立ち上がると、沈む四人に立ち上がって家に帰るよう促す。

パタン、と小さく音を立てながら部屋を出て行った四人を見送ると、大野が口を開く。

「あいつらが出来るそれ自体の原因である俺が言える事じゃねえんだけどな」

苦笑して大野は言う。

「お前が原因な訳ではないだろう。原因はそれを運用している。政府だ。盗まれた側にも責任があるとか言っているのが稀に・・・いや、良くいるけどな。それは間違いだろう。」

どんな場合も、どんな手段だとしても。盗む側が悪い。」

勘違いしてる奴が多い。

ヤイナはそう言って奥の部屋へと引っ込んでいった。

明日は始業式だ。お前も来いよ。

とそう言って。

もちろん大野の答えは「やだね」

大野の生き方とチルドレン（後書き）

大野恭介の矜持、臭いなんていわないでくださいね

襲来

「反体制組織、嗤う骸骨楽団のお披露目だ。諸君———派手に行こう」

「えー。本日はおひがらもよく」

のんびりとした調子で言う頭の眩しい男性のせりふに飽き飽きしながら、足まで伸びたローブのすそをばたばたとふるって埃を落とす。
(こんなんでは登場するんじゃないかな・・・)

と、委員戦のことを後悔していると、隣にいる峰にマイクが渡される。

どうやら委員の挨拶のようだ。

と、いうことはまあ当然のようにここまで回ってくるわけで。

トス、と軽くマイクが渡されたその瞬間。

爆風が吹き荒れた。

土煙が巻き上がり、中庭に居る生徒たちが咳き込む声で情報収集がしにくい。

が。

こんなことをやる人間といえど心当たりがあるのはただ一つの組織。嗤う骸骨楽団。

パチン、と右手を鳴らすと、土煙は一瞬でその場から消え去る。

そして顔を上げて空を見上げると、空にケイツェルが飛んでいるが視界に入る。

ケイツェルは何を思ったか右手に小さな光球を浮かべると、北東に放つ。

確かあそこには———

「不味い・・・全員伏せろ！」

反射的に叫んだヤイナの台詞に、ケイツェルは疑問を脳裏に浮かべる。

逃げる、というならまだしも、何故伏せる・・・なのだ。

その疑問は、休戦前の第三次世界大戦でしかヤイナを見ていないケイツェルだからこそ思える疑問だろう。

これが下町の長老や、大野だったのならば、血相を変えて逃げた、あるいは全力で自分の身を守っていたはずだ。

その理由が。

この下町に設置されている五点の大きな建物は。

ヤイナの力を制限するものに他ならない。

つまりそのうちの一角を破壊してヤイナの力が最大限に引き出せるようになった今。

その力は

およそ100倍。

膨れ上がったヤイナの力にゾワリ、と全身の毛穴が開く。

「これが・・・ウィザード団長の・・・本当の力・・・だったのか・・・」

ドン！と地面を蹴ったヤイナは音速を超えた速度をもって、ケイツェルに肉薄。

そして、腹部を強打。

「ぐ・・・ふっ・・・」

かつて仲間だったことなど微塵も思わせないほどの思い切りの良いパンチがケイツェルの腹部にめり込む。

くの字に曲がったために突き出た胸倉を右手でつかみ、ケイツェルがどこかへ飛ばないように固定して左拳でケイツェルの頭を二・三度強打する。

それで頭が吹き飛ばないのは、さすが・・・といったところだろうか。

完全に気を失ってがっくりとうなだれるケイツェルを右に放り投げ

ると、いつの間にかそこに居た骸骨楽団の男が受け止める。

「お前が・・・リーダーか？」

ゾン、とヤイナが男をにらみつけるだけで、周囲の空気が極端に重みを持って男に襲い掛かる。

「そ・・・そうだよ」

いつもは軽薄そうな楽団のリーダーたるこの男も、このときばかりは顔を引きつらせざるを得ない。

「次来たら、殺すからな」

「な、仲間だったんだろう・・・？容赦、ないね・・・」

たどたどしく言うその男に、ヤイナは答える。

「仲間？そいつはウィザードの中でもしたから数えた方が速いような奴だぞ？お前たちはまだこっち側に来てすら居ない。まだお前等は表の存在だ。お山の大将気取るのもいいけどな。程々にしないと、そのうち俺以外のやつに殺されるぞ？」

「・・・忠告、ありがたく受け取るよ」

そうして一瞬で片付いた事件は、集会を中止にさせたという意味では良かったのか。

ともかくも声で正体がばれてしまったヤイナは、自分が貧弱だという設定も無視し、トン、と地面を蹴って軽々しく委員室へと窓から入っていった。

その様子を見ておお、と驚きの声を漏らす生徒たちの横で、困ったように額を押さえるのが一人。

「で、どうするんだ？」

ところ変わって委員室。

そこには珍しい人間が二人いた。

「どうすんだ。と言われてもよお。壊されちゃったもんは仕方ねえだろ？」

「アレがなかったら・・・面倒ってレベルじゃねえぞ。オールドク
ラスの堅物どもに狙われるぞ。また。」

「前に戦ったときは・・・それはもう地獄絵図だったなあ」
ケツケツケ、と笑うヤイナと対照的に、大野は気分を沈ませる。

今四大戦線と呼ばれている内二つに、このヤイナはかかわっている。
今話をしているのはカエリス戦線のひとつ前の話。

リジェル平原というただぴろい平原での話だ。

それは今語り継がれているのは、正体不明の集団が、争った形跡を
残して死んでいた。

その数。

六万。

仲たがいか、というのが現在の世界の見解だが、一部の人間はとあ
る人間によって引き起こされた事件だと知っている。

「オールドクラスの兵士六万対お前一人。それで勝っちゃもうんだか
らやってられねえ・・・」

呆れてそういう大野。

「ま、あいつらあれで全員下っ端と、クローンだろ？あの程度だっ
たらお前も勝てるさ」

ヤイナはそう言って、委員室のイスに腰掛ける。

「次襲って来たら・・・そのときはそのときだ。どうせ連中は今の
人間全員殺してやろうとか思ってンだろ？」

ヤイナが確認するように大野に言くと、大野は嫌そうにうなづく。

『嫌な連中だ』と言って。

「じゃあ動く必要はねえだろ・・・う」

途中で間延びするので何かと思ってヤイナの視線の先をみると、微
妙にイラついた形相でその場に立つ峰が居た。

「授業は？」

タン、タン、とリズムカルに刻まれる足踏みは、嫌に威圧感をも
し出す。

ちよっと横を見て見れば、大野はすでにどこかへ退避済みだ。

畜生あの野郎見捨てやがったな。

「いや、俺もう授業とか三回ぐらい受けてるから必要ないし」

苦しい紛れに出た言い訳に納得したのか、峰はふう、とため息を吐いて隣のイスに座り込んだ。

「お前は授業ねエのかよ」

呆れてそう言うと、峰はうなずく。

「ないわよ」

「じゃああれか、ここで委員長やってンのは自宅警備員ってエことk『ドゴッ』イッテエな！やんのか！」

「人の悪口言っておいて何言ってるのよ！」

「うっせエなお前脳みそ全部その馬鹿でけえ胸の脂肪の塊に吸い込まれてンじゃねえのかすぐに手を出すとかマジありえね『ドゴゴッ！』おまつありえねエ！机を投げンのはありえねエぞ殺す気か！」
ハア、ハアと二人して肩で息をして委員室に立っていると、談笑しながら入ってきた四人が何事かと目を丸くしているのに気付く。

「オイ、この暴れるウマみてえに粗暴な女をどうにかして『ドン』ぐおっ」

まっすぐに突き出された蹴りがとてつもない勢いで腹部にめり込み、その場にうずくまって悶えているヤイナをみて、アキは思わず思った。

（キャラ崩壊ってレベルじゃ・・・）

「うっせえ黙ってろ」

「すいません」

ぴしやりとそういわれて頭の中の口をつぐむ。

「まあ・・・いつもとかわらねエ面子だな、こりゃ」

机とイスを元の位置に戻してため息を吐きながらヤイナがそう言うので、ルイがうなずく。

「そういえば、何でも屋をほうってますけど良いんですか？」

ルイの言葉に、ヤイナが面倒そうに答える。

「あー・・・まあ元々依頼が良く来るような場所でもねエし・・・

大丈夫だろ」

投げやりに答えるヤイナに呆れて、ルイはため息を吐く。

「まあ・・・それがあそこのクオリティですよね・・・」

臨時休業は当然。

それがあそこを知っている客の共通認識だった。

そんなことを思っていると、長机で峰が何か作業をしているのが目に入る。

なにしてるんだ？と、ヤイナが聞くと、峰は顔も上げずに答える。

いやなに、今年から面子が素晴らしいもので目安箱でも置こうかと思っただけ。

さすがは委員室に居るときは委員長モードなのか、固い口調でそう言う。

まあ、そんなことを言いながら作っているのがダンボール製のなんともしょぼいものなのだが。

そんなことを思っていると、完成した！と奇声を上げながら右手にダンボールの目安箱を掲げて峰が飛び跳ねる。

ああはいはい、と言った様子でヤイナが手に持ったそれを見ると・・・

まあ、なんだ。

いろんな意味でアウトなんだがまあ描写しなければ問題ないだろう。

例えるなら、あくまで例えるのならの話だが、あれだ。

妖怪ポストに酷似している。

何も松ぼっくりのような天板まで再現しなくても良いだろうに・・・呆れてそう言うのと、峰は意識していなかったのか、驚いてポストを見つめなおす。

やはりだめか。

だめ・・・まあ別に版權云々なんてここで言う奴は居ないんじゃない

ないか？

峰が不味いかなと疑問を口にしたが、何処からともなく再び現れていた大野がそう言うので、結局そのポストになった。

怪しいとかそう言う話にはならないあたりがどこかこの人間は抜けていると言うかわわっているんじゃないかと思うアキ達の心境は、察する必要もなく解るだろう。

自力の救出（前書き）

二つに分けるところを一つにしました。
そのために少々長くなってしまいました。

自力の救出

夕暮れ、峰は委員長の仕事で校長との会談。

ほかのアキやルイは全員が授業でおらず、委員室にはヤイナ一人がたたずんでいた。

・・・

初日は一日中居ろって言われてもよ・・・

はぁ、と面倒臭そうにため息を吐くと、遠慮がちに委員室のドアを叩く人物が居た。

（誰だ？）

授業中じゃねエのかよ。と思いながらも、一応は副委員長の仕事を全うするためにもその人物を部屋の中へと促す。

「入れよ」

無愛想極まりないそのセリフに一旦ノック音がやむ。

峰が居るとでも思っていたのだろうか、残念ながら人生そんなイージーモードには出来ていない。

目的の人物が居なくて引き返すかと思ったヤイナだったが、その人物は意外にも部屋へと入ってくる。

恐る恐るといった様子で入ってくるその人物は、パーマがかった金髪を携える整った顔をした美少女だ。

身長はおよそ145cm。

胸は、お世辞にもあるとはいえないが、それを気にさせないほどの魅力があるので問題が無いだろう。

スレンダー美人と言えば聞こえは良いだろう。

仕事柄たずねてきた人物の性格判断等をするようになったヤイナが一瞬で女性の分析を終える。

胸は関係ないだろ？

馬鹿言うんじゃないエ。胸や体のパーツってエのはその人間の育った環境を調べるにはうってつけなんだ。

誰に言ってるかなんて知らないがとにかくもヤイナがそんなことを心の中で思っていると、ヤイナの目の前に座った人物は口を開いた。

「私を……助けてください」

「誘拐事件……ですか？」

峰が校長室で聞いたのは、ここ最近多いと言う誘拐事件のことだった。

突然呼び出すのも頷ける……が。この校長が動いたとなればそれはつまり。

「この生徒が誘拐された……んですか？」

峰がそう言うと、校長が頷く。

「一人、昨日買い物に出かけている最中にさらわれてしまったようだ」

校長の言葉に、峰は思わず頭を抱えなくなる気持ちに駆られる。

シアトルの寮に生徒を押し込んでいる理由をもっと切迫して教えておくべきだったか。

あまり社会の毒に触れさせまいとしての決断がかえって仇になったんだろう。

ヤイナに言えば鼻で笑われてしまうな……

そんなことを思いながらも、自分の仕事をこなすために峰は口を開く。

「それで、何を買に行っていたんですか？」

「それが、もう一人の被害者が口を割らなくてな……残念ながら分からないんだ」

なんて情け無い連中だ……

あっけに取られてそう思う峰の背後で、静かにドアが開いて何者かが入って言った。

「ああ、峰さんも。ちょうど良い。学生をさらった犯人が分かりました。」

・・・それと、もう一つ、訃報でございます」

「ゴースト？」

少女の口から出てきた聞き覚えの無い単語に、ヤイナは首をかしげる。

まあ、聞き覚えが無いというよりも、心当たりがないといったほうが正しいだろうが。

「はい・・・下町に居る犯罪組織だとも思ってくれば・・・」
ぽつぽつと途切れ途切れに喋る彼女に若干のイラつきを覚えるが、ここはヤイナはある程度大人なのでこらえることが出来る・・・だろうと思っていたのだが。

「なんだよ相談しに来たのに喋ることも纏めてねえのかよお前本当に相談するつもりあるのかよ」

面倒くさい・・・とため息を吐きながらそう言って、ヤイナは一言付け加えた。

「はつきり言えよ。俺は峰とは違ってそっち側の人間だ。どうせさらわれたお前の知人、金で自分の体売ってたんだろ？」

ズバリとヤイナに言い当てられて、少女は驚きの視線をヤイナに向ける。

「ついでに言えば、お前は尾行してたんだろ？理由はしらねえがな」
ヤイナの言葉に、たじろぎながらも少女は頷く。

するとヤイナは、ンで？お前の俺にやってほしいことは、なんなんだ？と、問う。

「えっと・・・その知り合い・・・四季って言うんですけど・・・
彼女を・・・助けてほしいんです・・・」

彼女がやっとのことで、一大決心をしていたその願いは

「は？ンなの嫌に決まってンだろオが」

ヤイナの言葉に一蹴される。

まさかそんな言葉で断られるとは思っていなかったのか、少女は驚愕に目を丸くしてまじまじとヤイナの顔を見つめる。

「端金で自分の体売ってンだ。それぐらいのことあって当然だと思うべきだろオが。目の前につるされた餌に飛びついて自分から餓えたライオンの檻の中に飛び込んで行った人間の事なんぞ、知ったことっちゃねえよ」

阿呆か、といわんばかりに・・・実際言ったのかもしれないが・・・まあとにかくそんな勢いでその依頼を断ったヤイナはしばらくの沈黙の後、彼女の話は終わったと判断して、委員室から追い出した。

そして、その日の夜。

午後八時に、ことは起きた。

「志木さんは・・・いないのかい？」

女子寮の同部屋に住む女生徒に先ほど委員室を訪ねた志木という苗字の女性の人物の所在を尋ねたが、残念ながら帰ってきた返答は”いない”という一言だった。

親友がさらわれたから委員室を訪ねたかと思っただが、ずっといたヤイナに聞いて見ればこれまた返答はNOだった。
まさか。

想像したくないがたどり着いてしまったその答えに、背筋が凍る。

「二人目・・・？」

「助けに来たのかい？」

峰が志木の部屋を訪ねていたその時、志木は親友がさらわれた現場を訪ねていた。

するとそこで出会った・・・いや、会いに来たとでも言えるので出会ったなどといかにも偶然を装った単語を使うのはおかしいだろう。

「あたり、まえです」

目の前に舌なめずりをするように立つ太った男をみて心の底からどす黒い感情があふれ出す。

その感情に名前をつけるのならやはりそれは憎しみか、それとも激昂か。

良い子だね、やっぱりシアトルに住む子は良い子だね。

繰り返すように、歌うように男はそう口にする。

その歌を聞いて、かどうかは解らないが、男の背後にある建物から続々と人間が出てくる。

1、2、3・・・数え切れない。

こんな数の男に囲まれて、四季は正気を保てるのだろうか。

全員が全員手にナイフや、凶器を持っている。

連中、四季に手を出していたら許さない。

そんな意思をこめた目で男たちを睨むと、男たちはこわいねえ、だの元気だねえ、だのと茶化すように、まともに取り合う気も無くあしらいながら、ジリジリと志木との距離をつめていく。

そして、一人の男が志木を捕まえるために肩に手をかけようとしたその瞬間。

志木の右手がひらめき、男の体に電気が奔る。

「ぐ・・・あつ」

悶絶しながら倒れ込む男を見ながら何事かと思って志木を見ると、その右手にはしっかりと電気警棒が握られていた。

「わざわざつかまりに来るわけありません。私は私なりに、あなたたちを倒しに来たんですよ」

そう言って、決意のこもった目で志木は男たちを見据える。
旧友をひどい目にあわせて、無事ですむと思うなよ。
品行方正生成優秀才色兼備と言われている私も、怒ったら少しばかり、怖いぞ。

「ど、どおなってやる・・・」
ハア、ハアと肩で息をしながら、目の前に立つ少女を見据える。
志木と名乗った彼女は電撃を流す警棒一本で既に大男を八人のしている。

この狭い通路でいっせいに飛び掛るわけにも行かず、かといって一対一で戦いを挑めば防ぐことの出来ない電気警棒で一撃喰らってその場でノックアウト。

「考えやがったな・・・」

溢れる汗をそのままに笑って少女を見据えると、少女は笑う。

「策も無しにここへ来るわけないでしょう」

ニヤリと笑う少女に底知れないものを感じる。

しかしそれにしても、この下町にゴマンと居るはずの構成員が援軍に來ないのはどう言う事だ。

この路地で挟み撃ちにすれば一瞬だというのに・・・

まさか・・・それこそが。

策か・・・？

「どけ！殺されてえのか！」

野太い声を浴びせられる影の中に居るその男は嗤って言う。

「ここは通行止めだ。お引取り願おうか・・・？」

狭い路地へと入る前の小さめの広場で、ヤイナは言う。

「ここから先に覚悟の無い野郎はいらねえ。死ぬか、殺されるか。どっちがお好みだア？」

人差し指を突き出して魔方陣を構成しながら、愉しむようにそう言うヤイナに誰も適わないと援軍である男たちが悟るのに、さして時間はいらないだろう。

右拳を横殴りに振る男の攻撃をかがんでかわし、首筋に電気警棒を叩きつけて気絶させ、その男の体を盾にして後続の凶器もちの攻撃をいなす。

男のわきの下から電気警棒を突き出して後ろに居る男を二人気絶させる。

すると手元の警棒の柄についている電灯がチカチカと点灯する。

・・・不味い、バッテリーが切れる。

この電気警棒が無くなれば一瞬でつかまえることは必須。でも。

でも、引けない。

盾にしていた大男の腹部を蹴り後ろに居る男たちにのしかかる様に蹴り飛ばし、坂のように道を作る男の体を駆け上がりながら後ろで押しつぶされている男の手からナイフを？ぎ取る。

タンツと男の方で跳躍し、警棒で下に居る男たちを気絶させながら着地すると、ナイフと警棒で邪魔をする男たちを気絶させながら建物へと入るために詰め寄るが、再び男たちに囲まれてしまう。

一体何人居るんだ・・・

内心ため息を吐いて、後ろをみると、先ほどまで活路となっていた背後の通路に敵が回ってしまった。

あせりすぎた。

心の中で行動を後悔する暇も無く、男の一人が後ろから志木に飛び掛る。

振り向きざまに電気警棒を思い切りたたきつけると、ボキ、という嫌な音を立てて根元から真っ二つに折れた。

・・・まずい・・・っ！

折れたことを確認した志木は一瞬の判断で折れた電気警棒を建物の入り口へ投げつけると、およそ二秒後、電気警棒がすさまじい閃光を放ちながら爆発した。

その場に居た男たちを将棋倒しに吹き飛ばし道が出来るが、志木にも爆発のダメージが加わったために走ることはおろか歩くことすらも困難な状態になってしまった。

(三半規管がやられたわね・・・)

ぐらぐらとゆれる体をかろうじて支えて立っていたのも五秒程度で、すぐに腰が砕けたようにその場にへたり込んでしまう。

しかし、その腰が地面とぶつかることは無かった。

トス、とやさしく受け止められて、一瞬男たちに捕まったかと思っ
て身構えるが、見上げたそこにあった顔は先ほど自分を追い出した男だった。

「ヤイナ・・・さん・・・どうして・・・」

薄れいく意識の中、かろうじてそう質問するがその答えを聞く前に志木の意識は志木の腕の中から離れていく。

ゆっくりと瞳を閉じる志木をゆっくりと地面に横たえたと、ふう、とため息を吐いてはっきりと言う。

「なに、俺は自分で危険に飛び込む奴は、嫌いじゃねえってただけだ。餌に飛びついたわけでもねえ。友人のために命はる人間なんざアそんなに居るもんじゃあねえしな。それにどうやら友人が体を張ったのも理由がコイツに誕生日プレゼントをかうためだったってえのもまあ良い理由なんじゃねえか？女が労働力になろうってえのも頼む場所も間違えたがな」

ハン、と鼻を鳴らしてヤイナはその場に居る男たちに告げる。

「お前等、俺たちに近づくのはそこが限界だ。チンケな遊びでハシヤイでるお前等の現実って奴を教えてやるよ。それ以上近づいてみる。攻撃されたと意識する前に、首を撥ねてやるよ」

ウン、と両手の人差し指に小さな光円を纏わせて、ヤイナは告げる。

「・・・まあ、近づかなくても・・・死んでもらうぜ？」

なんてこたあねえ。

ただの、掃除だ。

殺し殺され、殺し合いは元来そういうもんだろう。

建物から戦闘の様子を見ていたゴーストの一人は、心の中で思う。
ところがこれは何だ。

合っていない。

ただの一方的な虐殺。

横たわった少女の横に立つその男は、まさに

「鬼神・・・」

思わず口にしてしまったが最後、建物前の広場の敵を全員掃除したヤイナの視線は窓に立つその男へと吸い寄せられる。

キシ、と口が歪む。

その光景を最後に、男の意識は途切れる。

これが、鬼の棲む町。

下町の一面。

「解決した？」

翌日校長室に呼び出された峰は素っ頓狂な声を出してしまう。

ゴーストという暗部組織が最近暗躍していると言う話を聞いて、また長い話になりそうだと思ったのだが、峰のその考えは斜め上の結果をもつてして終わりを告げる。

「どういう、ことですか？」

どうやって解決したのか、そう聞くと、開きづらそうな口を開いて放たれた言葉は峰に余計に衝撃を与える。

「ゴースト構成員全てが、死んだんだ」

あまりにも荒々しいその解決法を聞いて思わず呆れてしまう。

この世界ではあまりにも人が軽々しく死んでしまう。

もはやソレが当然だとも言おうように。

「それは・・・誰が・・・」

誰がやったのか。

峰がそう聞くと、聞きたくない答えが返ってくる。

「その場に居た全員は正体不明の凶器で殺されたようだよ。周辺にできた戦闘跡から、その凶器は恐らく今の技術では再現できないだろうと、そういう事らしい」

つまりそれはこの世の技術ではないと言うことだろう。

だとすればそれを実行したのはウィザード。

ヤイナである可能性が大きいだろう。

そう頭の中で考えると、峰は思わず額を押さえて呻いてしまう。

つい先日まで病弱だと思っていた男がまさかとも簡単に大量虐殺をしてしまう男だったとは・・・

そこまで思っ、ふと考える。

無法者の集まりとも言って良いこの下町で、こんなことが今まで一回も起きていなかった訳が無い。

ということとはつまり。

「私が知らなかっただけ、ということか・・・」

救護されたのに

もぎれた翼は、もう元には戻らないんだよ？

暗闇で囁くその声は、ズクリと心に突き刺さる。

「それでも元に戻すのが・・・僕さ」

そう僕。

巻き戻し屋さ。

耳にまとわりついて心に突き刺さる言葉を振り払うように口にして安堵する。

そう。

僕は、自分の翼をもう一度――この手に。

「ヤイナの本気？」

大野の工房で前ぶりも無く振られた質問にたじろぐが、すぐに氣勢を取り戻して大野は答える。

「そりゃ、見たことあるさ。俺たちが何年の付き合いだと思ってるんだ？」

何を言ってるんだお前は、とでも言いたげなその口調はまあ当然だろう。

しばらくして、峰がその質問をした真意に推測を立てたのか、大野が口を開く。

「大方、ヤイナが人を大量に殺したとか思ってるんだろ？」

カン、と手に持っていた鉄を火の中に入れると、大野は峰の顔を見

て続ける。

「昨日血の海が一つ出来たぐらい知ってるさ。俺だってここに長年居るんだ。それなりの情報網はある」
でもな

「そいつらは全員死んじゃいねえよ」
平然と、当然のようにそう口にする。

「いや、でも学校の話では全員が手口不明で死んでいたと・・・」
そういいかけて思う。

その場の壁や地面に手口不明の傷跡があっただけで、死んだとは言っていない。

「あいつは基本的に人を殺すのをなんとも思わないけどな、ここは下町だし、まあ色々あってそう簡単に人はころさねえよ」

そう言っ、椅子から立ち上がって冷蔵庫の中にあるジュースを手に取り口に含む。

しかし・・・なんでまた餓鬼が遊びで作ったような組織を潰したりなんかしたんだ？

久しぶりにヤイナの行動が読めずに内心首をかしげていると、峰が口を開いた。

「そうか、ありがとう」

憑き物が落ちたようなその表情は、案じていたことが事実ではなかったと解ってのものだろう。

・・・

なんだあいつヤイナのことが好きなのか・・・

はあ、とため息を吐いて、罪作りの相方を思う。

アイツのことが好きだとかなんだとかっていう関係になったのはこれで五人目か・・・？

「なんて野郎だ」

思わず口に出してあせって撤回すると、峰の背後に誰かが立っているのがわかる。

逆光で顔が見難いが、少し目を凝らせばそれが最近ここに越して来

た人間のものだわかる。

「よお、そろそろ来ると思ってたぜ」

大野に招かれるようにして部屋の中に入ってきた女性は、意を決したように口を開いた。

「私に、翼をください」

「・・・ん」

見慣れない一室に、見知ったような友人と一緒にベッドにいるこの状況は一体。

ふらつく頭を右手で支えてここにいたる状況を思い出そうとすると、ズクリと脳裏を刺すような痛みが走る。

なんなんだ・・・

思い出すことも出来ずに途方にくれていると、部屋の扉が開いてリングをかじりながら歩く一人の男が部屋へと入ってくる。

「よォ、起きたか？」

二人が寝ているベッドから少し離れた椅子に腰掛けると、私に何も手が加えられていないリングが投げられる。

丸かじりしろとでも

どうせなら切ってよ、という願いをこめた視線を男に投げるが、男はその視線を受けながらも平然と話を始める。

「そいつがなんであそこに捕まってたのか、は興味ねえ」
捕まっていた？

男の口から出てきた単語に首をかしげていると、男は面倒そうにため息を吐いた。

「ショック性の記憶喪失か・・・厄介なモン拾い上げやがって・・・」

男はそう言うと、私の隣に寝ている友人をたたき起こす。

ふえあ！？という間の抜けた声を上げながら飛び起きると、私が起

きているのをみて嬉しそうに微笑んでいう。

「やっと起きたんだね。眠り姫……ん？ 眠り姫？ もしかしてヤイナさん……」

「キスなんざしてねえよメルヘン女」

友人の妄言をアホか、と切り捨てて答える男。

ヤイナ、とはどこかで聞いたことがあるような名前だけれど。

「どオもお前の友人な、ショック性の記憶喪失みてエだ。まあ事件前後のことは覚えてないンだろうがお前のことは覚えてるはずだ。頑張っと思ひ出させてやるこった」

男はそれだけいうと、部屋を出て行った。

そして隣に座る友人の顔を見ると、困ったような笑ったような顔をして口を開いた。

この顔は……確か

「ごめんね、志木」

哀しんだ顔だ。

救護されたのに（後書き）

自分を助けてくれた人が一番損をしているのって助けてもらった自分がかなり責任を感じますよね

新たな戦争

「こんにちわー」

カバンを提げたアキが何でもやの扉をくぐって入ると、そこにはヤイナの姿しかなかった。

「あれ、ヤイナさん帰ってたんですか？」

アキに声をかけられて、リングを齧っていたヤイナがアキに視線を向ける。

「ああ、野暮用があつてな」

そう言ってリングを齧りながら本を読んでいる姿はとても何か用事があったようには見えないけれど・・・

まあ終わったんだろう。

心の中でこの人はサボってないサボってないと暗示をかけながら、アキはヤイナに聞く。

「今日は依頼無いんですか？」

今日は、というよりも今日も、か。

どうせ無いんだろうなあと思いつながら聞くと、意外にもその答えはYESの肯定の一言だった。

「え、仕事の内容は？」

「お前薬局の場所わかるか？」

薬局？

そんなもののこの町にあるのかすら分からないと答えると、ヤイナはアキの持っているタブにデータを転送する。

すると、タブの上に立体の下町が表示され、現在地と薬局の場所が表示される。

「便利ですね」

思わず感想を漏らすと、大野は変態なんだ。と良く分からない答えが返ってくる。
どうということだ。

まあどうでもいいんだけど。

「で、薬局に何しに行けば良いんですか？」

「薬局行って聞け。ついでに包帯と抗生物質も買って来い」
そういわれ、300Gを渡される。

六万も渡すのか、包帯と抗生物質を買うためだけに。

「包帯三万と抗生物質三万だ。適当に買い漁って来い」
あっぱうとだなー

ヤイナの指示の仕方に呆れながらも了解し、家を出る。

すると、日陰ばかりのこの町には珍しく、冬を感じさせるやわらかい陽気がヤイナの家の前を照らしていた。

「そろそろ冬だなあ」

「翼をください・・・か」

二人目の妙な言葉を口にしたその目の前の人間はルイだった。

意を決したようなその表情に気おされるほど若い大野ではないが、それなりの決意があることは認められる。

「これを、ヘルディアっていう人に渡されたんです。大野さんに渡して翼にしてもらえ・・・って」

そう言って手渡されたのは手のひらサイズの赤く彩られた赤い剣。

「こいつも・・・」

感心したように、呆れたように嘆息する。

「一体なんなんだ？」

大野に手渡されたソレの意味することが分からない峰が、大野の手のひらを覗き込みながら聞く。

「これは俺がオリジナルを作るのに必要なコアっていうパーツだ。
コレを作るのはヤイナと・・・ヤイナの妹であるあいつだけだ」

「ちゃんと渡してくれた？」

あどけない少女がヘルディアに聞くと、ヘルディアは微笑んで頷く。
「うん。彼等は元気にやっていたよ。君のお兄さんも元氣一杯だったよ」

ヘルディアの言葉を聞いて、少女は満面の笑みをもってヘルディアをねぎらう。

「ありがとう！」

「これぐらいならお安い御用だよ。いつでも頼んで良いよ。ヘル」
そんなふうには、二人でほほえましい会話を交わしていると、一人の女性がその会話に入ってくる。

「おそれながら女王陛下」

かしづいてそう言う女性は、鎧に身を包んだ女騎士だ。

「なに？」

純白のドレスに身を包んだ女王陛下と呼ばれたヘルは女騎士の報告を聞く。

「オールドクラスが動き始めたようです」

その報告を聞いて、いままでの朗らかな笑みは一瞬で消え去り、そこには緊張した表情が浮かぶ。

「・・・そう」

明るい声から、一転して冷たい声へと変貌する。
豹変、といった方が正しいか。

「あの鉄臭い連中、戦争でも始める気かしらね」

両手を組んで顎を支え、独り言とも取れない言葉を口にする。

「いいわ。新参の若造共々、今度は誰にも邪魔させずに潰してあげる」

神秘に現実が勝てるわけないでしょう

そう言って、はためくドレスを手で押さえながら玉座を立ち上がり、

眼下に並ぶ百万の兵士に向かって告げる。

「各員、戦闘準備をしなさい。連中が敵対するというのなら、ヤイナに危害を加えるというのなら是非もない。飛び掛る火の粉は払うのみよ」

「全軍————出撃」

誘拐

「いっててて……」

体にできたいくつもの傷に、Fクラスの委員長が包帯を巻いてくれているのだが、これがまた不慣れなのかとても痛い。

「ご、ごめん」

そう謝りながらも、おそろおそろといった様子で処置を続ける。

「いや、ありがたいよ」

処置が終わってお礼を言っていると、どこへ行くともなくFクラスの中で二人佇んでいた。

そもその原因……

この傷の原因は、やっぱりヤイナたちを逃がしたことだった。

それが原因で保安局に捕まり拷問。

「拷問なんてこの時代にやることじゃないさね……」

はぁ、とため息を吐きながら愚痴を漏らす。

三日にわたる取調べは、何の成果も得ることはなかった。

それはモンキがやったことがただ単にルート of 検証というだけであって何処にハッキングしたわけでもないからだ。

ただ単純にここいら一体の地理に精通した男が一人、友人に手を貸した。

ただそれだけで済んだのだ。

少なくともこの時は。

「良いヒーローが居るじゃないか……うん？」

日の国の一番高い塔の上、モンキたちを見下ろす大男が一人。

その大男は、モンキたち二人に近寄る黒いスーツに身を包んだ男が二人いるのに気付いた。

「さ……て。あの黒服はプロ……だよなあ。手を貸そうかなあ。貸さないでおこうかなあ……」

「おいおい……公的に開放しといて後で処理ってか……笑えないな……」

委員長と二人での下校時、学校をでてしばらく歩くと二人の黒服に通路の前後をふさがれてしまう形に立たれてしまった。

日の国がここまで腐ってるとは予想もしてなかった。

心の中で隣に居る委員長を巻き込んでしまったことを悔いて齒軋りする。

「委員長」

ボソリ、と小さく隣に居る委員長にささやきかける。

「合図をしたら後ろに本気で走って。目を瞑りながら」

一体何をするつもりなのか

そう聞くまもなく、モンキは右ポケットからシャーペン二本指の間に挟んで取り出す。

「今だよ！ 奔れ！」

そう叫びながら、振り向きざまに後ろに居る男の両の目にシャーペンを投げつける。

この距離でこの不安定さであたるのか。

その不安はあったがここは自分の腕を信じるしかない。

ヒュ、と空気を切り裂いてとんだシャーペンはまっすぐに男の両の目を貫いた。

よし！

思わず心の中でガッツポーズをとると、背後に居た男が齒軋りをして襲いかかる。

両手を振りかざして捕まえようとするのを逆手に取り、懐にもぐりこむ。

ためらいもなく金的をかまし、二人の男を両方とも倒したとそう思った瞬間。

ドス、と右肩に鈍い衝撃が走る。

何だ、と思って後ろを振り返ると、そこには黒光りする小さな拳銃を構えた男が横たえながら銃を撃ったのだと分かる。

目が、潰れているのに・・・？

その疑問が解消されることなく、モンキの意識は薄れていく。

とにかく・・・

今は、あいつに連絡を・・・

あいつに・・・！

ゆっくりと、動かない指を無理やり動かして、携帯でメールを打つ。

たすけ

そこまで打って、腕ごと携帯を踏み潰される。

もはや潰された腕の感覚も消えた。

もう————だめだ。

消えていく意識の中、モンキは委員長に謝った。

巻き込んで・・・ごめん

薬局についての仕事は地面にある重い荷物を棚の上に持っていくというものだった。

こんな雑用もこなすのが何でも屋である。

これと言って不満があるわけではないが。

ふう、とため息を吐いて一息ついていると、ピリリ、と聞きなれない携帯の着信音のような音が耳に響く。

ん？

と首をかしげながら周囲を見るが、どこにもソレっぽいものがない。何だろう、とそのままスルーしようかと思ったが、もう一度ピリリ、と鳴る。

近いな。

そう思って音の出所を探すと、どうも真下・・・ああ。

これか。

タブレットを取り出すと、画面に小さいウィンドウが浮かんでいて、そこにこう文字が書かれていた。

見慣れたメールアドレスの下に、一つの文章ともよべないような、単語。

たすけ

「モンキ・・・？」

剣のアクセサリーを受け取ってなにかしら加工をし終わると、大野はルイに返した。

「え、もう終わったんですか・・・？」

疑問を抱えながら受け取ると、それは既に剣の形をしておらず、ディスクのような物体へと変化していた。

「これがオリジンアルマ二号機”焰”だ」

焰。

その名の通り、ディスクは深紅に染まっている。

けれどもこれは・・・

「アルマ・・・っていうのはアクセサリーの形をしているんじゃない・・・？」

アルマを知っているなら誰でも知っているような常識のはず。

しかしこの目の前に居るアルマ開発者は、そのアクセサリーを加工

して、ディスク状にしまった。

「それは・・・ある意味正解で、ある意味不正解だ」

大野は槌などの工具を片付けながらルイに説明する。

「そのアクセサリーの状態は、言ってみれば加工前のダイヤモンドみたいなもんさ。」

まあ、本物を作るのはヤイナとヤイナの妹しかいないから連中が使ってるのはまがい物。

人口ダイヤモンドってところだ。

人口ダイヤモンドほど上手く出来てはいないが。

「そうだな・・・例えるならまだ亜鉛か。連中が使ってるアルマッて奴は」

つまりそれは天然はおろか人口ダイヤモンドにすら程遠い。完成はおろかスタート地点にすらいたっていないというのだ。

それを技術が全く進んでいなかった30年前に完成させてしまったという。

この男は一体・・・

「使い方は―――」

ピリリ

電話の着信を知らせるタブレットの取り出して耳に当てると、張り上げたアキの声が耳に響く。

何かハプニングがあったんだろうが、それにしてもうるさい限りだ。

「なんだよ落ち着いて話せ」

そういさめると、少し大人しくなったアキは言った。

『俺たちがここに逃げるのに協力してくれた友人に、何かあったみたいなんだ』

凱旋

「日の国、だな？」

透き通った青いミニバンの運転席に乗って、ヤイナは確認する。

「え、あ、うん」

突然の展開についていけないアキが歯切れの悪い答えを返すが、それだけでも目的地の確認には十分な言葉だ。

「じゃあ、行くぞ」

ガコン、とギアを変えてゆっくりと車は出発した。

車に乗り込んだのは、アキ、ルイ、ココ、木下、峰、大野、ヤイナ。言ってみれば下町の主要メンバー全員だ。

大野達は色々な買い物ついで、という理由で付いて来ている。

クネクネと曲がりくねった暗い道を安定して運転するその様は、とてもあんまり運転していない初心者のもではない。

「ヤイナさんって・・・運転も出来たんですね」

アキが驚いたようにそう言うと、ヤイナは肩越しに眼だけを後ろによこして答える。

「んま、こんだけ長く生きてりゃあな」

そういいながら、しばらく建物の森を走っていると突然、日の当たりが良い場所に出た。

そこは建物が一切無く、木々が生い茂っている。

まさに自然そのものが残っている場所だ。

「え・・・？」

建物の森からそのまま外殻に行くものとはかり思っていたアキ達はそろって声を上げる。

少し周りを見れば、シカやうさぎが元気に跳ねている。

大きな湖の端では釣りをしている人さえいる。

20世紀ですらなかなかお目にかかれなかったここまでの自然がまだ残っていたなんて。

驚いたように回りを見渡していると、3 km程進んだところで、聳え立つ外殻に当たった。

その根元まで行くと、穏やかそうな老人の警備員が、笑顔でミニバンを迎える。

「おやおや、久しぶりだねえ。ちゃんとした方法で日の国に入るのは」

穏やか過ぎて、今が戦争中だなどと微塵も感じさせないこの風景を守っているのはその老人が話しかけている本人だ。

「ちょっと後ろの奴らが用あるってンでね。俺はただの足係さ」苦笑いしてそう言うと、ヤイナは懷から何かを取り出して老人に手渡した。

「はいよ、通っていきな」

老人がそう言うと、ガチャリ、と外殻の扉がゆっくりと開いてヤイナたちを招き入れる。

「ありがとサン」

一言礼を言って窓を閉めると、ゆっくりとエンジンを始動させて進む。

外殻を越え、中へ入ると雰囲気が一転。

懐かしい空気に体が包まれるような気がした。

「久し、ぶりだね」

ポツリとルイがこぼしたその声に、アキ達は無言で頷く。

もう帰ってくることは無いと思っていた場所。

妥協でも負けたわけでもなんでもない。

救出。

ただそのためだけに。

僕達は帰ってきた——否、来たんだ。

READY SET

「ンじゃあ、俺たち三人は適当にそこらへんに居る。用が終わったンならタブ使って連絡しろ。良いな？」

車から出て、ヤイナはアキ達に釘を刺す。

ここでお前等がどういった行動をとろうが俺は責任を取らないぞ、と。

「保護者無しで過ごしている時点で下町では何歳だろうが立派な成人ととられる」

後悔したくなるような行動をしても、拾い上げて再び空に放つてくれるような人間はもう居ないぜ

そう言って、ヤイナは大野と峰を引き連れて路地へと吸い込まれるようにその場を離れていく。

だんだんと影に吞まれて姿が薄くなるヤイナを見送ると、スイッチが切り替わったように四人の表情が引き締まる。

「よし、じゃあ各自情報収集と独自先行で、良いね」

ふう、とため息を吐くと、アキは最後に一言を付け加える。

「あくまでも市民には穏便主義だった日の国がここまでやってるってことはそれなりに覚悟を決めているってことだ。全員、無事に元に戻るように」

殺し殺される覚悟は出来たか、と暗に意味をしたのだが、今まで平和な日の国しか知らなかったその場に居た人間はいまいちその意味を掴みきれていなかった。

暗い会議室、一人の男が不敵に笑う。

「ふん、ねずみが侵入——排除するか？」

男がそう言うのと、男の正面のディスプレイに写る小太りの狸のような人間は答える。

「行けるのか・・・？日高の殺戮者とも呼ばれる、ヤイナ フレイニアだぞ」

依頼主たる男のセリフに、第三次世界大戦を休戦に追いやった一つの戦いを想起する。

日高というただっぴろい平原に両国の全てのアルマ、全ての兵器が集結した。その日。

当時の人間は全員が相手を負かすことを考えていたために相手に勝つこと意外を全て排除していたが、もしあの場所で大規模戦闘が行われていたのなら。

そういえばどうなったんだろうな、と思った学者がシュミレーションデータを公表した。

結果。

地球の約三分の一が、削り取られていた。

あまりに大きなエネルギー体であるアルマが同時に四つ以上爆発すると、アルマのエネルギーが相乗効果をもたらしその爆発力は約100倍にも増える。

そしてその爆発が更に相乗効果をもたらしたのなら。

シュミレーションデータが一回で、かなり乱雑にやったために地球の三分の一で済んだが、かなり綿密にシュミレーションしたのなら、地球が半分削れていても仕方ないだろう。

なぜならあの場には。

数千ものアルマと、敵兵器をいっそうするために作られた超巨大爆撃砲が設置されていた。

ソレが意味するのは。

超巨大爆撃砲が発射された瞬間に、地球が終わる。

その事実をいち早く察知したウィザードが日高に参入。
そして、数万の命と引き換えに、最低でも地球の三分の一に住む何
億人もの命が、救われた。

一部始終を想起して、男は鼻で笑う。

「大げさな伝説さ。古錆びた人間には早々にご退場願おう……
この世界はもう、お前等の時代では、無い」

夢を見て空に浮かぶ人間を、現実という地面に叩きつけてやるさ。

「さあ、始動だ」

ヤイナに殺気を直に喰らって幾分か氣勢が抜けてしまった嗤う骸骨
楽団のリーダーだったが、彼はそれをものともせず二人に指示を
出す。

「幼い羽ばたきが世界を変えるところを、連中に見せてやろうじや
ないか」

「フフフツ……世界の組織という組織が動き出したね……？こ
れは空を汚すのか、清浄するのか……、さあ、第五戦線が、そろ
そろ始まるよ」

S E T

青いミニバンを出発して既に20分、現状は最悪と言うべきなのか

も——知らない。

Fクラスの委員長と名乗った女性と出会った。彼女から得られた情報、彼は既に施設へと送り込まれていた。

その施設の名前とは。

特異Sクラス

「嘘・・・でしょ？」

委員長からその単語を聞いたココは、既にモンキを救うことを半分あきらめていた。

ヤイナは別の用事があるといっただこかへ行ってしまった、今は荷物もちである峰と大野二人だけが買い物をしていた。

・・・

俺がこいつのこと苦手だって事知ってて二人にするからまったくやってられないぜ・・・

はぁ、とため息を吐くと、ソファの品定めをしていた峰が怒ったような、困ったような表情で大野を見る。

「大丈夫、かな」

一瞬値段が、という意味かと思ったが、この場合はアキ達の事だろう。

「ま、大丈夫じゃねえの」

あっさりとそう返すと、峰はまだ心配そうに言葉を続ける。

「やっぱり助けに——」

峰がそういいかけたところで、大野は峰のその先の言葉を言わせまいととめる。

「心配なのは分かるけどなぁ、お前、ヤイナの性分をまだ分かった

やいないみたいだな。基本的にあいつは人につめたい。確かにそれは認める。でもあいつは身内には優しいんだぜ」

既に数えるのも面倒な年月を共に過ごしてきた大野にとって、ヤイナの今の行動は予想通りだった。

彼は、必ずアキ達の窮地に救いの手を差し伸べるだろう。

そして、俺達も――

「僕はね、君達をここに入れるのもやぶさかではないと、そう思ってるんだ」

特異Sクラス。

そこはアルマを使える事が前提条件としてあるクラス。

そこには、様々な才能を持った人間が集結する。

その特異Sクラス校舎正門にて、アキたち四人は特異Sクラスの人間の一人と、会話していた。

「なら、通してくれないか？」

アキがはやがねを打つ心臓を沈めるのに必死になりながら、そう口にする。

・・・

下町で何回か戦闘を繰り返してある程度の戦闘能力値を得て、分かる事がある。

下町で相手にした連中はただの素人で、目の前に居るこいつらは、その道のプロであるという事が。

慎重80cmはあろうかというその男は、伸ばし放題な髪を邪魔そうに払い、腕組みをしてアキを見下ろして言う。

「けれどもそれは僕自身の意見としてであって、組織としては君を通すわけには行かないんだ」

男にそういわれ、一旦退くべきか、脳裏でその選択肢を取ろうとし

たとき、タブレットに一通のメールが来る。

こんなときになんだ、と思いながらも、視界の隅に浮かぶメールアイコンを視線だけでクリックする。

ついさっき見つけた変態機能の一つだ。

ポロン、と軽快な音を立てて開いたメールに記されていた文章は、簡略にアキ達をせかすものだった。

ジョイントミスのチルドレン、覚えてるよな？

その一文だけで、ヤイナが何を言おうとしているのかを把握する。つまり現状ここで撤退という選択肢を取る事は出来なくなったと、そう言うわけだ。

急がば回れ。

そんなセリフもあつた気がするが、ここまで切羽詰ってしまったのはどれをとっても同じだろう。

「じゃあ、力づくでどう？」

全く同じ台詞を言おうとしたところで、その台詞をルイに取られてしまう。

「お前——」

どういうつもりだ、そういうおうとしたところで、自分で自分を制する。

自己犠牲精神は、誰のためでもない自分のためだろう。奴らがやりたいというのならやらせてやれよ。

下町での経験で生まれたこの言葉が、アキをすんでのところで制止させる。

「わ、分かった——頼んだ」

アキ達はそう言うのと、大男の脇を素通りしていく。

行かせない、と大男が振り返って止めようとするのを、ルイが声をかけて止める。

「あんたの相手は・・・この私よ。でかいの」

ギュ、と右拳を握り締めて大男を止める。

初めての、戦闘。

命の安全が保障されたルール上での格闘技じゃない。

命が掛かった真剣勝負。

緊張しないわけがない。

ゆっくりとふりむく男を見据えながら、早鐘を打つ心臓を一生懸命に鎮める。

フウ、フウと規則正しく呼吸を繰り返しているうちに、次第に心臓の鼓動がゆっくりと通常の鼓動に戻るのをはつきりと感じ取れた。緊張を自分のものにした瞬間だ。

「終わったか？」

余裕のある表情でその場に立っていた男に声をかけられて、ルイは笑って答える。

「ええ、おかげさまで」

同時刻——外殻の上にて。

「やあやあ全く下町の人間がここに出てきてるとは驚きだね」

間の抜けたその声を出す男の隣に、小さな女性が風に髪をなびかせて立っている。

「そうね、メルティ」

大して興味もなさげに答えるその少女の名は、ティリアという。

そこまで長くはない髪を両サイドで結んだピンク色の短いツインテールを揺らして外殻の上に座る彼女は、いかにもといった感じの無気力さを感じさせる。

「それにしても、何で私が？面倒なのよ、外に出るの」

ハア、とため息を吐きながらそう言う様はとてものだるそうで、とてもアウトドア向きの活発な人間とは思えない。

「一応、僕達の目的は世界の破滅という厨二真っ只中な男子でも思

わないような目的さ。しかもそれを割りときまじめにやろうとしてるんだ。だったらそろそろ活動しないと破滅させる頃には僕達はヨボヨボになっちゃうよ」

「そんな目的追ってるのアンタだけだって、絶対」

「それは困るなあ」

たはは、とリーダーの面影なく笑っていると、ふとメルティの視線が陰しくなる。

「どうしたんだい？」

何事かと思って聞くと、メルティが口にした。

「あいっ——」

彼女の視線の先には、ワールドランク第18位の男が一人。

「ねえメルティ。気が変わったわ。私今からちよっとやる気出してこの国滅ぼしてあげる。共倒れも良いかもしれないけど、こうやって暴れるのも・・・良い物よね」

そう言って嗤うティリアの口は、半月をかたどったように綺麗に、狂気に染まっていた。

「へえ、案外この国の先鋭兵士も暇人が多いんだな」

買い物袋を車につめた大野は、周囲に峰以外に誰も居ないのに口を開いた。

しかしそれはただ単に峰に見えていなかったというだけで、確かに敵はそこに居た。

「しかも二人とはね。」

そう言って振り向いた大野は誰も居ないはずの空間に向かって話しかける。

「出てきたらどうだ？」

大野がそう言うと、大野がずっと凝視していた場所がうっすらとゆがみ、そして人が二人、現れた。

「よく、分かりましたね」

深紅の髪を携え、四肢をがちり装甲で固めた女性が感心したように呟く。

「なに、あいつが幽霊を肯定する存在なら、俺は幽霊を否定する存在だって、ただそれだけの事さ」

「始まる始まる始まるねえ♪」

誰の翼が折れて、誰が羽ばたく・・・否、誰が飛ぶのかな？

FIGHT

FIGHT———

日の国を舞台に、様々な人間が敵として対面している。

そんな折、ゴング代わりとなったのが。

『もし戦闘になったら、このディスクを拳で思い切り叩くんだ』
脳裏に、はっきりと大野の声がよみがえる。

この深紅のディスク。

これが私の——翼。

「行くわよ」

そう言って、ディスクを上になく放り投げ、自分の目の前まで落ちてきたディスクに照準をあわせ、思い切り右拳で叩く。

次の瞬間。

まばゆい閃光がほとばしり、何かが割れる音が、甲高く響いた。

閃光消え、視界がはっきりとしたときに真っ先に目に入ったのは、真っ赤な目の前に浮かぶ文字だった。

” 焰零式 ”

それが、ルイの武器であり翼の——名前だった。

深紅の足を包む巨大な装甲。

両の手を包む手の甲の上に位置する部分は尖った円形状の筒。

その中にある手は、薄い紅い装甲で包まれていて、拳には紅いグローブのようなものがはまっている。

ここまでは良い・・・が。

肝心の武器がない。

そう疑問に思った次の瞬間には、目の前の男はアルマを装着し、今まさに巨大な槌を振り上げていたところだった。

「・・・・っ！」

慌てて後ずさりしようとする、少しだけ飛ぶつもりが、一瞬で30m以上の距離が開く。

なんていう出力なの・・・

自分の装備しているアルマのとてもない出力に驚きながらも、武器を探して体をまさぐる。

しかしその何処にも武器になるようなものは着いていない。

ここまでできてまさかの詰みか、そう思ったところで視界の隅に一つの剣の画像が表示され、女性の声が脳裏に響く。

『頭で粒子が体から噴出しているのをイメージして！』

え、え、何なにどういうことなの

思考が追いつかずに何をして良いか分からずたじろぐが、視界にこちらへものすごいスピードで迫る男を捕らえ、動揺している暇は無いと判断して一旦呼吸を落ち着かせる。

頭で、粒子が体から噴出しているのをイメージ・・・

カチン、と何かのスイッチが入ったような気がした。

その瞬間に、体の回りを金色の粒子が漂う。

『上出来よ。そうしたら次はその粒子が右手、左手どちらでもいい

わ。どちらかに集まって剣をかたどってるようなイメージをして！
時間がないわ急いで！』

女性に急かされる様にして、右手に剣をかたどるイメージを作り出す。

すると、一瞬の瞬きをする間に右手にはイメージそのものの剣が出現していた。

「え・・・？」

なんで、と思う暇もなく、脳裏の女性が叫ぶ。

『驚いている暇は無いわよ！敵の攻撃の衝撃波、あと五秒で到達するわよ！自分の正面に粒子で壁を作って！』

再び思考が追いつかないままに、自分の前に粒子で透明な壁を生成する。

あわてて作ったせいか、粒子の壁は縦横どちらも5mほどもあるような巨大な壁が作られた。

そして、丁度五秒後。

ズン、という大きな音を立てて壁に衝撃波がぶつかり、衝撃波が四散する。

「これ・・・すごい」

思わず感心して呟くと、ソレを叱責するように女性が叫ぶ。

『感心してる暇も無いわよ！敵、来ます！』

女性の声に弾かれるようにして顔を上げると、すぐ近くにまで敵が近づいていた。

緑の装甲を纏った男は大きな槌を振り上げている。

振り下ろす予備動作が終わっている――

『頭で自分の背中でもどこでもいい！とりあえず体のどこかにあるブーストが爆発したようなイメージを作って叩きつけて！』

どこでもいい。

その言葉を聞いて、とりあえず左肩にそのイメージを”思い切り”叩き付けた。

すると次の瞬間。

世界が崩れ、気付いたときには槌を振り下ろした男から100mはなれた場所に立っていた。

『体感したわね。想像したときの強さによってブーストの出力は変わるの。基本操作はこれぐらいよ。それと離れたから説明しておくわ。大きな注意点が一つあるの。それはまだあなたの体にこの焰零式が適合しきってなくて、粒子の数が制限されているって事。粒子がなくなれば一回武器を壊されたら修復できないし、壁も作れないしブーストもつかえない。まあかなり多くあるからたぶん大丈夫よ。これで説明は以上よ。後は敵を・・・倒すだけ』
もう少し早く言ってほしかったと言いたい所だが、あの状況では仕方ないだろう。

「これで・・・準備完了・・・って事ね」

ゴクリ、と生唾を飲み込む。

本当の意味での闘いが今、始まる。

ずっしりと重量感溢れるゆったりとした動きでこちらへ向き直ると、男はゆっくりと槌の頭を頭上に振り上げる。

何をするつもり？

脳裏でそう疑問符を浮かべた次の瞬間。

ドン！と槌を思い切り地面に叩き付けた。

刹那。

地面を衝撃波が這うようにしてルイに襲い掛かる。

「さっき壁で防御したやつ・・・か」

必要最低限の防御で済ませたいが、この衝撃波自体が初めてなので物をぶつけて攻撃をかわすのは得策ではないだろう。

つまり。

必要最低限の出力で、けれどもギリギリの線からは余裕を持って、かわす。

ソレが今私に求められている技術。

いや・・・待って？

頭に、とある作戦が浮かび、ルイはそれを採用した。

「さあ、反撃よ」

ルイはそう言って、ギリギリまで地面を這う衝撃波をひきつけ、大きめの壁を”わざと”もろく細かい隙間を作って生成した。

そして、衝撃波との衝突。

ドン！と先ほどの堅牢な壁とは違って呆気なく壊れた壁は、土煙を盛大に巻き込んで撒き散らした。

視界がさえぎられるほどに濃厚な土煙の中から、ルイは地面を蹴り少し斜めに飛び出す。

そして両足の足の裏と、両肘を後ろに突き出し、その四点全てにブーストを叩きつける。

ドン！とすさまじい音を響かせての突進は、呆気なく後ずさりをするのでかわされるが、しかしルイの攻撃はここからが本番だった。

「手本、ありがとうね」

極限の集中により時間がスローに流れる中、男はルイが笑うのをはつきりと視界に捉える。

ドン！と地面にすさまじい勢いで着地したルイの周りに、突風が吹き荒れる。

着地と同時に体を捻っていたルイは、右手に持った剣に突風を粒子で導いて纏わせ、捻っていた体をはじくようにして元にもどし剣を下から右斜め上に切り上げるようにしてなぎ払い、剣に纏った突風を吹き飛ばす。

瀟、と綺麗な音が鳴った刹那、男の正面の表皮が真っ二つに切り裂かれた。

飛ばされた剣戟が男にぶつかり爆発して周囲ごとその場を抉り取る。近くにあった学校の石壁を巻き込んで爆散したのを見て、ルイは判断する。

「勝った・・・かな」

ふう、とため息を吐いて緊張を解こうとしたその瞬間。

『馬鹿！緊張を解かないで！死ぬわよ！』

脳裏で女性が絶叫したのに弾かれるようにして顔を上げると、すぐそこには槌が迫っていた。

「しま・・・っ！」

慌てて両手で顔をかばう様にして覆った次の瞬間。

ベギ、と嫌な音を耳に響いたと思うと、足から地面の感覚が消え、そして視界が反転。

次に気付いたときには近くの打ちっぱなしのビルに叩きつけられ、地面に倒れていた。

「なに・・・が」

何が起こったのかはつきりとは分からないが、憶測は出来る。

恐らくとてもないスピードで肉薄され、その勢いを利用しての槌での打撃。

彼は完全なパワータイプだとばかり思っていたがこんなところに誤算があったとは。

彼は完全に――――

「スピードタイプだよ」

ヴン、と空気を震わせて現れた男はその台詞を口にしながら槌を振り上げてルイの腹部に思い切りめり込ませる。

メゴツと金属がへこむ嫌な音が耳に障る。

・・・勝て、ない

空中に浮かびながら、絶望感に打ちひしがれる。

アルマを手にしたところで、史上最強と言えるかも知れない武器を手に入れたところで、操る人間が弱ければ、結果は同じだ。

私はもう、勝てない。

ドスン、と地面に着地し、起き上がる気力もなく地面に横たわる。そして近寄る男を視線に捕らえるが、そのまま何をするでもなく、横たわったままだ。

『あなたは、また。無力に負けるのを良しとするの？』

女性の言葉が、脳裏に響いたその瞬間に、燃え盛る何かが胸の内を焼いた。

ゆつくりと振り上げられる槌を見ながら、ルイは思う。

また、あの日みたいに、無力に負ける。

あの日。

両親が死んだ、あの日。

「————いやだ」

ボソリと呟いた次の瞬間、男の手にあった槌は振り下ろされた。

しかしその槌が肉を砕く事はなく、砕いたのは乾いたコンクリートただそれだけだった。

あの一瞬でかわしたのか

驚きをこめた表情を顔に浮かべて顔を上げると、10mほど前に肩で息をしたルイが立っていた。

「もう、負けられない。負けたくないのよ」

ガシュン、とアルマの各所から、蒸気が噴出され、ルイの周囲に浮いていたパーツが次々にルイの体に装着されていく。

「焰零式改め————」

『フェニックス』

「再起動————。」

FIGHT (後書き)

やっところさルイさん始動です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2661x/>

Blue Sky

2011年11月18日07時49分発行